佐々木君のこと

1．佐々木君の思い出

言葉があふれてうまく気持ちがまとまらないのだけれど、でも書こうと思って筆をとっている。私は佐々木君の前任者として２年間メルーで人口局に勤めていた。佐々木君とは引き継ぎのために１週間しか会っていないのだが、私の職場、家、家財道具、それからメルーの友人たちを引き継いでもらったので、わずか１週間の付き合いの人という気がしない。

佐々木君がケニアについたすぐの任地訪問のとき私は一緒についていって、わずか３日で仕事その他の引き継ぎをばたばたとこなした。そのとき、メルー市から20キロ程ケニア山側にはいったキビリチア村落に、彼を案内した。そこは人口教育促進プロジェクトが村落開発プロジェクトのパイロットビレッジに指定した場所だ。キビリチアはメルー市との標高差が 800メートルもあり、往きはローカルマタツを使い帰りは８キロ程山道を下って、メルー～ナニュキ間の国道までを歩いた。

その道はものすごい急坂のラフロードなのだがとにかく絶景で、天気も良かったし、２人でいろんな話をして山道を下った。私が帰国間際だったこともあり、協力隊を終えた後、どういう人生を送りたいかということが話題になった。佐々木君は協力隊を終えても援助関係の仕事がしたいと語り、私は、それならイギリスかアメリカの大学院にいったらいいよ、と助言した。そして私は「いいねえ、君は若いしとびきり頭もいいし、世界のどこまでだって行けるよ。」といって彼の肩をばしばしたたいた。２人とも新しい人生のステージの始まりに立って、胸の中には夢と希望しかなかった。

その道で土地の人が荷車を横転させて難儀しているのに行き合った。２人で走っていって荷車を起こすのを手伝った。「ハラーンベー！」「ハラーンベー！」と５～６人のケニア人と声を合わせて荷車を起こした。私が「ハラーンベー」のかけ声とともに「ファイトー」というと、佐々木君は「いっぱぁーつ」と答えてにやりと笑った。

2．前任者として

ものすごく迷ったけどやっぱり書こうと思う。これはやっぱり書かなくてはだめだ。

キビリチアからの帰り道のものすごい急坂のラフロードは私が任期中、キビリチア集落の社会調査のため、毎日バイクで通った道でもあった。とにかく激しい坂道なので往きの上り坂ではギアをロウにしても上れず、クラッチ盤を滑らせながら上った。それでもエンジンが止まってしまい、ずるずると後ろ向きに滑り落ちてしまったこともある。この話を佐々木君にすると、「あぶないなあ。50ccのバイクではとても無理な仕事ですよ。僕は、125ccのバイクを特別に支給してもらえるよう事務所に頼んでみようと思います。」と言った。私は「それは難しいと思う」と応えてしまった。「前任者が50ccのバイクでも仕事できることを証明しているし、事務所は特例を認めたがらないからねえ」とまで言ってしまった。それでも彼は事務所に申請してみると言った。

その後、彼が、125ccのバイクを申請したのかどうか私は知らない。もし申請していたとして、事務所がどのような対応をとったのか、それも知らない。いまだから言えることかもしれないが、もしその申請がなされ、そして通っていれば佐々木君は死ななかった。今私は強烈に悔いている。彼が、125ccのバイクが必要だと言ったとき、何故もっと肯定的に賛同してあげなかったのか、それ以前に私の任期中に50ccのバイクでメルーで暮らすことの危険性を何故私自身が訴えなかったのか。

「佐々木君が坂道でローリーを追い越そうとした。」こうきいてある人々は「追い越しなどせずにゆっくり行けばよかったのに。」と言うかもしれない。しかしメルー～エンブ

間のあの道ではゆっくり行くことができないのだ。あの道をバイクで１度走ったことのある人はわかると思うが、あの道のアップダウンの激しさはとにかく半端ではない。あの道を横切る形で、ケニア山から流れ出す川がいく筋か谷を作って流れているが、橋は常に谷底に架けられる。橋の長さを最短にするためだろうと、土木の知識のある友人は言っていた。その結果、道はいったん谷底まで降りて、また数十から数百メートルの標高差を蛇行しながらのぼっている。そこを50ccのバイクで走り抜けるには、下りのときに最高速度を出し切らないとうまくいかない。ゆっくりと前を走るローリーに合わせていては、50ccのバイクではオーバーヒートしてしまう。

オーバーヒートしたら、１時間でも２時間でも止まってエンジンを冷やしていけばいいと言う人もいると思う。しかしそういう坂が何か所もあるのだ。そして事故現場はメルーとチョゴリア病院の間だと思うのだが、メルー人口局勤めの隊員はチョゴリア病院までは仕事で日常的に往復せねばならない。仕事中にそんなに何度もオーバーヒートを冷ましていられるだろうか。バイクに乗らずにプジョー・マタツに乗れ、と言う人もいるかもしれない。しかし私はわずか２年の間にプジョー・マタツ・大型バス（ニャヨバスでした）等の事故をいくつ目撃したかわからない。バイクの方がまだ安全というのが私たちの共通見解だった。またメルー～ナイロビ間を何台も走っている Miraa運搬車はメルー市の奥のマウア地区で取れる Miraaを２４時間以内にソマリア、ロンドン等へ出荷するために、３００キロのマウア～メルー～ナイロビの道程を２～３時間で駆け抜ける。新幹線こだまに匹敵するスピードであの山道を駆け抜けるのだ。

メルーの交通事情をつらつら書いてしまったが私が言いたいことは、

⇨ 山間部の隊員にはもっとパワーのある、例えば 125ccのバイクを貸与してあげてほしいこと

⇨ 報告された事故状況を元メルー隊員の立場から分析して、佐々木君にはほとんど過失がなかったこと、あったとしてもそれは道路構造とか、Miraa 運搬車の無法さとかバイクのパワーのなさに問題があったのだということ

である。

私は無理を承知でメルーでの２年間を50ccで過ごした。今思えばそれはものすごく危険なことだった。今こうして無事でいられるのは運がよかったからにほかならない。でも当時は「無理を承知で我慢するのが協力隊員」であると本気で思っていた。異議を申し立てて、愚痴が多いとか、わがままであるとか思われるのが怖かったのかもしれない。でも "我慢" という古い協力隊員の美徳は必ずしもいいものではないのかもしれない。現地の情勢を把握するのが難しい事務所に危険の所在をはっきり申告するのもまたあるべき協力隊員の姿勢であり、そして事務所は隊員の申し立てを "わがまま" とか "ぐち" と思わずにどうか暖かく受け止めてやってほしい。

３．おしまいに

羽田空港での佐々木君のお別れ会のとき、佐々木君のお父様の言葉に本当に涙が止まらなかった。途上国で働きたいという息子や娘の気持ちを理解して送り出してくださるご両親をあんなふうに悲しませるのは本当に本当につらい。

どうか佐々木君の御霊が安らかでありますように。

どうか佐々木君のご両親の悲しみが少しでも慰められますように。

そしてどうかもうだれも死んだりしませんように。

――― 心から祈ってやみません

４年度１次隊　社会学　メルー　落合知子

「ナイロビ最後の夜」

「日本へ帰ったら絶対学校の先生になって下さいね。鈴木さんが先生だったら楽しいだろうなァ。それから鈴木さん、涙は心の汗だよ！」

教師を目指し、泣き虫の僕に佐々木くんがくれた言葉です。

その夜、ドミトリーで僕たちは酒を飲みながら話をしました。そして、西村さんもいつものように元気よくソファーに座っていました。僕はタスカーを飲み、佐々木くんはＢＯＮＤ７を飲んでいました。西村さんは元気よくソーダを飲んでいました。

話は、ＪＯＣＶカレンダー表紙の西村さんの写真からはじまりました。１９９５年度版のカレンダーができあがったばかりで、その一枚が壁に張ってあったのです。その表紙の中の佐々木くんと西村さんと僕の写真はちょうど並んでいました。

西村！この写真の顔はデカイなァ、と佐々木くんが語れば、僕はうんうんとうなずき、西村さんはケラケラと笑っていました。

そして、僕がセカンダリースクールでの性教育について語れば、佐々木くんはコンドームを語り、佐々木くんがフィルムショーの話をすれば、僕は校長の汚職の話をしました。西村さんは元気よく笑っていました。

やがて、話はあちこちと旅を続け、僕たちのこれまでの境遇や広島のこと、男と女の話になったりしました。もちろん西村さんは元気よく笑っていました。

佐々木くんの任地メルーと僕の学校のあったタイタとは、ナイロビを経由して５００キロ以上も離れており、任期中にこうしてゆっくりおしゃべりする機会はこれまでありませんでした。なかでも、佐々木くんと僕の共通の話題は「教育」でした。教育社会学を専攻した佐々木くんの話は、教師を目指す僕にとっても興味深いものでした。

佐々木くんの話と西村さんの笑い声を聞きながら、僕は酔った意識の中で帰国後のことについて考えていました。

そして僕が「帰国したら採用試験の勉強しなきゃいけないんだよなァ。すっかり数学忘れちゃったからたいへんだよ。」

などと佐々木くんにぐちをこぼすと、「がんばって下さいよ、ケニアの生徒たちがいるじゃないですか。」と彼は言い、そして次の言葉が続きました。

「日本に帰ったら絶対学校の先生になって下さいね。鈴木さんが先生だったら楽しいだろうなァ。それから鈴木さん、涙は心の汗だよ！」

佐々木くんが愛したケニアやアフリカの事を日本の子供たちに伝えていくために、僕は今死にものぐるいで教採の勉強をしているところです。

追伸　あの夜のことは今でもよく覚えています。
帰路変更でダルエスサラームへ向かうケニア航空機が、例によってフライトキャンセルになり、出発が２日ほどのびたときのことです。もし予定どうりにＫＱが飛んでいたら、こうして佐々木くんとゆっくりおしゃべりする機会はなかったことになります。
１９９４年１２月９日（金）の夜のことです。

ありがとう　佐々木くん。

４年度２次隊　理数科教師　タイタ　鈴木宗武
現在教員採用試験に備えて準備中

佐々木君のこと

佐々木君といえばあの"にこにこ顔"。細い目は笑うともっと細くなった。本当にかわいい!!　のだった。

帰国間際の私がナクルの希ちゃんを訪れた時、ちょうど彼もナクルに来ていて、彼女の家に泊まった。同期隊員同志の彼らの会話は、まるで姉と弟。とてもほほえましかった。

希ちゃんが夕食にと手際良く作ったラタトウユ。ハーブの香りに佐々木君は鼻をクンクンさせながら、「うん、おいしい、おいしい。」と嬉しそうにおかわりしていた。

折り紙のサンタクロースを私が折るのを見て、「なるほど、展開図だと考えればいいんですね。」と言って彼は一度でその折り方を覚えてしまった。スゴイ脳味噌だと希ちゃんも私もびっくり。

――― 真摯で聞き上手だった佐々木君、任期が重なったのは数か月だったけれど、あなたのあの"にこにこ笑顔"はとてもステキでしたヨ。心をほんわかさせるあなたの笑顔をずっと忘れずにいるからね。

――― 仕事のことを話す真剣で情熱的だったあなたの姿も、隊員総会で見せてくれたひょうきんな一面も。

どうもありがとう。そして、どうか安らかに。

4年度2次隊　村落開発普及員　マセノ　佐藤めぐみ

佐々木君と初めて会話をかわしたのは、運動会でドッジボールをやった時だった。私は、外野で中にいる人にボールをぶつけ、中に入る権利を持ちつつ、まだ外野でプレーしていた。ゲームが進み、私は中に入った方が良い状況になったが、ボーっとしてて、気づかなかった。その時、観戦者だった佐々木君が「横倉さん、もう中に入った方が良いですよ。」とありがたいアドバイスをしてくれた。私は「おう」と言って中に入った。佐々木君との会話はそれだけ。あとは私が酔っぱらった時になれなれしく話しかけたぐらい。でも、そんなつまらない会話だったが、印象に残っている。

佐々木君の告別式に参加して、佐々木君のお父さんの話しから、佐々木君は中学の時の作文で飢餓をなくしたいと思っている、というような事を書いていたことを知った。

佐々木君が中学の時と言えば、ちょうどその時は飢餓報道ブームで、その脅迫的飢餓報道の映像から、だれもがなんとかしてあげたいと思った。そして人口爆発により食糧不足が起こるという予測とその飢餓の映像が結びつき、びびった人も多かったのではないだろうか。

佐々木君のような優秀な人物が、中学時代に感じた問題にずーっと取り組んでいたこと、その佐々木君と同じ隊員という立場にいられたことを誇りに思う。もっと佐々木君と話すことができなかったのは残念だ。

4年度2次隊　養殖　マリンディ　横倉一賀

謙ちゃんへ

日本へ帰ってきてもう五か月がたちました。予想通り、日本では物事の流れだけでなく、時間もすいすいと進んでいます。僕の任地であったチョゴリアの学校の生徒より手紙をたくさんもらいました。その中の多くにケステスなどにより支払えた学費に対するお礼が含まれています。忙しい中、謙ちゃんが遠いところまで彼らの学費を運んでくれ８人の一所懸命がんばる生徒が学費のことを気にせず学業に従事しています。

１２月の隊員総会は楽しかったね。運動会の写真、今も懐かしく見ることがあります。多分玉入れの結果のすぐ後の写真だと思うけど、セントラルのみんなでガッツポーズをしていて、その中で謙ちゃんはモーレツに体全体で喜びを表しています。自分の大好きな写真の一枚です。演芸会の劇もほとんど即席だったのに結構楽しくやれたね。自分達で芸を考えて、まず謙ちゃんに見てもらった時、謙ちゃんが腹をかかえて笑ってくれたのを良く覚えています。

ケニアの将来はどうなるんだろうね。何十年もずっと変わらないのかなあ。一度位真面目に謙ちゃんとそんな話をしたかったです。いずれにしても謙ちゃんが、従事していた人口問題が大きく関与しているのは間違いないよね。大事なのは国造りをする人達や、それを支える人達が常に前向きである事だよね。

謙ちゃんの父上が、「謙次は二年間、ケニアのためにがむしゃらに頑張ってくると言っていた。」と、おっしゃられました。聞いていた者にとってはきっととても重い『がむしゃら』という言葉だったと思います。

知らせを聞いた時、余りにやるせない気持ちに苛立ちを覚えてしまいました。泣く事よりも謙ちゃんが残してくれた言葉に恥じないように、隊員そして謙ちゃんを知る人達が、これから生きていくことが謙ちゃんへの追悼なんだよね。

４年度２次隊　理数科教師　チョゴリア　宮沢一朗

隊員総会運動会
最後の種目400mリレーの終了直後
セントラルのみんなで記念撮影

佐々木のケンちゃんへ

ケンちゃんとの思い出は色々あるけど、エンプでセントラル地区の送別会をしてくれた時に、朝の５時ぐらいまで飲み明かしたことが一番思い出に残っている。

あの時のケンちゃんの笑顔は、忘れられない。

広大なアフリカの大地で安らかに眠ってください。

そして全世界で活動している協力隊員の安全を祈ってます。

４年度３次隊　道路設計　ナニュキ　秋山和彦

謙ちゃんの思い出

昨年の12月『クリスマス　ケニア山登山』を計画した。総勢15人の隊員・ＪＩＣＡ職員が、一緒に登った。青い大きなマントのようなレインコートをかぶって登っていた謙ちゃんは「いやー、僕は体力ないですから」とか言いながら、ゆっくり歩いていた。でも、最後の吹雪の中での頂上アタックの時は、同期の志知さんを励ましながら、決して置いていくことはなく、一緒に歩いて最後まで登りきった。謙遜していたけど、本当は逞しくて優しい人だったんだ、とその時思った。

ケニア山登山は、やっぱり感動した。ケニア山が富士山より高いからとか、吹雪の中頑張ったからとか言うのではなく、仲間と一緒に登ったから感動した。職種や環境は違っても、一つの同じ目的を持ってケニアに集まっている仲間と登ったからこそ、喜びもひとしおだったのだと思う。それから半年もたたないうちに、まさかその仲間の一人がいってしまうことになるとは夢にも思わなかった。

ウエストの社会学隊員の西村由実ちゃんは、いつも「佐々木さん、佐々木さん」と言って謙ちゃんを頼りにしていた。きっと優しくてよくできるお兄ちゃん分だったのだろうと思う。謙ちゃんと由実ちゃんの書いた "PEOPLE - LOVE IN FAMILY, PEACE IN WORLD" は、日本への帰りの飛行機の中で読んだ。二人の途上国の発展、人口問題に対する熱い熱い想いが文面からあふれ出てきて、どんな国際機関の政策よりも心を打たれた。謙ちゃんと交わることのできた、メルー近辺の村に住む農民や女性や子供達は、どんなにか幸せだったことだろう。

謙ちゃん、どうか、空の上から、隊員の活躍と健康と安全を見守ってあげて下さい。日本のお父様、お母様、お兄さん、妹さんを見守ってあげて下さい。そして、謙ちゃんの愛する、貧しいけれどたくましいケニアの農民、女性、子供達をどうかずっとずっと見守ってあげて下さい。

４年度３次隊　理数科教師　キシイ　渡辺順子

佐々木君は私の任地イシオロから一番近いところにいた隊員だった。社会学という職種で落合さんの後任として６年度１次隊でメルーに赴任してきたのは、私の任期がもう３分の２を過ぎたころだ。６／１のセントラル地区での新隊員の歓迎会は私の任地イシオロでやることになり、当日一番早くやってきたのは佐々木君だった。

話はとんで....私の任期もあと１０日という時、彼がひょっこりイシオロに私を訪ねてくれた。３月２６日、一柳調整員がセントラル地区の出張で、イシオロに来られた時「この後、メルーの佐々木隊員の所へ行きますけど、何かメッセージでもありますか?」と聞かれ、「一番近い（距離的に）隊員だし、そのうち行く行く、と言いながら結局行けなかったので、悪かったと伝えてくれますか」とメッセージをお願いした。その翌々日のことだ。仕事が終わってから来てくれたので、もう夕方６時を過ぎた頃だったが、それから私と佐々木君、それにウチでハウスボーイをしていたムワンギの３人で町に夕食を食べに行って戻ってくるともう７時。「もう遅いし泊って、明日の朝出発すれば?」という私に、彼は「明日も朝早くから仕事がありますから....」と８時頃メルーへ帰って行った。ハウスボーイ、ムワンギの実家はメルーから少し東へ行ったムザラという所にあって、佐々木君は彼に「実家に帰る時はメルーは通り道だろうから、いつでもウチに遊びにおいで」と、住所や電話番号を教えてくれたりしていた。自分が帰国したあとも近くにこんないい人がいてくれれば俺も安心だし、ムワンギも楽しいだろうな、と思いながら「それじゃ、また。帰り気をつけて」などと言って別れた事を、いま思い出している。

事故は思いがけない時にやって来るものだ。佐々木君の今回のことも、誰もが＜まさか＞と思ったのではないか。もう二度とこのような悲しい事が起こらないように隊員一人一人気をつけて任期を満了して欲しいと思う。

佐々木君のご冥福を心からお祈りします。

４年度３次隊　土木設計　イシオロ　景山克士

ケニア青年海外協力隊 同 時 期 隊 員

シニア隊員　井ノ原　卓 …… 95
4年度1次隊　照井　勝 …… 95
4年度2次隊　小林　精三 …… 96
加藤　真 …… 97
中島　克己 …… 98
関根　雅史 …… 98
伊佐治直樹 …… 99
4年度3次隊　前田　美子 …… 100
服部　一人 …… 100
紺野　正敏 …… 101
原田　博文 …… 102
室　英明 …… 103
高見　早苗 …… 104
丹　みゆき …… 105
柴田　剛史 …… 106
川島レイ子 …… 107
5年度1次隊　羽柴　千夏 …… 108
岩元由希子 …… 109
原　耕三 …… 109
5年度2次隊　工藤　幸一 …… 110
二木　洋行 …… 111
玉井　朋代 …… 112
橋本　堂史 …… 113
橋場　裕之 …… 113
岩田　憲保 …… 114
中村　隆康 …… 115
冨樫　弘之 …… 116
上垣　晴美 …… 116
5年度3次隊　西村由実子 …… 117
小野寺　徹 …… 119
山本　直美 …… 120
竹野　伸治 …… 120
山本　裕子 …… 121
新見　克彦 …… 122
佐保　直子 …… 123
6年度1次隊　入山　浩治 …… 124
山崎　希 …… 125
志知美保子 …… 126
新関　郁子 …… 127
6年度2次隊　菅谷　泰子 …… 131
村上　晴美 …… 132
木村　恭子 …… 133
今林　雅子 …… 133
野地　元子 …… 133
山口　綾 …… 134
多田　輝行 …… 134
栗原　豊 …… 135
田中　茂行 …… 135
藤塚　幸一 …… 136
山崎　順子 …… 136
小鍛治義広 …… 136
6年度3次隊　畠山　修 …… 137
光田　秀幸 …… 137
晋川　眞 …… 137
戸松　樹円 …… 137
石神　祐子 …… 137
軸屋　明広 …… 138
森谷志津子 …… 138
今松　竜一 …… 138
各務　史彦 …… 138
今井　正樹 …… 138
長谷　鶴子 …… 138
森元　泰行
森　泰文
峰　宇多子
牧田　計志
菱田　裕子

隊　員　配　置　図 …… 139
ＪＩＣＡ／ＪＯＣＶ名簿 …… 140

佐々木君とは、隊次、職種がいっしょだったわけではありませんが、ぼくが今回シニア隊員としてケニアに来る時に飛行機がいっしょだったこと、また、広尾訓練所でぼく自身がケニア任国事情をやったことから、同期のように感じます。

赴任後もナイロビに来ると、笑顔でいつも挨拶をしてくれ、またぼくの作っている理数科関係の雑誌"ＥＬＩＭＵ"をぜひ自分のビジョンボックスにも入れて下さい、と言っていたことが思い出されます。また、社会学の隊員で作った、人口問題を取り上げた雑誌"ＰＥＯＰＬＥ"第一号完成時には、ぼくにもコピーを渡してくれて「ぜひ時間のある時に読んで下さい」と自信ありげに言っていました。彼の言葉どおり、内容の濃い本当にすばらしい雑誌でした。この"ＰＥＯＰＬＥ"第一号を見て、ぼく自身も負けずにがんばらなければ、と思いなおしたものです。

彼の行動、言動すべてにおいて、本当にまじめな純粋な心を持った好青年だったと確信し、彼の死を無駄にしないよう自分自身を見直し、自分の業務を遂行していきたいと思います。

理数科シニア　ナイロビ　井ノ原　卓

彼と私

５月８日、私は任地であるキツイの山の中にある私の学校で、彼の悲しい知らせを聞きました。辺りは全く静かで、おそらく昨日も今日も明日も同じように生活する人々と時間の中、私にとってその知らせはあまりにも突然で、奇妙ですらあり、とても受けいれることができませんでした。「それは本当なのだろうか」、「･･･。」、「分からないけれどここまで知らせが来るのだから、たぶん本当のことなんだろう」と無理に自分に理解させようとしていました。普段の生活の中では全く想像すらできなかった知らせでした。

同時に私は彼のことを思い出していました。「メルー･･･。」、「落合さんの後任の確か俺と同じ年の人だ」、「車と正面衝突･･･。」バイクで走っている彼を自分におきかえ、私が聞いた「ローリーを追い越したとたんに、前から来た車と正面衝突 」という状況を頭の中で想像していました。 ―― とても胸が苦しくなり、ただため息が出るばかりでした。

彼の属する６年度１次隊の人々が初めてケニアに来た日、私はナイロビのオフィスにて、偶然彼らと顔を合わせたことを覚えています。まだ肌の色の白い、彼の初々しさが印象に残っています。私は次の日、一時帰国のため日本へ出発し、彼はケニアでの生活を始めました。

その後私がケニアに戻った後も、彼と顔を合わす機会がほとんどありませんでした。残念なことに、私は彼とあまり多くの話しをしないままでした。彼とのお別れの会の時彼自身の書いた文章を読むことが出来ました。その文章を読んで、私はその時、どうしようもなくため息が出てしまいました。人と人を比べること自体が間違っているのかもしれませんが、彼と大して違わぬ時間を生きてきた私にとって、どうしても彼の人生と私の人生を比べずにはおれませんでした。私は彼ほど多くを見、感じ、実行してきただろうか。彼ほど純心だっただろうか、熱心だっただろうか、正直だっただろうか？そして、ついには人生の指針すらまだない自分よりも彼の方が"人々の幸せ"を思った場合ずっと大切な人物ではなかったか、と思えてなりませんでした。残されたものとして、私はいったい何をしたらいいのでしょうか。

４年度１次隊　農業土木　キツイ　照井　勝

佐々木さんへの追悼として

１９９５年５月７日、決して起きてほしくない事が起きてしまった。同じケニアで働く協力隊員として、仲間の死に接することは非常に辛いことである。とりわけ異国にいて日本国内に居るより仲間意識が強いことも有り、本当にショックであった。

私自身は佐々木さんとは隊次も違い、任地も遠く離れていたため首都ナイロビの隊員ドミトリーで時折会った時に近況を言い合う程度の付き合いであった。ただ昨年の暮れに偶然一緒にケニア山に登ることになり、その時に彼の人柄に若干触れることができた。彼は私とは違うグループで登っていたが日程や登山ルートが一緒であった事、彼のグループにケニア山の経験者がいなかった事から、結局２グループ一緒くたで登った。同期の女性隊員が多かった彼のグループで、彼が皆から頼られることは良く分かったし、それでいて気さくで大胆なところも見られた。

登山開始の初日、我々のグループより早く用意の出来た彼らは「じゃあ、お先に！」と元気よく山小屋を出発した。ところが佐々木さん率いる一行は、１分もしないうちに戻って来た。あれあれ忘れ物かな、と思っていると佐々木さんがばつが悪そうに一言。

「すいません。あの～どっちに行けばいいんでしょうか？」

残っていた我々グループはこれを聞いて大爆笑。結局これをきっかけに一緒に登ろうということになった。ほとんど下調べせずに 5000M級の山に挑もうとは、中々の度胸である。

その後の登山では、彼は遅れがちな仲間を励ましながら一緒に登っていた。これだけの山になるとこれはちょっと難しいことである。と言うのは人それぞれ登るペースが違い、それより早くても遅くても自分のペースで登れないのは嫌なものである。私などは勝手なものだからマイペースでおかまいなしである。特に自分に経験のない高度であれば高山病の心配があるから尚更であるが、結局彼は、雪の降り出した頂上付近でも苦しそうな仲間を励まし明るい顔で登っていたのが、私にはとても印象に残っている。本当に、彼は優しくそして強い人だなと、その時感じた。このケニア山登山は結局16人という大パーティーであったが、彼のやさしい思いやりや笑顔に励まされたおかげで登頂できた人も多かったと思う。

私はケニアで協力活動をするにあたり『人は自分が幸せでなければ、人を幸せにはできない』と勝手に考えている。多様化した社会では、何が幸せなのかを定義することはできないが、自分が何かに夢中になれたり、笑い、怒り、悲しむことが素直にできることが、そして、そうできる為の諸条件が整っていることが、私は幸せだと思う。当然自分の努力がそのような条件を作るのに大きく作用すると思うが。今回、佐々木さんの事故の知らせを聞いた時、私が最初に感じたのは、この幸せの最低条件、生きるという事である。彼の死が私に『生きる』ことの意味を改めて教えてくれたのである。このような事は、今後絶対起こっては欲しくないし、起こさないことが我々の使命で、同時に佐々木さんに対する弔いになると私は信じている。

佐々木さんの御冥福を心からお祈りいたします。

４年度２次隊　建築　エルドレット　小林精三

けんちゃんへ

けんちゃん　こんにちは

お空の上はどうですか？　今頃広々としたケニアの大地を見渡しているのかな‥‥。けんちゃんが逝ってしまってから、もう３週間が過ぎました。自分の任地で、今までと何らかわらない雰囲気の中にいると、今度のセントラル新歓で会えそうな、ナイロビでばったり会って「散髪して下さいよ～」と言われそうな、そんな気がします。

けんちゃん達が主役だった、イシオロでのセントラル新歓は、同期の志知さんとの打ち明け話し合戦で盛り上がったよね。「これがセントラルの自己紹介の仕方なの！」と言う先輩隊員たちの言葉に疑いもせず、話しを続けてくれたっけ‥‥。おかげでその後会うたびに、みんなからその時のことを突っ込まれていたもんね。そうそう、そう言えばこの時にけんちゃんの優しい部分をチラッと見たよ。オレ達先輩隊員が、志知さんを夜中まで話しに引き止めていたのを見て、さりげなく部屋の外へ連れ出して行ったよね。「ん一、なかなか心憎い気配りをするじゃないの‥」と思ったものです。次の日に、初めてけんちゃんの髪の毛を散髪したんだよね。イシオロの名物・ラクダが見ている中、ホテルの中庭に椅子を出して散髪をしたのは、今考えるとちょっと変わっていたかな…。その後２回くらいやったけど、けんちゃんの髪の毛は真っすぐ、素直に伸びててとても散髪しやすかったよ。

ラクダが見ている中で散髪中

隊員総会の時は、だ～れも遠慮してやらなかった、歌のスワヒリ語訳を一人でやってくれたよね。運動会のドッヂボールでは一緒に熱くなってたっけ‥。"ＰＥＯＰＬＥ"の発刊、その出来映えを見て心の底から「すごいなー...」と思いました。何事にも一生懸命で、真っすぐにやってたけんちゃん。けんちゃんが隊員報告書の中で言っていた、「幸せとは何なのか、貧乏が不幸せなのか、産業社会が幸せなのか‥」という問題に対して、オレも考えていきたい。そして少しでも多くの人や子供たちにも考えてもらえるよう、伝えていきたい。やがてその答えが見つかったら話しに行きます。

これからもケニアの協力隊員、世界中の協力隊員を暖かく見守って下さい。そして、世界中の人々が、その人々にとっての幸せに辿り着けるよう、空の上から応援して下さい。それじゃ、隊員総会の時にセントラルのみんなで歌った曲をけんちゃんに贈ります。あの時のように一緒に肩を組んで歌おうよ‥。

君は何を今　見つめているの
若い悲しみに　濡れた瞳で
逃げていく　白い鳩　それとも愛
君も今日からは　ぼくらの仲間
飛び出そう　青空の下へ

４年度２次隊　食品加工　オサヤ　加藤　真

黒い王様

おなかをすかせたこどもは
おなかがすいているのでかなしかった
おなかがいっぱいのおうさまは
おなかがいっぱいなのでかなしかった

こどもはかぜのおとをきいた
おうさまはおんがくをきいた
ふたりともめになみだをうかべて
おなじひとつのほしのうえで

谷川俊太郎
詩集『朝のかたち』より

道程

僕の前に道はない
僕の後ろに道は出来る
ああ、自然よ
父よ
僕を一人立ちにさせた広大な父よ
僕から目を離さないで守る事をせよ
常に父の気魄を僕に充たせよ
この遠い道程のために
この遠い道程のために

高村光太郎
詩集『道程』より

4年度2次隊　自動車整備　エルドレット　中島克己

佐々木謙次隊員との思い出の中で最も印象的なのは、通常年に一度開かれる隊員総会で初めて彼に会ったときのことです。私の彼に対する第一印象は、「なんだか頼りなさそうな人だな。」でした。ところが、ひとたびディスカッションが始まると、彼は非常に的確で、説得力のある意見を我々に与えてくれ、その場の座長であった私は彼の冷静な観察眼に驚かされました。しかしそうかと思うと、演芸会では女装をして無邪気にはしゃいでみたり、そんな中に彼の人間味、あたたかさといったものを感じたものでした。その隊員総会で私が個人的に彼と話したのは、わずか一時間たらずだったと思います。彼は "幸せ" について語り、"マザーテレサ" について語りました。彼は、私に本棚に埋もれていたマザーテレサの本を読む機会を与えてくれました。今までいい加減に生きてきた私にとって、この本は衝撃的でした。そして、同時に彼の偉大なやさしさを思い知らされたような気がしました。これは私が、生涯忘れることのできない喜びになるであろうと思います。

彼がここケニアに来て努力していた彼の理想、そして我々隊員にのこしてくれた彼の偉大さは、後に続く隊員で大事に引き継ぎ、育てていこうと思っています。

最後になりますが、佐々木謙次隊員のご冥福を祈りつつ、二度とこのようなことが起こらないよう、佐々木隊員と彼のご家族に誓いたいと思います。

4年度2次隊　生態学　モンバサ　関根雅史

笑顔の君へ

佐々木君、僕が君に初めて出会ったのは、去年の８月でした。そのときから君が亡くなる１０日前の４月２８日、僕が君と会った最後の日まで、会う度にくだらない冗談話ばかりしていました。それでも君はいつも笑顔で、僕の話し相手になってくれました。また、君がカカメガに来たときに、僕達が作った親子丼を写真に撮り、その後「おいしい、おいしい」と言ってにこにこしながら食べていた、君の姿は今でも鮮明に覚えています。

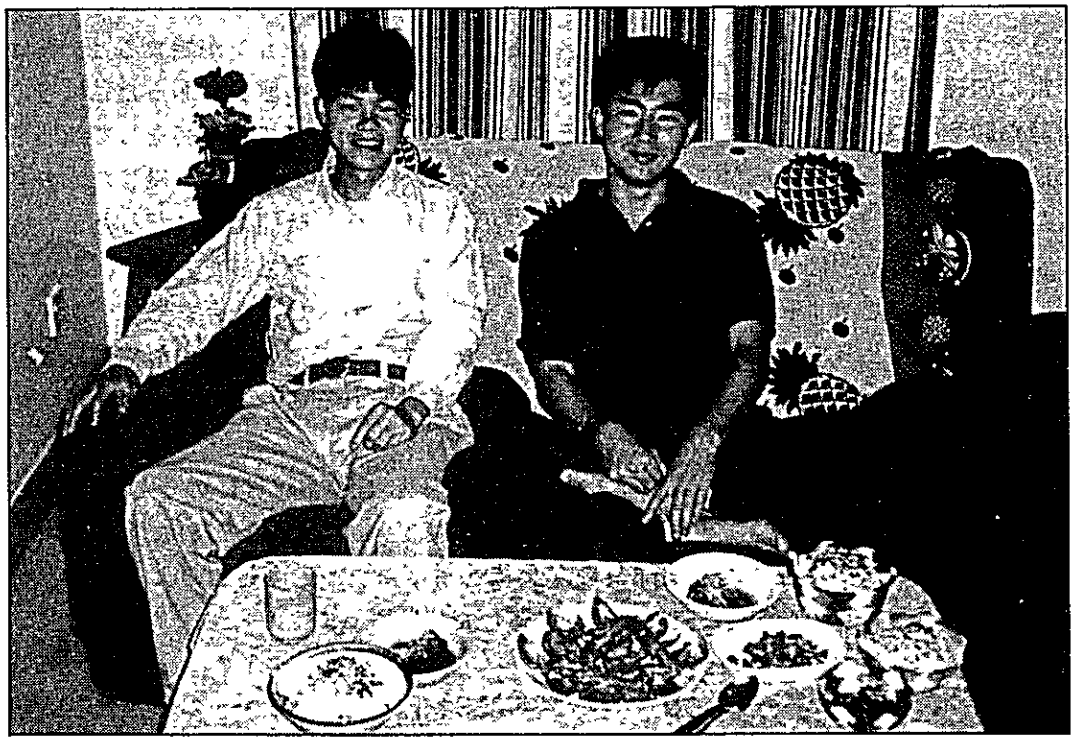
２５歳の若さで彗星のように逝ってしまった君に、どんな言葉を贈ればいいのか今の僕にはわかりません。ただ、君のように優しい笑顔で人に接し、そしてそれによって人に安らぎを与えることが出来る、そんな人間になれるように努力をしたいと思います。僕の友達のケニア人はよく僕に、いい人は世の中の悪に染まらないように、神様が天国に連れていく、という話をしていました。今、僕はこの話を信じています。君の笑顔は僕の心の中にいつまでも、想い出として残るでしょう。今頃君は、天国で僕達のことを見ていてくれると思います。いつもの優しい笑顔で。

佐々木君、優しい笑顔をありがとう。

そして、さようなら。

４年度２次隊　測量　カカメガ　伊佐治直樹

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★



１９９４年１２月カカメガを訪問
伊佐治隊員と親子丼を前にして

前略

佐々木さん、今日は尋ねたいことがあってお便りします。ケニアから天国へ手紙を送るのは初めてです。日本に宛てたものでさえ、無事着かないことがあるので、これが届くかどうか心配です。

覚えていますか。去年の１２月１２日のことです。志知さん、山崎さんと４人でケニヤッタマーケットへお昼を食べに行きましたね。２時半頃でみんなお腹がすいていました。マーケット周辺には、ストリートチルドレンがたむろし、「お金ちょうだい」「バナナを買って」と私たちにしつこくつきまとってきました。タバコ臭い子供やシンナーで目がとろんとした少年もいました。私はかかわりたくないのでひたすら無視していました。でも、佐々木さんは彼らの話を聞いていましたね。子供達も佐々木さんに慣ついて、佐々木さんはまるでテレビの子供ショーに登場する"お兄さん"のようでした。「佐々木さんて子供に優しいね。」と言うと、「えへっ。この子らも、俺たちと同じでお腹へっているみたい。」と照れ笑いしたでしょう。とても印象的でした。

うす汚れた手で服をひっぱり物乞いする子供たちを、
どうすればそんなにあたたかい目で、見ることができるのですか。
"僕たちと同じ"　どうすればそんな優しい言葉がでてくるのですか。
聞かせてください。

草々

５月１７日
佐々木謙次様

４年度３次隊　理数科教師　フニュラ　前田美子

佐々木さんのこと

事故が起こった時、ちょうど私は一時帰国で日本にいました。通勤電車の中で、駅で買った新聞を見ていました。何気なく広げて文字を追っているうちに愕然としました。目の前を流れる風景が虚ろになって、事故が起こったであろうメルー近郊の緑の多い風景や、上り下りやカーブの続く道が次々に思い浮かんできました。

隊次が若干離れていることもあって、率直によく話したことはありませんでした。ドミトリーなどで姿を見掛けると、いつもにこやかにしてみえたのがいまでも印象的です。"ＰＥＯＰＬＥ"という雑誌も内容の濃さゆえにやっと読み終えて、現実的な問題の取り上げ方や、示唆に富んだ解釈に感心していたところです。

志が高く、意志が強く、まじめで、これからやりたいことが一杯あっただろうにと思うと悲しくてなりません。私は日本でのお別れ会に出席させていただきましたが、その際のお父様の毅然とした立派なお言葉も胸に残っております。

安らかに眠ってください。

４年度３次隊　写真　ナイロビ　服部一人

けんさんがうちにあそびにきたときのこと

今年の１月１３日の朝にけんさんは僕のうちのとなりに住んでいる同期隊員の志知さんの家に遊びに来ました。お昼前だったので、僕は２人を町で１番のカレー屋に連れていきました。けんさんがチキンカレーをとてもていねいにきれいに食べるので、食い散らかしてあっという間に食べ終ってしまった僕は、ちょっと恥ずかしくなってしまいました。そのあと買い物をすませてから３人で乗馬をしながら草食獣を見れる場所へ行き、馬３頭を借りました。今にも雨が降り出しそうな天候でしたが、運よく乗馬をしている間は大丈夫でした。しかもその日はシマウマ、イノシシ、シカなど、たくさんの動物を見ることができました。しかし、ちょうど帰路についたとたんに大雨に降られてしまい雨やどりをすることを余儀なくされてしまいました。３人ともびしょぬれになってしまい自動車整備工場で雨やどりさせてもらいながら、３０分ほど震えていました。帰ってきてから急いでシャワーを浴びて、その後町へニャマチョマ（焼き肉）を食べに行きました。その時、今度来た時は絶対チキンにしようと決めてました。そのあと、家に帰ってきて、遅くまで呑んで話しました。あまりに話がはずんで、ついつい呑みすぎてしまい、次の日僕は１日中二日酔いで寝込んでしまい、けんさんたちとはさっぱり遊べませんでした。しかし、その日の夕飯は３人で、ハンバーグを作って食べ、またまた呑んでしまいました。次の日の朝、けんさんはメルーへ帰っていきました。僕たちは、次は必ずメルーで呑もうと約束し合いました。けんさんは僕に、くれぐれもバイクの運転は気をつけてねと言ってくれました。

けんさんがいなくなった現在、僕は何を書いたらいいのかよくわかりません。彼が優しくて真面目で、そしていいキャラクターだったことは、みんなが知っていると思うし、どんなふうにそれを書いたらいいのかよくわかりません。ただ僕には彼が家に遊びに来てくれた時のことがとても楽しく思い出されます。そしてもう、けんさんと一緒にチキンを食べに行けないことが残念でなりません。

４年度３次隊　電気工事　ニエリ　紺野正敏

つばさを持ったライオン

けわしくそびえ立つケニア山の向こう側で
人とふれ合い　あふれる愛で人を包んだ君
いつの日にか　マザーテレサになりたいと
君はすべてをかけて　せいいっぱい生きたんだね
そして今　はてしない大空と広い大地の中で
君はつばさを持ったライオンになり
自由にウペポ（風）と話をしているのだろう
だからもう　さよならは言わない
君はいつでも僕らの心の中のケニアで
大地をかけめぐり　大空をはばたいているのだから

ケニア山の雪をもとかす様なあたたかい笑顔と
赤道直下の太陽のかがやきにも負けない志を持っていた君
君のひとみはいつでも　人の幸せを見つめつづけていたのだろう
そして今　赤い大地と青い大空の中で
黄金のたて髪を風になびかせ
つばさを持ったライオンは
遠くはるかな未来を見つめている
だからもう　さよならは言わない
君はいつでも僕らの心の中のケニアで
大地をかけめぐり　大空をはばたいているのだから

湖にたたずむフラミンゴの様に
やさしく人の心にたたずんでいた君
大地をかるライオンの様に
雄々しく　人生のすべてを燃やしつくした君
僕らはけっして忘れはしない　夜空にサザンクロスがかかる時
つばさを持ったライオンが
月明りの中で力強くほえている姿を
だからもう　さよならは言わない
君はいつでも僕らの心の中のケニアで
大地をかけめぐり　大空をはばたいているのだから

４年度３次隊　建築　ナイロビ　原田博文

私がケンちゃんの悲報を聞いたのは、一時帰国中の５月９日の早朝だった。

朝７時半ごろ、ＯＢの景山さんからの電話で起こされ眠い目を擦りながら電話へ出ると、「ねぇ、新聞見た？　ササキケンジってケンちゃんの事だよね？」という突然の問いに、「そうだよ」と答えると、「ケンちゃんがケニアで事故って死んじゃったって新聞に出てるよ」、「えっ、そう」早朝であったので寝ぼけていて、全然頭で理解出来ずその後世間話などをしてその時は電話を切ってしまった。数時間後、ＪＩＣＡ職員の藤江さんから電話をもらい、やっと事実を認識した。

私が一時帰国の為、出発の２日前にナイロビのドミトリーへ来た時、ケンちゃんがいた。ケンちゃんに「何か欲しいものがあれば、日本から持ってきてあげるよ」と言ったら、「別に何もいらないけど、ケニア製のごみ袋がすごく弱いから日本のスーパーのビニール袋を持って来てください」と言っていた。これが、ケンちゃんとの今思い出せる最後の会話だと思う。ケンちゃんとは任地も離れていて、職種も違うしお互い仕事が忙しく地方へ遊びに行く事もないので、会うのはナイロビのドミトリーぐらいで、いつもくだらない話をして、ふざけ合っていた思い出しかない。

ケンちゃんは、ケニア隊員の中でも数少ない良識のある好青年だった。だから、よけいに事故で亡くなった事が信じられない。ケンちゃんを知る誰もが、「まさか、あのケンちゃんが...」という思いが強いと思う。でも、もう何を言ってもケンちゃんは帰らない。事故現場も見て来たが、何を言っても、何を考えても、想像の域を出ないので、ここではその事について書かない。青年海外協力隊として外国にいる限りは、不慮の事故とはいつも背中合わせの生活をしなければならない。それは誰もがわかっていることではあるが、これだけ身近でこういう事が起こると、改めて考えさせられるものがある。

最後に、ケンちゃんへ。

いろいろ私のバカっぱなしに付き合ってくれてありがとう。
やすらかに、眠ってください。

４年度３次隊　自動車整備　ボイ　室　英明

―――― ＫＥＮＪＩに "ＳＡＬＩＭＩＹＡ" を ――――

「あれ！もしかして山口出身ですか？」
「いやあ懐かしいなあ、うちの親が山口の人間なんですよ。」
「 "じゃろ" とか "じゃけん" とか言うでしょ。」

ＮＡＩＲＯＢＩで研修中の６年度１次隊員の中に一人の若く純粋で笑顔の可愛い青年がいた。東大卒、社会学隊員。私の描いていたイメージを変える人なつっこさで話しかけてきてくれた。

彼、佐々木謙次君のホームステイ先は、私の同僚教師ムルワ氏宅だった。
佐々木君が一週間のステイを終えた後、ムルワ氏は、つくづく感心したように、
「ＫＥＮＪＩはいい人間だ」「ＫＥＮＪＩはかしこい」と繰り返していた。
そのムルワ氏の家族、親戚、近所の人々からは、「ＫＥＮＪＩはどうしている？」
「ＫＥＮＪＩは次にいつ来るのだ？」と幾度となく問われ、
「ＫＥＮＪＩはメルーに行ったよ。仕事でね。忙しいんだって」と答えると、
それでも連れて来いとせがまれた。
そして、「どうかＫＥＮＪＩによろしく伝えてくれ」と ――――

つい先日、久しぶりに会ったムルワ氏に、佐々木君の訃報を告げた。再会をあれほど楽しみにしていたムルワ氏は、大きくため息をつき、口を噤んでしまった。しばらくしボツリと、「神様のなさる事だから」と一言。

人々からの伝えることのできなかったサリミヤ、
今、神様の国にいて微笑んでいるであろう...
君に....届け。

４年度３次隊　家畜飼育　キツイ　高見早苗

サリミヤ（ＳＡＬＩＭＩＹＡ）：スワヒリ語で "よろしく伝えて" という　挨拶の意

「佐々木謙次さんの思いで」

佐々木さんは落合知子さんの後任としてメルーにやって来たため、落合さんと仲良しだった私は、佐々木さんの赴任前からどんな人がやって来るのか楽しみで佐々木さんはよく私達の話題にのぼり、私はまだ見ぬ佐々木さんの姿を想像したりしたものでした。

佐々木さんは「今度遊びに行きますから、飯でも食わせて下さいよ。」と言いながら「佐々木さんが御飯を作ってくれるんでしょ。」と私が言うと目が丸くなって、結局一度も私のところを訪れることはありませんでした。

佐々木さんの印象は色白の"美しい人"という感じで、特に隊員総会で女装した時にはどの女性隊員よりも美しいような気がして戸惑いました。その隊員総会で、佐々木さんとセントラルの殆どの女性隊員は、黒いミニスカートをはくことになっていたのですが、私はなかにはく短パンのようなものをもっておらず、「それ、絶対見えちゃうよ」と、ずっと心配してくれていた佐々木さんは、結局自分が着る予定だった比較的長めのミニスカートと交換してくれました。それまで「年下の少年」という印象だった彼が、そこにきて初めて「気配りのやさしい人」だったことに気づき、少し衝撃をうけました。

私は４月に任期延長に伴う一時帰国をし、そのまま佐々木さんは、帰らぬ人になってしまいました。その帰国前日に見た佐々木さんは、仕事にとても意欲的で、色は相かわらず白かったけれども、なんだか少したくましくなったような気がしました。特に"PEOPLE"という雑誌の発行は、同じボランティアとして私にとっても大きな刺激となりました。理数科教師として、日頃生徒に教えることで精一杯になっていた自分に、忙しい中でも勉強し、自分を向上させるという前向きな姿勢を忘れない佐々木さんの活動は、大きな励みとなりました。

日本で聞いた佐々木さんの事故の知らせはあまりにも悲しく、仲間の隊員として残念でなりませんでした。どんなに考えても納得いかないけれども、佐々木さんの志しを受け継ぎ、ケニアでボランティアとして残りの任期を健康に過ごし、彼のこのいたましい出来事を忘れないことがせめてものはなむけと思います。

佐々木謙次さんのご冥福を心よりお祈り申し上げます。

４年度３次隊　理数科教師　カラチナ　丹みゆき

かぎりなくさびしけれども
われは
すぎこしみちをすてて
まことにこよなきちからのみちをすてて
いまだしらざるつちをふみ
かなしくもすすむなり

―― そはわがこころのおきてにして
またわがこころのよろこびのいづみなれば

わがめにみゆるものみなくしくして
わがてにふるるものみなたへがたくいたし
されどきのふはあぢきなくもすがたをかくし
かつてありしわれはいつしかにきえさりたり

くしくしてあやしけれど
またいたくしてなやましけれども
わがこころにうつるもの
いまはこのほかになければ
これこそはわがあたらしきちからならめ
かぎりなくさびしけれども
われはただひたすらにこれをおもふ

―― そはわがこころのさけびにして
またわがこころのなぐさめのいづみなれば

"さびしきみち" 高村光太郎　詩集『道程』より

４年度３次隊　養殖　キスム　柴田剛史

けんちゃんとの思い出 No.5

私よりも年上でいろいろな経験をしているけんちゃんですがあえてけんちゃんと呼ばせてもらいます。
では5位から発表します。

No.5 始めてけんちゃんに会った時。（ジャジャーン）

日時は覚えていない。ドミトリーで6-1がケニアに来てすぐだったかあの頃私はドミトリーで生活していた。印象が、「おとなしそうな人だね。」と誰かに言った覚えがある。

No.4. 6年1次隊 歓迎会。

ドミトリーの庭で。4年2次隊の送迎会と共に行った。
4-2のパワーがあまりにもすごかったので6-1はおつかれされてしまうかのようだったのを覚えている。しかし。けんちゃんが自己紹介をしたのをよく覚えている。

No.3. ドミでのお話。

会うのはいつもドミトリーか事務所。それ以外で会ったのは隊員総会の時だけ。会話「いつからモンバサへ行くんですか？」「9月から3ヶ月行ってその後またナイロビにもどってきます。」・「あっモンバサから帰ってきたんですね。」「はい。でもまた行くかもしれません。」とこんな感じ。

No.2.

これは言うまでもないでしょう。
それでは第1位の発表――！

No.1 最後に会った日。

4月13日 私は日本へ一時期帰国という事でウキウキ状態でした。
「では行ってきまぁ～す。」「気を付けて帰ってきてくださいね！」

4-3 水泳 ナイロビ
川島 レイ子

死ぬということ

私は"死"についてまだ理解できません。人はこの世に生を受け、そして必ず死に絶えるわけで、私にも例外なく死はやってくるのですよね。やってきた死は私たちの体を滅ぼすのはわかるのですが、意識をどこに連れて行ってしまうのでしょうか。体と一緒に滅んでしまうのでしょうか。天国か地獄に行くのでしょうか、それとも転生するのでしょうか。映画「ゴースト」のように、いい人は光のお迎えが来て、悪い人は黒い影たちに連れて行かれてしまうといった想像をするしかないのでしょうか。

体と一緒に滅んでしまうといった説はあまりに寂しすぎるので、私は考えたくありません。まして過去に失った家族や友人が完全にいなくなってしまったとは考えられません。死の瞬間までにその人と私、またはその他たくさんの人との間に築き上げられた精神的な関係はどうなっちゃうのでしょう。私は今でも、その人たちとの関係をひき続き築いていると信じています。

天国か地獄に行かなければならないのなら、やはり天国に行きたいですよね。どこにラインを引いて、どっち側がいい人で、どっち側が悪い人というのを誰が決めるのか知りませんが、とにかくこの世でいい人でないと天国に行かれないらしいです。それならば私もいい人になりたいと思います。

転生説。私はこれが一番好きです。私たちの魂は再び人間の体に入り込んで、気の合った魂と出あうと考えると、次の人生が楽しみになります。自分の母親が次の人生では弟になったり、夫が奥さんになったり、親友が娘になったり。それを思い出す事が出来たらもっと面白いのにと思います。私の友人の何人かは過去生のことを覚えていて過去に犯した過ち、今生でやらなければならないこと、なぜ自分が暗い所が嫌いかなどを知っています。

死後のことをいろいろ考えてみても、今の私には結局知らない世界です。でも、天国に行くにも、転生するにも、また、無になるのも、自分次第だと思います。私たちは毎日何かを学んでいます。学ぶために毎日が存在するのかもしれません。そして、学ぶ場所を外国に選んだ私たち隊員は今、世界各国で毎日貴重な体験をしています。すべての感覚器で感じるこの毎日は、今生の魂の中で、大きな役割を務めることになると思います。私自身、ケニアで過ごす一分一秒が、ケニアの人の笑顔が、やしの木の向こうに沈む夕陽が、音をたてて魂に刻み込まれるのを感じています。私には、こんなにぎゅうぎゅうに詰まった魂が滅びるとは、どうしても考えられません。天国や次生でなくても、どこかに存在すると信じたいものです。

佐々木さんのご冥福を心からお祈り申し上げます。そして、どこかで、またお会いしましょう。

P．S．　佐々木さん、隊員総会酔っぱらって、変な顔（PAINTED)して、からんでごめんね。横ちゃんに代わって謝ります。

5年度1次隊　バレーボール　モンバサ　羽柴千夏

佐々木さんが教えてくれたもの
"仲間"の絆、素晴らしさ
"いのち"の尊さ、その重さ

人について、命について、たくさんたくさん考えました
なくなってみて初めて気づくことの、何と多いことか

この悲しみを
この悔しさを
決して忘れることなく

一歩一歩進んでいきます
また明日へ

生きることの意味をかみしめながら

佐々木さん
ありがとう
さようなら

5年度1次隊　日本語教師　ナイロビ　岩元由希子

報告書の抜粋から、佐々木さんのヒューマニストとしての姿を知りました。ほかのどのケニア隊員よりも深く、発展途上国の人のこと考えてたのかもしれません。同じように若くして逝ったヒューマニスト、宮沢賢治の詩の中から、私の好きな雨ニモマケズ・・・。

雨ニモマケズ　風ニモマケズ
雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ　丈夫ナカラダヲモチ
欲ハナク　決シテイカラズ
イツモシズカニワラッテイル　一日ニ玄米四合ト
味噌ト少シノ野菜ヲタベ　アラユルコトヲ
ジブンヲカンジョウニ入レズニ　ヨクミキキシワカリ
ソシテワスレズ、野原ノ松ノ林ノ蔭ノ
小サナカヤブキノ小屋ニイテ　東ニ病気ノコドモアレバ
行ッテ看病シテヤリ　西ニツカレタ母アレバ
行ッテソノ稲ノ束ヲ負イ　南ニ死ニソウナ人アレバ
行ッテコワガラナクテモイイトイイ　北ニケンカヤソショウガアレバ
ツマラナイカラヤメロトイイ　ヒデリノトキハナミダヲナガシ
サムサノナツハオロオロアルキ　ミンナニデクノボートヨバレ
ホメラレモセズ　クニモサレズ
ソウイウモノニ　ワタシハナリタイ

ご冥福を御祈りします。

5年度1次隊　電子機器　キスム　原　耕三

楚水清若空
遥將碧海通
人分千里外
興在一杯中
谷鳥吟晴日
江猿嘯晩風
平生不下涙
于此泣無窮

楚水清きこと空しきが若く
遥かに碧海と通ず
人は千里の外に分かれ
興は一杯の中に在り
谷鳥晴日に吟じ
江猿晩風に嘯く
平生は涙を下さざるに
此に于て泣くこと窮りなし

李白

5年度2次隊　自動車整備　モンバサ　工藤幸一

謙ちゃんへ

謙ちゃんといっしょに

謙ちゃんと初めて会ったのは、まだ６年度１次隊の皆んながケニアに来て間がないころでしたね。最初のころは、とっても静かな人だなという印象を持ちました。私も人見知りをする方なので、謙ちゃんとこの時話す機会を失ってしまいました。でも、昨年の12月に謙ちゃんがキスム、カカメガ方面に仕事の関係で来た時、キスムドミトリーで謙ちゃんと初めてお話しをしましたね。それからキスムにいた人達とSunset Hotelに行って夕日を見ながら、ビールを飲んで話をしたことは忘れられません。謙ちゃんがこんなにしゃべる人でおもしろい人だということを初めてこの時知りました。謙ちゃんがこの後、ここで話したことを同期の隊員の人達に話して、その後この時の話題のことでもり上がった時もありましたね。この後から、ナイロビでよく会ったりした時、話をするようになりましたね。今考えると、もっとはやくに謙ちゃんと知り合えてたらと残念です。憶えていますか、山崎さん、志知さん、謙ちゃんと私とで自転車で、ナイロビ市内を散歩した時、とっても楽しかったですね。その後で、皆んなで食べたピザ、山崎さんがダブルデートのようだねって言って、じゃ、誰と誰って言った時、山崎さんと志知さん、私と謙ちゃんということで、女同士、男同士でということで笑いましたよね。とても楽しい時間をありがとう。

それからこんなこともあったよね。何人かで一柳調整員宅へ、赤ちゃんを見に行こうということになって、謙ちゃんと皆んなで遊びに行ったこともあったね。とても楽しかったですね。

それから、いつも謙ちゃん、寺ちゃん、私とで三人でわざわざ小さいソファーに座ってビールを飲んだこともあったよね。あの時は、ちょうど寺ちゃんの誕生日。謙ちゃんが、絶対、寺ちゃんの誕生日の日になるまで寝ちゃだめだよって言って、夜の12時まで、三人でソファーに座ってビールを飲みながら、寺ちゃんの誕生日を待ったよね。あの日は最高に楽しかったです。三人で何本ビールを飲んだのか忘れちゃったね。とにかくとてもおもしろかった。

そういえば、こんなこともあったね。ちょうど、ナイロビドミトリーに謙ちゃんと私しかいなくて、二人でソファーに寝そべって、ケニアの未来について話したこともあったね。あの時、謙ちゃんの素直な気持ち、ケニア人のために必死にケニア人のことを考えている姿を見て、感動しました。正直にいえば、自分のいままでのケニア人に対する見方を変えてくれました。必死になること、人のために悩み、すこしでもケニア人がよい方向にいく方法を考えていた謙ちゃんに感動しました。もっとこれから謙ちゃんに教えられることがたくさんあったと思います。

最後に、謙ちゃんで忘れられないのが、私が任国外旅行でタンザニア、ザンビアに出かける日、私が寝ぼうして、朝７:30 ごろに起きて急いで出かけようとした４月13日の日。謙ちゃんがわざわざ出てきて私に「気をつけて、行ってきてね。楽しい旅の話、待ってるからね。」といって最後まで見送ってくれたよね。まだ、言ってなかったね。５月２日にケニアについたよ。いっぱい楽しい旅の話を持って。

５年度２次隊　理数科教師　プテレ　二木洋行

今思うこと・・・

佐々木隊員の悲報を知ったのは、５月９日火曜日のことでした。電話のない私へは、なかなか連絡が取れなかったためです。その日は、とてもよく晴れた、ケニア晴れといってよいほどの青い空でした。太陽の日差しがまぶしく、私には大変なことが起こった事実を実感できないくらいでした。ケニア人は明るく悲壮感がないからでしょうか。任地に一人でいると、日本や日本人に対する実感が湧いてこないのです。木曜日にナイロビへ行き、みんなの顔を見て、「あー、事実なのだ」と新たな悲しみが沸いてきたのでした。

私は、佐々木君とは任地も離れているので、いっしょに何かしたという思い出はあまりないのですが、一度モンバサでいっしょになったことがありました。その時、同期の山崎さん、志知さんと来ていた彼と、みんなで海に行こうということになりました。色白の彼は暑いモンバサには不似合いのジーパンとシューズをはいていました。私たちは短パンにサンダルの出立ちでした。「なんだか変だよー」と笑ってしまった私たちに「モンバサに来るつもりじゃなかったから、用意してなかったんですよ！」と彼は笑って答えていました。あの時の彼の笑顔を今でも思い出します。イースター（４月中旬の４連休）の頃だったので、ついこの間の出来事でした。

ケニアの交通事情は、隊員の誰もが体験しているように、危険極まりないものです。遅いトラックや車を追い越すために、前から車が来ていても、対向車線へ飛び出すこともしばしばです。マタツ同士のお遊びか、２台のマタツが追いつ抜かれつの競争を始めたりすることもあります。バスやマタツに乗っているとき、ねむってしまえば怖さも知らずにすむのですが、ねむれずにしっかり前を見てしまうと、怖くて手に汗をにぎるスリルを味わされてしまいます。毎回、目的地に着いた時は、「無事に着いてよかった。」と、ホッと肩の力が抜けるのです。毎回、怖いです。しかし、怖がっていては、このケニアではどこへも行くことはできません。私もバイクに乗っています。佐々木君の任地とは違い、平坦な一本道か、ガタガタの未舗装道路です。まだまだ不慣れな運転技術なので、スピードも出せず（自転車より少し早い程度）、遠出もできない状況です。交通事故は対向車、人 etc. と相手と接触して起こることが多いので、自分一人の責任ではありません。不注意や怖さ知らずの運転手が多いので、彼らを改善させることは、不可能に近いことです。私たちにできることは「自分の身は自分で守ること。」しかないのかもしれません。佐々木君のように一瞬の出来事で、どうすることもできない方が圧倒的でしょうが、注意しすぎて、しすぎることはきっとないでしょう。

仕事柄、診療所に運ばれてくる交通事故の患者をたびたび見ます。日本にいた時より目の当たりにすることが多いせいか、本当に事故が多いと感じます。ケニアでは、医療がまだ未成熟なためか、簡単に人の死が訪れます。同僚の一人は「人生の出来事は神のおぼしめしだ。」と言います。ですが、命は尊いものです。みんなが幸せであってこその人生です。佐々木君の死は本当にショックです。２度と再び起こらないように、隊員全員が、安全に健康で任期を終えることを願っています。

佐々木君のご冥福を心よりお祈りいたします。

５年度２次隊　保健婦　スルタンハムド　玉井朋代

「ふるさと」

昨年の１２月にムバレという町でＡＩＤＳのフォークメディアがあり、同職種の某Ｎ女史に、無理矢理、謙ちゃんは出席させられた。このムバレという町は私の勤めるセカンダリースクールからもっとも近い町である。小さな町ではあるがガラの悪さには定評があり、ここを通ったことのある隊員は御世辞にも"いい町"などと言った者はいなかった。こういう町に謙ちゃんは某Ｎ女史の陰謀で来ることになってしまったのである。おそらくマタトゥを降りると、子供だけでなく、いい大人まで「ジャパニーズ!」チャイニーズ!」だのと寄って来て「金をくれ!」などと騒ぎ立てたのであろう。私はその場にいたわけではなかったが、だいたいの見当はつく。何と言っても私の"第二のふるさと"となるはずだった町であるからだ。事実、謙ちゃんも私以外の隊員には「ムバレはひどい町ですよ!」、「あんなタチの悪い町は初めてですよ!」、「驚きましたよ!」などとグチをこぼしていたらしい。私も何となく申し訳なく感じ、「ムバレはガラが悪いからひどい目にあったでしょう？」と幾度となく尋ねたのだが、謙ちゃんは「いい町ですよー。」という返事を返してくれるだけであった。

謙ちゃんにとってメルーという町は、彼の心の中で大切な"ふるさと"であったのではないだろうか。だから、私に対して私が住む町をけなす事ができなかったのであろう。でも正直な話、私自身ムバレの町には何の思い入れもなければ、史上最悪の町だとすら思っている。だが謙ちゃんには、隊員が住む町、それはその隊員にとって大切な"ふるさと"であったのだ。今、思い返すと、自分の住む町を自慢できない自分自身が少し恥ずかしくさえ感じる。私事ではあるが私の任期も残り半年である。その間に、謙ちゃんが見つけたメルーのすばらしいモノの数々以上に、すばらしい何かをムバレの町で私は見つけたいと切に思う。そして半年後、故郷に、そしてそこに住む人に対する優しさを忘れぬよう、自分の住んだ町を故郷として心に刻み、帰国する予定である。

そこには謙ちゃんが愛したもうひとつの故郷"日本"がある。

心よりご冥福をお祈り致します。

５年度２次隊　理数科教師　マラゴリ　橋本堂史

佐々木さんとは話したことがなかったので、どういう人かは知りませんでした。しかし「ＰＥＯＰＬＥ」などを発行したりと活発な隊員活動をしているなあ、と感心をしていました。

今回の事故では、皆たいへん悲しい思いをしました。これからはこれまで以上に心をひきしめて隊員活動をしていきたいと思っています。

佐々木さんのご冥福をお祈りします。

５年度２次隊　土木施工　ブンゴマ　橋場裕之

Mr. 上機嫌

５月某日、私は佐々木隊員のご遺族と日を同じくして彼の任地メルーへ向かった。ご遺族と一緒に彼の遺品を整理していて思わず呆然としてしまったことを思い出す。彼の書斎には社会学関係の専門書に始まり、南北問題、アフリカ関係、国際機関等の本が山のように置かれていた。英文、和文のレポートや文献の類いも数多く出てきた。日頃から勉強家だとは聞いていたが、ここまでとは思っていなかった。彼の新しい一面を知る気がした。しかし私は日頃の彼に対してもっと違った印象を持っていた。それは彼のニックネーム"謙ちゃん"というのにふさわしい実に崩れた印象であった。

あれは彼が新隊員としてケニアに来た当初のことだった。セントラル地区の新隊員歓迎会の席でのことだ。その時は、新隊員としてメルーの謙ちゃんとニエリの志知さんの二人だけが仲間として加わったときだった。我々古株隊員は悪乗りを決め込むことにした。さまざまな質問を浴びせ彼らの異性関係を次々と聞き出そうとした。

「これが伝統だよ。みんなも新隊員の時はしゃべったんだからさ。」

と促して次々にきわどい質問をした。その度に謙ちゃんは、

「エッ！本当なんですか。ちょっとみんな本当にしゃべったんですか。」と言って顔を赤くしたり目をふせたりして困っていた。もちろんそんな伝統などありはしない。唯、我々が悪乗りをしていただけである。そのように散々責められて困り果てながらも周囲へ気を配る人だった。夜も更け、同期の志知さんが眠たげにしていると、

「じゃ、我々だけで行きますか。」と言ってさっさと彼女を連れ出し、先に寝かせてあげていた。私も含めほかの隊員も、

「やるねぇ、佐々木氏。」と感心したものだった。

そして４カ月後の次の新隊員歓迎会。前回の恨み !? をはらすべく謙ちゃんは矢のような突っ込みを新隊員へ向けた。彼は少量のアルコールが入ると日頃よりも発言が大胆になる。その辺が憎めないところだが我々は、

「まあその辺でいいじゃないか。勘弁してあげようよ。」と促すと

「どうしたんですか皆さん。もっと質問しましょうよ。」といきりたつのであった。

そこで彼に、

「いや、実は前回のは伝統でも何でも無く‥‥。」と説明すると、

「えっ！本当なんですか。そうだったんですか。」とよほど悔しかったのか興奮して顔を真っ赤にしていた。お酒の酔いと血圧の上昇で真っ赤になった彼の顔を今でも鮮明に覚えている。

彼はいつもコップ一杯のビールで上機嫌になり饒舌になった。私の知っている謙ちゃんはそういう人である。真面目で優秀な佐々木隊員としてよりも、そういう人間臭い部分を忘れないようにしたい。

５年度２次隊　養殖　ニャフルル　岩田憲保

私は、佐々木さんの任地に近くでありながら、数える程しか会ったことがない。それは、連絡所等にあまり顔を出さないからである。なので、彼はよく私を見る度に「ナイロビ嫌いですか」とか「ナイロビどうして来ないんですか」と、持ち前の笑顔で私に言ってきて、私はその度に「そんな事ねーよ」とか「やかましいや」などと、いつも笑いながら雑な返事をした時の事がよく思い出に残っている。人前に出て話すのは苦手らしいが、前記の様に人にチャチャを入れるのが好きな様で、前回の地区別新歓でも「ガーナにいる人がどうのこうの」といろいろな話題に花が咲き最後には司会者よりも余計にしゃべってチャチャを入れていた。余計な人の噂等になると、人一倍チャチャを入れてくる人であった。

また、無精な私にも「今度メルーに一度来てくださいねえ」などと親切に言ってくれていたが、私はその度に「ああ、行くよ行くよ」などと空返事をしているにも拘わらず「絶対ですよ」と熱心に言ってくれた事もあった。私の任地からそんなに遠くはないので、内心メルーへはぜひ行こうと考えていた矢先、メルーへの第一回目の訪問がこんな事になるとは思いもよらなかった。

もう一つ彼に印象深いのは数字のごろ合わせがうまい事である。彼のメルーの自宅の電話番号など、0164-30058（おい虫さんおれの小屋）とうまいごろ合わせを付けていた事だ。これは傑作だと思っていた私は、以前彼に会った時に「あのごろ合わせうまいじゃん。あんた歴史なんか得意だろ」と聞くと「いやあ、あんなのいい加減に付けただけですよ」、「やっぱりさすがだね」と冷やかして言うと「あんなの誰にでも出来ますよ」と照れ笑いしながら言っていた。実はその柔軟な発想について、不器用で何一つ頓智のきかない私には非常に羨ましく思ったりもした。田舎の意地悪坊主の様な顔をしているが、なかなか頓智のきいた面白い人だと改めて思った事がある。

仕事に対しても前向きで真剣に取り組んでいるせいか、前回の地区別新歓でも「明日は仕事があるから朝早く帰ります」と言っていた。その横に座っていた私は「そんな日曜日まで仕事せんでいいじゃないか、どうせケニア人なんか一人も来んよ」などと無責任な事を言った覚えがある。しかし彼はその日朝まで一睡もせず、言った通り翌朝早く一人帰っていった事が印象深い。

以上いろいろ思い出す事がある。私は彼と会話した機会は、他隊員に較べあまり多い方ではなかったが、仕事に一心に取り組んだり、人の噂などには人一倍チャチャを入れたり、あの達人的数字のごろ合わせという３つの特技を持った人格の彼ともっと会話する機会があればと、今一心に思う。

５年度２次隊　電子機器　ムランガ　中村隆康

<今日もビクトリア湖に夕日が沈みます>

今日もビクトリア湖に夕日が沈みます。なんだか、とってもきれいです。あの時もどこかのついでにキスムドミトリーによった際、みんなで飲みにでかけたっけ。その時に「夕日、きれいですねー！」と感動してくれましたネ。うれしかったです。キスムで自慢出来る唯一のものですし、俺達もきれいだと思いますもん。本当に!! そんなんであの時は、男しかいず、なので、会話といえば、たわいもないことばっかりしゃべっていて、最初はＷＥＳＴ地区のむさくるしい奴らにかこまれて、静かにしてましたっけ。でも、ビールの酔いと俺達の攻撃にたじたじしながら、徐々に会話に乗ってきて、さかんに「誰にも言わないで下さいよー!」と言ってたっけ。でも、それは間違いです。うちらに言っちゃったら、そんな約束が守れる訳がありません。でも、しょうがない、約束は守りましょう。でも、いつか言っちゃうかもしれませんけど。

まあ、そんなわけで、ビールを飲み、チップスをほおばりながら、男らだけでしゃべったあの日、とても楽しい日でした。

ありがとう!!

５年度２次隊　農業土木　シアヤ　冨樫弘之

「佐々木さん、ここに来る前、マスコミで働いていたんでしょう？記事書いていたんですか？」４月のイースター休暇でナイロビにあがっていた時、ドミトリーで新聞を読んでいる彼に尋ねました。この時の会話が最後になるとは、思いもしませんでした。

私はこんな話を思い出しました。「死神が肩をたたくんだよ。そうすると人は生きられなくなるんだ。順番なんてないんだよ。そっと近づいて肩をたたいていくんだ。だって"エッ！どうしてあの人が？"という人が突然ふっと亡くなってしまうんだもの。こう言っている間にも死神は自分の後ろに近づいているかもしれないんだよ。」

私たち協力隊の仲間はみんな同じ夢をもって集まってきた。お互いの存在が心の支えとなっているのに、突然ふっと去ってしまった。もっと仕事の話など聞きたかったのにまだ時間はあると思っていた。温厚で静かな彼が私たちにとって大きな存在だったことをあらためて感じます。

５年度２次隊　公衆衛生　モンバサ　上垣晴美

佐々木さんへ

カカメガでまた、フィルムショーが始まりました。今回は私、ちょっと気合いを入れています。約束していたあなたのレポートを手にして、こりゃ負けられない、と触発されたからです。記録用紙のフォーマット使わしてもらうからね。地べたに座り込んだ子供たち、赤ちゃんをだっこしたケニアンママ、気難しい顔をしたムゼー。(注：スワヒリ語でお年寄りの意) あなたはどんな気持ちで、このケニアの田舎の人たちを見ていたのですか。

去年の１２月、佐々木さんがカカメガに遊び、いえ、視察をしに来てくれた時のことエイズ・フォークメディア・フェスティバルは、私が６月に赴任してから半年間、夢中になって取り組んできた活動でした。だから、その集大成の日に来て見てもらえるのが私は嬉しくって、嬉しくって …。あの日、マス・クワイアーのおばちゃんが「ユミコ今日は弟と一緒に来たのね。」と言ってきて、私は大笑いしました。

カカメガショーでモンバサから来た人魚を見たり、エンザロ村に行って地域開発の活動をみせてもらったりして、西村大邸宅に４泊していってくれました。どうだった？カカメガはメルーより大きな町でびっくりしたでしょう。西村邸もきれいでびっくりしたでしょう。でもあの時、水が止まらなくてよかったよね。本当によかったよね。だって佐々木さん、洗いもの、ぜーんぶ、できたもん。鍋、食器からシーツまで！大きくて洗うのが大変だから、と言ってシーツを洗ってくれた佐々木さんに、「干すのは好きだからやらせて。」と言ったらそのとおり、させてくれた。日曜日の午前中、からっと晴れたカカメガの青空の下で、シーツを広げると、水しぶきがキラキラして …。私は、ルンルンした気持ちでとても幸せでした。なんか、ちょっと、新婚さんみたいでしょ。あ、でも、それだったらシーツ洗わせたりしないね。

社会学分科会で、勉強会や対談をやった時のこと。分科会の発足、嬉しかったよね。１２月のあの時に、田中専門家の話を聞いて、触発されて、はりきっちゃって。対談という名の雑(Y?)談、おもしろかったなぁ。ナイロビ・ドミトリーの勉強部屋、卓球台のところでわかんないねーなんて言いながら、おしゃべり。あの時も、ナイロビのキラキラした日差しが緑の隙間から洩れてきて、心地よい風があって気持ちよかった。今、自分は、夢だった協力隊に参加している、浮かんでくるアイデアを実行する現場がすぐ近くにある、そして、あーだ、こーだと一緒に理屈をこねることができる人がいる。私って幸せだなぁって思った。佐々木さんは、聞いてくれる、わかってくれる人だなっていう安心があった。ちょっと、恥ずかしくって誰にでも話せるわけではないようなこと（コンドームや性欲のことではありません。そういうことを話すのは社会学隊員はへっちゃらです！）夢とか、学問的な興味とかを話すことができた。もちろん、毎日の仕事のちっちゃな悩みや愚痴も、それから、しょうもなくって「はぁー」と思わずため息が出てしまうようなレベルの低いギャグも。

ねぇ、佐々木さん、９５年の４月１５日正午現在で、世界の人口は 5,738,709,464人なんだって。この数字についてどう思う？　また、もう地球は究極的なところまできてるんじゃないかって言いますか。食糧増産しなければ、って言いますか。私はいつもの

ように、こういう数字に表わした人口って冷たくってきらい、って思います。でもね、今日はこの数字を見ていて、とても嬉しいことを発見しました。こーんなに大きな数字のうちのひとつという、とてつもなく小さな確率で、私はあなたに会うことができたんですね。嬉しい。人口の勉強をするのも悪くはないかもしれない。

だけど佐々木さん、まだ、安らかに眠ったりしたら駄目だよ。それはこわい会長が許せません。世代がちがうとか言って、私のこと子供扱いしてたけど、もう私は十分おとな、自分の荷物は自分で持って歩けます。スリの多いナイロビでも大丈夫。

だけどね、仕事や勉強、将来のことで困ったり、悩んだり、迷ったり。そういう心の荷物はひとりじゃ重たいよ。だからお願い、支えていて下さい。

ごめんね。年下のくせに偉そうなことばかり言って、口ばっかり達者で、約束の原稿を書かない、どうしようもない会長だったけど、すっごく、あなたのことを頼りにしていたの。それは、たった一人の同職種ということもあったけど、それ以上に、共感してくれる人、理解してくれる人だったから。だから約束して下さい。心の荷物はこれからも、いつものようにさりげなく、支えてくれるって。ケニアの青い空から。

もうすぐ、あのユースグループの演劇が完成します。わくわく、どきどきです。絶対見ていてくださいね。一番、あなたに見せて、「どーだーっ！」って自慢したいんだから。

佐々木さん、本当は "ありがとう" をたくさん言いたいんだけど、今日はひとつにしておきます。だって、私、まだ、あなたから学んでいる最中だから。あなたが書いたレポート、読んでいた本。まだ、あなたから学ぶことがいっぱいあるのです。ぜーんぶ吸収して、それを私なりに発散できるようになった時、残りのありがとうを送ります。

それじゃあ。

ありがとう

しあわせは
愛する人達と一緒に生きること
家族　友達　恋人
愛する人達と一緒に生きること
つらい　苦しい　悲しいこともあるけれど
愛する人達と一緒に生きること

佐々木さん
あなたとしゃべって　わらって　あるいて　ふざけた
あの時　この時
私はとってもしあわせでしたよ
私のしあわせのお手伝い
どうもありがとう

５年度３次隊　社会学　カカメガ　西村由実子

早すぎた別れ

私は、もうこれ以上友達を失くしたくありません。
交通事故は、もう結構です。
２５才です。何を急いだのでしょう。
何を、言っても。
何を、聞いても。
もう、遅いのです。
何も、言ってくれません。
何も、聞いてもくれません。
ただ、安らかに寝ている。
本当のことは誰にもわからず。
本人は、ただ安らかに寝ている。
ただ寝ている。
寝ている。
もう、起きることはない。
でも、心の中できっと答えてくれる。
何時か、きっと。

同じ学年で、一番　勉強しなかった
５年度３次隊　自動車整備　ニエリ　小野寺　徹

同じ学年で、一番　勉強した　君に　！！

隊次、任地、職種等において共通点がなかったせいもあり、佐々木さんとは数える程しか言葉を交わしていません。が、強く私の印象に残っているシーンがあります。

隊員総会について話し合うため、ドミトリーに集まってた時のこと。何かまぬけなことを言った私に対して、佐々木さんはとてもやさしい素敵な笑顔を向けてくれました。この年頃の男性にこのような、何というか人を慈しむような暖かい表情ができるとは、と、生意気にも内心ちょっと驚いたことを覚えてます。佐々木さんの笑顔にほっとしたなんて人も多いのではないでしょうか。きっと彼は、いつもあのような表情で多くの人を見守っていたのでしょう。あの時の笑顔に、アサンテサーナ（ありがとう）です。

ご冥福をお祈り申し上げます。

5年度3次隊　システムエンジニア　ナイロビ　山本直美

佐々木君へ

誰もがそうだと思うが、やはりいまだに信じられない。次の新歓には佐々木君のいつもの元気な姿が見られるような気がしてならない。

佐々木君とは昨年のクリスマスに、他の同期隊員と共にケニア山に登った。アレンジはすべて彼が行った。みな始めはピクニック気分でいたが、高度が上がるにつれ高山病が出はじめペースが落ちた。"もういいから早く降りようよ" と彼の口からも彼らしからぬ弱音が出た。しかし同期の女の子が元気（？）に登って行く姿を見てさすがに、これはまずい、と思ったのだろうか、無口になりつつも登頂を果たした。

彼の死後、数多くの知られざるエピソードが同期隊員を中心に出てきているが、僕は当事者ではないのでここでは控えておく。

"一番の親不孝は親より先に死ぬこと"
今回ご遺族の方々に同行させて頂き、この言葉が痛いほど身にしみた。

佐々木君の死は我々に何を残したのであろうか。
深い悲しみさえも、やがては絶妙なるバランスの中に組み込まれていく。
我々はそこから何を汲むことができるのだろうか。

5年度3次隊　野菜　ムランガ　竹野伸治

あれから思ったこと

佐々木謙次君、いかがお過ごしですか。

ここケニアは雨季に入り、私の任地のニャミラは毎晩ドシャブリの雨が降っております。学校の横は泥道になってしまってますが、しばらくは生活水の心配をしなくて済みそうです。

さて、今回筆をとったのは、君という人物を私がどういう風に感じていたかをお知らせする為です。それには５月８日から日を追って私が心に思ったことを綴ってみたいと思います。

５月８日

新隊員のホームステイのアレンジをしていた私はこの来訪者を心待ちにしながらその日の授業を行っておりました。昼過ぎ新隊員が到着し、彼から君の事故のことについて聞かされました。はじめて事故の話を聞いた時は信じられず、まるで遠い国のできごとをうわさ話でも聞いているかのような気持ちでいました。その数時間後無線の定期交信で、君と最後のお別れをするために皆がナイロビに集まること、またその詳細についていろいろ知らされた時もまったく実感が無く、ラジオのニュースを聞いているようでした。そう、まったく信じられなかったのです。だから、いつもと変わりなくその日は過ごせました。無線の交信の後、新隊員の人と今後の予定について話し合い、彼がホームステイ先へ行ってしまった後も、いつものように食事をして寝る準備をしました。私はいつも、ベッドに入り寝る前に翌日の予定を思い起こすことにしています。その日は、その予定の中に希望を入れました。君の事故の話が誤報であったという連絡が入ることを。

５月９日

朝、校長先生に理由を説明し、週末ナイロビに行く許可をもらい、その週の時間割を調整しました。これらの事務的な作業をしているうちにしだいに、この悲しいできごとが事実であり、事実だからこそナイロビに行く準備をしている。だんだんこのできごとが重く心を占めてきました。この日の夜はベッドに入ってからも考えることは翌日の予定ではなく、この事故のことだけでした。いったいどういう事故だったんだろうか。なぜ彼が事故に遭わなければならなかったんだろうか。などと考えても仕方がないことを思っていました。

５月１０日

この日は余りこの事故についてわざと考えないようにしていました。

５月１１日

１時間目の授業を終え、ホームステイを終えた新隊員と共にマタツでキスムまで上がってきました。その間も、楽しいことしか考えていませんでした。キスムに着き、他の隊員から、次の日の朝までにナイロビに着けば君の顔を見ることができると聞き、すぐさまプジョーでナイロビに向かいました。ナイロビのドミトリーに近づくにつれなんとなく心は重くなってしまいました。この晩、ドミトリーで千羽鶴を折りながら

いろいろな君の顔が浮かんできました。一緒にケニア山に登った時の顔、ドミトリーでお酒を飲みながら皆と談話している時の顔、仕事の話をしている時の顔、などなど。

５月１２日

朝、君の眠っている顔を見させて頂きました。

５月１３日

たくさんの人が集い、君との最後のお別れをしました。

私は、君の多くは知りません。でも、ドミトリーで、ＪＩＣＡのオフィスで、ケニア山で見せてくれた顔は、いつも笑顔だったような気がします。お酒を飲んで皆と談話している時も、真剣に仕事の話をしている時も、君の持つ穏やかな空気が側にいる人を包んでいる。そんな雰囲気が、はたで見ている私にも感じられました。一緒に登ったケニア山では、いつも君は誰かを気づかっていました。山登りの苦しさは誰も同じはずなのに。

きっと私は、君の一面しか知りません。でも、それが私にとっての佐々木謙次君であり、すべてです。少なくとも君は私にこのような思い出を残してくれました。そしてこれからも、思い浮かべるのは君の穏やかな笑顔でしょう。今も君はその笑顔で、天から我々を眺めているのではないでしょうか。我々を気づかいながら。

またいつかどこかで会うことがあったら、いつもの笑顔で声をかけて下さい。私も笑顔でこたえたいと思いますから。

それでは、また会う日まで、さようなら。

５年度３次隊　理数科教師　ニャミラ　山本裕子

今までの人生で幾多の日々を過ごしてきましたが、精一杯満足できる時間を送れたと思えるような日は、ほとんど印象に残っていません。

毎日が後悔や失敗の連続でした。

それでも、毎夜床に入る度に、明日こそは今日までとは違った日を送ろう、精一杯頑張ろうと、意を新たにするようにしています。

将来に、多少なりとも夢や希望がもてるから、人は今日頑張ることができるのでしょう。

佐々木さん、あなたはどうでしたか。

きっとあなたのことですから、毎日毎日悔いのないように、そしてあの日もいつもの通り、隊員活動をされていたことでしょう。

私もあなたを見倣って、日々邁進していきます。さようなら。

５年度３次隊　理数科教師　キプエジ　新見克彦

謙ちゃんの"最高"

昨年１９９４年　クリスマス　Mt.Kenya登山　Bandasロッジ出発の朝
全員初めての登頂　ガイドも無し　残り６人のメンバー率き連れて
一緒に出ればいーじゃないと言う言葉にも
"いいえ　自分たちは多分遅いから一足先に出発します！"
とてもかっこよく出ていったよね
ところが数分もしないうちに　一人ロッジの扉を開けるなり
"あのー ....。どちらへ行ったらいいんでしょうか？ ...."
（？）一瞬の間　そして爆笑の絶頂
あの時の謙ちゃん　今でも目に焼きついてます　最高だったよね！

謙ちゃんおぼえてるー？

P.S.　あの日　お昼頃か...
近所の友達のところへ行って喋ってたな
ごめんね
一番近くなのに駆けつけられなくて
知らない土地で　知らない人ばかりで
淋しすぎるよね　悲しすぎるよね
くやしいなぁ
ごめんね　すぐ行けなくて

５年度３次隊　建築　エンブ　佐保直子

We would wish to share with you, your sorrow and pain on the death of Mr.Sasaki who was a member of Japan Overseas Cooperation Volunteers. May his spirit towards the society live with us always and may his soul rest forever in peace.

THE MUNICIPAL COUNCIL OF EMBU　H.M.KARUGENDO
Town Engineer

青年海外協力隊隊員・佐々木氏の死において、あなたがたの遺憾、痛みを共に分かちあいたいと思います。彼の思いが、いつも私達のもとにありますように、そして安らかな魂の眠りをお祈り致します。

エンブ市役所　H.M.カルゲンド
技術部長

出会い

謙ちゃんと初めて会った時、"すっごく笑顔の似合う人だなぁ。"っていうのが第一印象だった。これから広尾訓練所で約三ヶ月、ケニアで二年間。謙ちゃんと一緒に生活を共にすると思うと嬉しく思えたことを覚えてる。

広尾訓練所にいる時から、謙ちゃんには本当に世話になってたんだなって思う。僕は社会経験もないし分からないことだらけだった。そんな時、謙ちゃんに尋ねるといつもの笑顔で答えてくれ、僕が納得してないような顔をすると分かりやすく説明してくれたよね。覚えているかな？　ケニアの隊員で作った本のこと、僕が無くしてしまって困ってる時に声をかけてくれて、「僕のをコピーしてくるといいよ。」って。謙ちゃんは本当に僕にとって良き兄貴の様な存在だった。

ケニアに出発の日、僕は全然落ち着かなかったけど、謙ちゃんは逆にすごく落ち着いていた。いつもの笑顔を見せながら....でも、僕はその笑顔の中からこれからのケニアでの活動に対する意気ごみの様なものを見た気がした。

ナイロビＪＩＣＡオフィスの裏庭で

飛行機からケニアの大地を見下ろし、「ここで僕らが活動するんだ！」って、みんなですごく期待に胸を膨らましてケニアに足を踏み入れた。しかし、その後すぐにケニアの状況について聞いた時にみんな不安になった。特に僕はその夜、これからのことを思うと不安で寝れずにいると、「僕も確かに不安だけど、あまり深刻に考えない方がいいよ。僕らは一日一日をベストを尽くしていけばいいんじゃないのかな！」ってアドバイスをしてくれた。この言葉は僕の日記に書いてあり今でも良く思い出すんだ。

ＪＩＣＡのオフィスで会った時、謙ちゃんと西村さんで作成した"ＰＥＯＰＬＥ"を配っていた。その時僕は、「日本語訳はないの？」って聞いたら、「ないけど、絶対に読んでよね！」って、まさかこれが僕らが交わした最後の言葉になるなんて夢にも思わなかったよ... 謙ちゃんが"ＰＥＯＰＬＥ"を作成したように、僕も頑張って"何か"をケニアに残していきたい。謙ちゃん応援してね。

最後に約束するよ。謙ちゃんの代わりは務まらないとは思うけど、６年度１次隊の女性達は僕がしっかり面倒をみるよ。(いつも面倒をみられてる方だけど.....)だから心配しないでね。

６年度１次隊で本当に良かった。たくさんの思い出をありがとう。謙ちゃん....

６年度１次隊　卓球　ナイロビ　入山浩治

マウント・ケニア　澄んだ星空と　雪のピーク・レナナ
モンバサ　ディアニの　青い青い海
Ngongu Hillsの　グリーン・カメレオン
キコンバ・マーケットは　あなのあいたジーンズ
２人でのんだ　HotelのBar
国境の町マラバと　酒のつまみのFried Fish
ホテルで　Vipゲームと枕なげ
演じそこねた　恋人役
ナクルでつくった　壊れてしまったオカリナ
ケニヤッタ・マーケットの　ストリートチルドレン

絵の描き方教えて　　と
コーヒーカップを作って　と　言った
どーしよう　どーしよう
すごい　すごい　　が　口ぐせだった

幹事会での冷静な意見
支援経費の　納得してしまう顔
きりんちゃんを　だいたうで
バイクのレクチャーで　キュっとつぐんだ口びる
不精してはれあがった　その足
家具の木の枝をけずった　その手

その　１つ１つを　つつみこんで
アフリカは　アフリカの　ままでいる

６年度１次隊　陶磁器　ナクル　山崎　希

ディアニビーチにて
小さな舟で砂の島へ向かう
山崎隊員と

Ｋｅｎ－ｃｈａｎ

昨年の４月１１日広尾訓練所の入所式の日、講堂で自分の席を探して席につくと、隣に一人の男性が座っていたので、私は「あの一、ケニアに行かれるんですか。」と尋ねてみました。するとその男性はにっこり笑って「はい」と答えました。

家族に猛反対されて、不安一杯で訓練所にやって来た私の気持ちをほぐしてくれたのは、Ken-chanの笑顔でした。私はその時以来いつもKen-chanの笑顔に助けられ支えられてきました。

そして、あれから一年、いろいろなKen-chanの笑顔を見てきました。

ケニアに来る途中のロンドンで「わぁーわぁー、ロンドンだ。ロンドンだ。」と無邪気にはしゃぐ　Ken-chanの笑顔
マトゥマイニチルドレンズホームでケニアの子供達と一緒に遊ぶ　Ken-chanの笑顔
ナイロビ国立公園でシマウマ、キリン、ダチョウを見て喜び、最後にライオンの"Ｈ"を見て少し興奮気味に喜ぶ　Ken-chanの笑顔
ナイロビのスラム街のＢａｒで　ケニア人と楽しそうに話す　Ken-chanの笑顔
彼女の話をする時、照れくさそうにする　Ken-chanの笑顔
満天の星のもと流れ星に願いごとをして、幸せそうにしている　Ken-chanの笑顔
隊員総会の演芸会で女装して「あー、恥ずかしい。恥ずかしい。」と言いながらも、にっこりほほえむ　Ken-chanの笑顔
ケニア山で登頂を喜び合った時の　Ken-chanの笑顔
少し疲れながらも"PEOPLE"の完成を喜ぶ充実感に満ちた　Ken-chanの笑顔
モンバサの美しい海で泳いだ時の　Ken-chanの笑顔

少し歯並びの悪い前歯を覗かせほほえみ、多くの人達に幸せを与えてきたKen-chan。今もどこかで多くの人達に幸せを与えているのでしょうね。私もKen-chanの様な素敵な笑顔で人に幸せを与えられればいいなぁと思っています。

またいつかどこかで会う時は、にっこり笑ってね、Ken-chan。

６年度１次隊　婦人子供服　ニエリ　志知美保子

イシオロでの新隊員歓迎会
志知に散髪してもらう

奇　蹟

1995年 5月16日、22時10分。ナイロビ空港。大空へと、舞い上がるジェット音。彼は、お父さん、お母さん、お兄さんに連れられて、妹さんの待つ日本へ一足先に帰って行った。瞬間、頭の中をこの１年の時間がさぁーっと流れた。猛烈な寂しさが襲ってくる。

あの日以来今日まで、長かった。・・・慟哭。そして、いろんな想いが押し寄せては去り。謙ちゃん、そうかもう四十九日なんだね。

目を開けて見届けなければならなかった当時より、現在の方がだんだんと信じられなくなっている。すべて作り話だったのではないか。何度か彼の夢を見て、彼に会った。今もどこかで、元気にしてる。気持ちよく風を切って、バイクを走らせている。そんな気がして仕方がない。だけど。" The Bridges of Madison County "。土で汚れて、少し破れてゆがんで戻ってきた一冊の本。彼の最期のカバンの中に入っていた。それが唯一の事故の証言者でもあるかのように。

あまりに鮮やかに見せてくれた、一つの命の終焉。まいった。本当にまいった。打ちのめされた、かつてない程。いつまでたっても心の混乱はおさまりそうにないし、思い出すままに心に残っている彼を、書き散らかしてみようと思う。みんなの心の中で息づくように、願いをこめて。

６年度１次隊５人組。若者２人に、背の低いお姉さんが３人。５人で１つの最強チームだった。中心人物なんて誰もいなかった。誰もが脇役で誰もが主役だった。ケニアでの訓練期間中は、語学学校が２つに分かれた以外、５人いつもいっしょだった。それが楽しくてしょうがなかった。どこにでもいっしょに行った。狭いタクシーにも、いつも５人いっしょに乗った。海外生活２度目の彼は、恐いもの知らずのようにどんどん街の中を歩いた。地図を片手に、地理をすぐに覚えた。私達が、危険だと散々脅されたナイロビを歩けるようになったり、超満員のバスに乗り込むことができるようになったのは、彼のおかげだった。ホテルに戻ると、順番に誰かの部屋に集まっては、遅くまでしゃべり、笑い合ってはじゃれていた。その日その日の出来事や、恋愛の打ち明け話、たわいない話、時間のある限りしゃべり続けていたような気がする。いつも私達といっしょにそこにいた彼。何が何でも欠けてはいけなかった。でも不思議なことに、また５人の絆が深まったように思えているのは、私だけではないと思う。彼だってうなずいているに決まっている。

赴任の朝、ドミトリーからトップバッターで出勤していく私に、彼がパパイヤを一切れ口に入れてくれた。同期のみんなが玄関まで見送ってくれた。そうして仕事が始まり一人暮らしが始まってみると、私は思いの外、寂しくてたまらなかった。ちょうどひと月して彼と再会した時、「ねェ寂しかった？」って聞いたら「最初の何日かだけ。すぐ慣れた。」なんてケロッと答えるものだから、私は「そんなの割りに合わない(!?)。」 それから、洗濯だけはダメ、洗濯機、洗濯機、なんて騒いでたくせに、ﾑが何カ月たってもへこたれているのを横目に、「もう慣れた。」 何にでもすぐに慣れる人なんだ、なんてちょっと不満に思ったりした。

すべていっしょだった語学クラスのこと。広尾の時はあまり勉強せずに、ゲームやアウトドアレッスンばかりしていた。そういえば彼にしてあげたこと、ひとつだけあったのを思い出した。広尾のCクラスでプレゼンテーションの時、準備ができていないので、順番を変わってほしい。そして自分に回ってこないように、長びかせてほしいと。「何でもしますから。」なんて。こんなこともあった。ある日、私の辞書をちょっと貸してと言う。単語を引くわけでもなくパラパラめくっているので何をしているのかと思ったら、「ニイニイ（新関）はどんな単語が知らないのかと思って。」と、私が線を引いた単語を捜しているのだった。ケニアでのスワヒリ語訓練の時は、彼は、一日中椅子に座っていることが苦痛だとか、覚えるのは苦手だとか言って、風邪をひいたのを口実に、3人いっしょに午後の授業をサボッたこともある。あの時、私はドミトリーに洗濯に行ったが、彼は町に買い物に出てた。入山君はもちろん寝てた。いたずらで、教室で3人で机とイスを反対向きにして、イスの上に正座して、後ろ向きで先生を待ってたこともあった。先生は確かに笑ったけど、あれはあんまりウケなかったね。

ある時、私がある人から想いを打ち明けられたことがあった。その場にいた大勢の中で、茶化したり冷やかしたりしなかったのは、彼ひとりだった。ただじっと黙って聞いていた。私はその人の真摯な気持ちに打たれたが、同時にそんな彼にも感動していた。人の想いの大切さをわかっている人だった。そんな時彼は、とても大人にみえた。自分の話はあまりしなかった。彼女の話を聞き出そうとすると、「何でそんなこと言うん。」とか、「そんなこと言わんでもいいやん。」たしなめるように言い、その実照れていた。秘めたる想いは熱そうだった。

私が時々、「長く生きてるといろいろあるのよ。」それを真似て彼が、「さすが長く生きてると違うねぇ。」って。そんなふうに口をすべらした後は、すかさず、「あっ、すみません。」何でもかんでもすぐ謝ってた。でも何となくわかってたんだ。どこか超然としてるところもあった彼には、私なんかがちっともわかってない大事なこと、ちゃんとわかってたんだってこと。それは決して、人生の長さなんかじゃないってこと。

子育て論。子供は奔放に育てたい。彼は苦い思い出に顔をしかめながら、自分がつらかった、嫌でたまらなかったことは、子供にはさせたくないと。スイスイ生きてきたように私には見えたけど、この人も乗り越えたりくぐったりしてきてるって思わせられたこともあった。それが微塵も見えないのは、やはり人格なのだ。

きちんとしてたけど、愛敬もあった。広尾で時間に遅れて呼び出しをくったり、ケニア山登山の時は、買ったお菓子を家に忘れてきて、皆に笑われたり。

「はい、もしもし。」「!!! 何でそんなに可愛い声出すん？」何度かあったそんな電話でのやりとり。

メルーを訪れた日のこと。町で食事をすませてから家に帰ったので、もう夜8時を過ぎて暗くなっていた。それなのに、近所の子供たちがたくさん集まってきて、KENJI のお客さんにあいさつしたい、と。慕われている彼がまぶしかった。初めての宿泊客を迎えた彼は、実に甲斐甲斐しかった。コーヒーをいれて、クッキーを出

して。「あっ、音楽音楽。」カセットテープをＯＮにして、流れてきたのはちょっと懐かしい旋律。誰かが来たら暖炉に火をつけてみたかったんだ、と。だけど点いてはすぐ消え、全然うまくいかなくて。それから嬉しそうに新しいバスタオルを出してきて、私に先にバスルームを使わせてくれた。そしてその間に、何度も何度も自分の部屋とリビングルームを往復してた。廊下を行ったり来たりする、スタスタスタと足早の彼の足音が今でも耳に響いてくる。お風呂から出てきたら、暖炉には赤々と暖かな焔が灯っていた。どうやら木切れや新聞紙を、せっせと部屋から運んでいたらしかった。彼の満ち足りた嬉しそうな顔。よかったのに、と思いながら、その顔を見てたら、私まで嬉しくなった。暖炉の前で、互いの近況報告など。私の愚痴も、「それは困るよねえ。」と、真剣に聞く。「このジュース、メルーに新しく入ったんだ。ナイロビにも売ってる？」どこで何が手に入るかは、比較的大事な話題。他に特に意味のない世間話すら、なぜだかこの夜の会話は、ひとつひとつ全部覚えているみたいに、次から次へと浮かんでくる。「次は南米がいいな。南米、歴史と文化が目に見えていいよ。好きなんだ。」　そう聞いたのも、この時だった。

翌朝、料理だけは苦手な彼が、フライパンで焼いてくれた食パンは黒く焦げてたけど、その気持ちがうれしかった。「何にもなくてごめん。」　思い出したように、「あっそうか。果物買っとけばよかったんだ。」　そして、彼の職場訪問。オフィスで私が彼の上司と話した後、「何て言ってた？」「すごくほめてた。」「本当は何て言ってた？」「本当にすごくほめてた。」「だから何て言ってた？」聞きたがる彼を意外に思ったが、他人の評価を気にすると言うよりは、仕事の成果が客観的にどう捉えられているかを知りたがっているようだった。自分では末端の仕事と言いながら、足元も遠くも見つめてた。その後、キビリチアの建設中のヘルスセンターに案内してもらった。ふもとの町で、お金をくれと寄ってくる大人達に、「ばかじゃねえか。こいつら（そこにいたガキ共）と同じじゃねえか。」（と、日本語で。）言いながらしかし、こいつらに向ける目は、決して冷たくなかった彼。

そうそう、彼の家の屋根に咲く、細長いオレンジ色の花の名前は、ゴールデンシャワーだって。彼は知っていたのかな。ケニアにはきれいな花がたくさん咲いているのに、ちっとも名前がわからないので、植物図鑑を買おうなんて以前言っていたけど。

花と言えば、いつだったか、この花食べられるんだよね、なんて話をした時は、子供の頃家の回りの花を全部食べてしまって、親に怒られたことがある、なんて言ってた。やんちゃな彼を思い描いて、愛しい気持ちになったのを覚えている。それから、私の所に遊びに来てくれた時は、バラの花を持って来てくれたっけ。彼が一人で散歩に出かけたナイロビ博物館には、"野生のエルザ"の作者、ジョイ・アダムソンが描いた水彩の植物画が展示してあって、それが一番よかったと、さかんに言っていた。自分も絵を描きたいなあ、と。

４月半ば、イースター４連休前日のこと。"ＰＥＯＰＬＥ"を刷り終えた、大きなひと仕事の後で、いっしょにモンバサに行こうと誘われた。山崎さんと志知さんが一足先に行っていたので、旅の道連れがほしかったのか、彼にしてはしつこく、

私の仕事中のオフィスで、私が机の前からワープロの前に位置を変えてもついてきて、「行こうよ。バスのチケットも買ってくるし、荷物も全部持つし。ただ来るだけでいいんだから。」なんて。家でゆっくりしたかった私は、「任国外旅行、いっしょに行こうね。年末はラム島へ行こう。」と答えたら、「そんな先のこと。」って、ちょっとふくれて言ったっけ。これがはからずも、彼と会って話した最後。私にとって8月や12月は、決して先のことなんかじゃなかった。

日本人は歳が若く見られるケニアでは、彼はよく高校生に間違えられて、ニコニコしてた。私の知る限り、ケニアに来てからの彼の方が、明るく楽しく、朗らかで愉快で、ずっと自分を発揮して、人間性も見せてくれた。本人が早くケニアに来たかったと言ってた通り、彼はケニアに来て幸せだったのだと思う。

笑う時はイスから転げ落ちて、ひざを叩いてお腹を抱えて笑ってた。素直な感情表現ができる人だった。お世辞は言ったかもしれないが、心にもないことは言わなかった。それから人の悪口も。友達の秘密はしゃべらなかった。信じられる人だった。誰にでも親切に公平に接した。大人だった。子供だった。人に愛される要素をたくさん持っていた人だったと思う。

「Sa S-A ki」２番目のサにアクセントをおいて、伸ばし気味に発音する。それでちょっとせっかちにしゃべる彼。いっぱい愛を持って生まれてきて、出会った人みんなにふり撒いて、せっかちに去って行った彼。みんなの記憶の中に、いい思い出だけを残して。

やっとの思いでこれだけ書いて、こうして思い出の断片を繋ぎ合わせてみても、私は彼の何を知っていたのだろうかと、ふっと悲しくなる。ただ、自分の夢に誠実に生きた人間の、束の間の煌めき。しかしいつか、彼のことがわかる日が来るかもしれない。その時一歩、前へ進めるような気がする。

最後に。広尾では私は講義の度に眠りこけてて、いつも彼に笑われていたけど、ちゃんと起きてて聞いた和尚さんの講話から。この世に生を受けたことの、奇蹟。人間として生まれてきたことの、奇蹟。そして、思います。悠久の流れの中、同じ時代に同じ場所に存在し、めぐり逢えたことの、奇蹟。だから。佐々木謙次というかけがえのない一人に出逢えた奇蹟をピカピカのエンブレムにして、胸にペタッと貼りつけ、これからは歩いていくんだと。

謙ちゃん、私は今生きることについて、考えて考えています。
忘れかけてた憧れに、もう一度面と向かい生きてみようと思います。
謙ちゃんの早過ぎた旅立ちに、たくさんのありがとうを花束にして。
貴方が願った通り、貴方の大切な人達がどうか幸せでありますように。
謙ちゃん。時空を超え。無限へと。きっと追いつく。また逢う日まで。
謙ちゃん、人っていいね。
・・・好きだった。

６年度１次隊　プログラムオフィサー　ナイロビ　新関郁子

佐々木隊員の死に思うこと

この 追悼文集は 8月8日の彼のお誕生日に 発行されることになったのですね。26才の佐々木さんの誕生日でした。

彼の Birthday の 次の日、8月9日は 私の26回目の誕生日なので 1日違いで 迎えるはずだったのだと知りました。

彼が 報告書に 書いた文を読んで 胸のつまる思いでした。私もマザーテレサの働きに影響されて ここケニアに来ていたので 彼の思いが 自分のものと重なる感じがしました。

彼の思いと私の思い、彼の26年間の人生と私のそれと、つい 夕づらせてしまい、やるせない気持ちになってしまいます。

けれど、彼が 私達の中で生きてゆくためにも 彼の思いを 毎日の生活の中で 一所懸命 実行してゆかなくちゃと思います。

世界の1人でも多くの人が 幸せになることの手伝い。私自身は、何が出来るわけでもないけれど 自分に出来ることを少しずつ続けてゆきます。 6/2 理数科 菅谷 泰子

若くして旅立った友への　requiem

君を構成していた原子は
今や
大地へ、大気へ、宇宙へ還った
君の笑顔は写真の中で動かない
　（その微笑みで何を語りかけようとしているのだろう）
そして
残された私達は
悲しみの深さに呆然とする

風が吹き抜ける
雲が湧き
もうじき雨がやってくる
ケニア山の頂にも静かに白い雪が降り積むだろう

君であったと認識されていた肉体は既にここには無い
だが
それら全ての内に君が在ると
　（若しくは還ったのだと）
思うことなら許されよう
何故ならば
私達のこれからの人生において
君に語りたいことが
君に問いたいことが
きっと　たくさんあるはずだから

若くして
あまりにも若くして旅立った友よ
君が「一粒の麦」となり
私達の心にそれを蒔いていったのだと――――
私達はそれを育て
稔らせなければならないのだと――――

君の夢を継ぐその誓いが
君への　requiem になる

６年度２次隊　土木設計　ムランガ　村上晴美

広尾訓練所で、語学講師の一人から、いつも同じ隊員の名前を聞かされていた。それが、佐々木謙次さんの名を知った最初だった。人付き合いの悪さで定評のあった講師だが、送り出した生徒から手紙をもらうと嬉しそうにして、

「ケニアに行ったら、ＫＥＮＪＩ　ＳＡＳＡＫＩによろしく言ってくれ」

と何度となく言われた。佐々木さんてどんな人だろうと思った。きっと彼に手紙を出すくらいだからとても優しい人なのだろうと思った。残念ながら、ほとんど面識のないまま、佐々木さんは逝ってしまった。今はただご冥福を祈るだけである。

６年度２次隊　日本語教師　ナイロビ　木村恭子

悲しみではなく
惜しむともちがう

何というのだろう
なぜ起こったのか
どうしてなのか

志を全うできずに
去らなくてはいけない人がいたこと
それがあなたであること
それを私が知っていること

いつまでも忘れることはないだろう

６年度２次隊　理数科教師　ウエルガ　今林雅子

佐々木くんへ

任地から初めてナイロビに上がってきた隊員総会幹事会の時
ドミトリーの長いすの上に君の笑顔はあった
他の２人は忘れてしまったけど
ビールを飲みながら、３人　体をくっつけて座っていたっけ
"佐々木君、ごきげんさんやね"誰かが言った
にこにことうれしそうに楽しそうに笑う
"離れて座ったらいいのに"と言われながらも、
ずっと離れずにいたっけ
何がそんなに楽しかったのかな？
君の笑顔をみていると、ついこちらもつられて、
幸せな気持ちになっちゃった
ドミトリーの長いすを見るたびに
あの時の君の"ごきげんさん"の笑顔　思い出すよ
空の上でも変わらず、にこにこと
みんなを眺めているんだろうな・・・・・

６年度２次隊　システムエンジニア　エルドレット　野地元子

追悼文集に寄せて

初めて佐々木さんのお名前を知ったのは、私がまだ広尾で訓練を受けていたころでした。知る人ぞ知るブライアンの授業中、彼から何度か "KENJI SASAKI" というお名前を耳にしていました。あのブライアンが何度も口に出すとは、"KENJI SASAKI"という人は一体どんな人なのだろう‥‥とずっと思っていました。

ケニアに来て、初めて佐々木さんとお会いする機会がやってきました。今年の１月、第２回目の社会学分科会に呼んでいただいた時のことでした。実際お会いするまでに一度、この日のことでお電話をいただきお話はしていました。とてもしっかりとした話し方だったので、私よりも年上の方かな‥‥と思っていたので、実際お会いしてみて驚いたことを今でも憶えています。その後も２度分科会が開かれましたが、佐々木さんは司会役を務めて下さり、また会報に記事として載せる為に、話し合いを録音したりといつも熱心でした。４月に "PEOPLE" 第１号を発行できたのも、佐々木さんのおかげです。分科会で佐々木さんの意見や活動内容を聞くたび、彼の知識の多さ、内容の濃さなどに感心し、それに比べ私は‥‥といつも反省させられました。これからもいろいろなことを佐々木さんから学び、自分のこれからの活動に役立てたいと思っていたのに、とても残念でなりません。

今回のことはとてもとても悲しいことでした。でも、いつまでも悲しがっているということは、佐々木さんも望んではいないと思います。後ろは振り返らず、でも佐々木さんのことは忘れず、前を向いて彼の分も頑張って活動していきたいと思います。

最後に、佐々木さんのご冥福を心からお祈り申し上げます。

６年度２次隊　村落開発普及員　キツイ　山口　綾

佐々木さん

あなたがこのケニアで見たものは何だったのですか
あなたがこのケニアで感じたものは
先まで全く見えなかった星が今は綺麗に見えています
先までうるさかったここも　今は静かです
遠くで虫が鳴いています
薄い雲が東から西へ流れ
いつものように冷たく澄んだ空気が満ちています
星が一つ南の空に流れて消えた

６年度２次隊　理数科教師　ケロカ　多田輝行

三世の生命

生命は有限か、無限か、来世はあるのか、ないのか、誰しも多少は興味のあるこの問題について、私なりに少し触れてみたいと思う。

仏典では、生命は永遠につながっていると説かれている。例えば、私達は日中活動し夜になると疲れて床につく。そして翌日、又はつらつと行動する。生と死もこれと同じだというのである。ちょっと信じがたい気もするだろうが、近代科学のある学者は、「三世の生命を否定する科学的根拠は全く無い。むしろ何らかの形でつながっていると考えた方が自然である。」と語っている。

又、生命体についても面白い考察をしている。生命体を地球上に生存する動・植物だけにとらわれず、大きくは地球・宇宙も生命体だと言うのである。例えば川は血液、大地は皮膚、草木は毛、風は呼吸、そして自ら自転しながら太陽の回りを公転している ····。

先日、目にしたあるトピックに地球から一歩離れた宇宙空間は無音の死の世界ではなく、ダイナミックな鼓動の音律が脈動している旨書かれていた。

生命に三世があると考えると仏法の因果の理法にもうなづけるものがある。仏典には前世泥棒をすると来世貧乏に、美人を（その故に）謗るとブスに生まれる等説かれている。三世の生命を支点として見つめると、今世の幸・不幸の不平等も割り切れるものがある。

これから先は止めておくが、ともあれ三世の生命の立場から先日、不慮の事故で亡くなられた佐々木さんの来世の幸福を信じ祈るものである。

－終わり－

6年度2次隊　柔道　キガンジョ　栗原　豊

追悼文集にあてて

佐々木さんとの関係というと、残念ながら多くはなかった。まだ自分もケニアに来て日も浅く、顔をあわせる機会もドミであいさつするぐらいで、ただ明るい楽しそうな印象を持つだけであった。一度、仕事の問題があるらしく、楽しそうに話す中に熱心な顔をにじませながら話す姿を見れたのだが....

その週の金曜日に、一柳さんが私の学校に出張に来る予定だった。しかし火曜日の2時間目の授業が終わり、職員室に戻って一息ついていると、一台のパジェロがやってきて、同僚の先生が、嬉しそうにＪＩＣＡの人が来たと教えてくれた。予定より早くどうして、という気持ちと共に、一抹の不安を感じた。井ノ原さんの話は、日もたっていることもあり淡々としていた。そのいやな予感がよもやあたるとは....　信じられないという気持ちとともに、足が震えたことを今も覚えている。

その一週間は、人それぞれ特別のことであろうし、一生忘れえぬものであろう。今は佐々木さんのご冥福を祈るとともに、今後の自分の在り方を今一度考え直しさらなる自己実現に結び付けたいと思う。

6年2次隊　理数科教師　マチャコス　田中茂行

笑　顔

私と佐々木さんの付き合いは、短く５カ月しかありませんでした。隊次、職種や配属地など一つも共通するものがありませんでしたが、初めてお会いした時の印象は、やさしそうな人で笑顔を絶やさない人だというものでした。私は事務所やナイロビのドミトリーで、よく佐々木さんにお会いしましたが、実際にその通りで加えて真面目で慎重に行動し、とても親切な人で私に赴任先や生活の事について聞いて下さって、いろいろとアドバイスもして頂きました。私とは全く正反対な性格でした。

佐々木さんは、先輩、後輩隊員や事務所、勤務先の人々にとても好かれていました。それは佐々木さんの性格の良さがでている証拠だと思います。一番にあの笑顔が物語っていると思います。今でも佐々木さんの笑顔は鮮明に思い出せます。このケニアで日本人がこんなすばらしい顔が出来るんだと私は思いました。佐々木さんの様にすばらしい笑顔が出来る様になりたいと思います。そしてボランティアとして佐々木さんに笑われない様に、これからしっかり仕事をしていきます。

６年度２次隊　自動車整備　ナマンガ　藤塚幸一

任地が遠かった事もあり、直接お話する機会はなかったけれど、ナイロビドミでお会いしたとき、皆が、「謙ちゃん、謙ちゃん！」と声をかけていて、思い出すのは、笑顔ばかりです。これからも、佐々木さんの笑顔が、皆を励まし続けてくれると思います。

６年度２次隊　理数科教師　キシイ　山崎順子

佐々木さんが亡くなられてとても悲しく残念に思う。

ナイロビのドミトリーでお互い「こんにちは」と一度だけあいさつをかわした記憶だけがかすかに残っている。

若くしてこの世を去られ、今なおその功績や人生をつたえられている方々は世界中にたくさんおられる。その方々はみんな自己の信念の途中で亡くなられた。それ故に、今なお人々の共感を得、影響を与え続けられるのであろう。

心よりご冥福をお祈り致します。

６年度２次隊　理数科教師　フニュラ　小鍛治義広

平成6年3次隊より、佐々木さんへ

私が任地であるメルーに最初に行ったときのことです。ケニア人に囲まれてしまいました。ホテルに逃げてからも不安でたまりませんでした。そして、佐々木さんに電話をしました。その声を聞いた時、心のやすらぎを覚えました。先輩隊員がいるというのは、なんとありがたいことだろうかと。しかし、もう佐々木さんはいない。メルーで佐々木さんに笑われないようにしていこうと思います。残念でしかたがありません。酒を一緒に飲みたかったのに。

上下水道　メルー　畠山　修

佐々木さんとメルーで過ごせたのは、たった半日だっだけど、ケニアでの事やメルーでの生活について多くの話を聞けてとても感謝しています。佐々木さんと一緒にメルーの町を歩いていると、子供たちみんなが「ケンジ、ケンジ」と呼んでいたのをとてもうらやましく思い、自分も必ず現地の人に愛されるボランティアになろうと決意しました。これからは佐々木さんが築いた日本人のよいイメージを壊さないようにメルーで頑張って働きます。

測　　量　メルー　光田秀幸

その日は、私を迎えに来てくれる途中でのことでした。その日の朝、待ち合わせのことで、電話で話をしました。その時彼は、「時間を気にせずに来て下さい」と言っていました。私には、佐々木さんと共有した楽しい時間というものがほとんどありません。彼をおもうとき、事故の印象だけが強く、とてもつらい気持ちがします。それだけに、ケニアに来られた彼の御両親が、「あなた方がしっかりと協力活動を推し進めていって下さることこそ彼への何よりの供養です」とお話し下さったその言葉に、私はずいぶん救われた気持ちがしました。がんばろうと思います。

食用作物　ブンゴマ　晋川　眞

私は新隊員ということもあり、佐々木さんには一度会ったかどうかという程度で、会話をかわしたことはありません。事故後の周囲の人々の話から、どのような人だったのかをただ察するのみです。事故はいつ、誰に起こるかわかりません。しかし、今後も最善の注意を払ってバイクを利用していくしかありません。御家族の方々の「頑張って下さい」という一言が印象的です。

理数科教師　ケロカ　戸松樹円

私は新隊員なのでお話しした事はありませんでしたが、ドミトリーでお会いしたと思います。とても残念でなりません。まだ、右も左も分からない状態ですが、佐々木さんの分も頑張ろうと思っています。

料　　理　ナイロビ　石神祐子

佐々木さんとは、ＫＥＳＴＥＳのお食事会で、一度だけお話しする機会がありました。歳も同じで明るく初対面とは思えぬほど自然に接して下さった佐々木さんには親しみを覚えました。任期はまだまだ残っていた佐々木さんの活躍を思うと残念でしかたありませんが、その分、私も頑張ろうと思います。

理数科教師　ニャフルル　軸屋明広

私には、会ったことも話したこともない人なのに、お別れの会で、事故現場で、佐々木さんをとても身近に感じました。私には、彼の魂を思う事と、自分の仕事をする事しかできません。

理数科教師　ブ シ ア　森谷志津子

私の佐々木さんの思い出は、任地訪問でのカントリーバス・ステーションへの行き方を教えてもらった事です。とても親切に教えてもらったので、優しい先輩であると感じ、余り先輩隊員を知らない中でも知っている方でしたので、ショックも大きかったです。私も今後事故には十分気をつけていきたいと思います。

電 子 工 学　キアンブ　今松竜一

直接お話しする事ができなかったのが残念でなりません。ただ、話をされているときの笑顔がすばらしかった事を覚えておきたいと思います。

図　　学　ムランガ　各務史彦

佐々木さんとは任地も近く、又、景山隊員のハウスボーイと仲が良かった事もあり、一緒に遊びに行くつもりでいました。今後は彼から佐々木さんとの思い出話等を聞き、又、自分も事故の恐ろしさを教えていきたいです。

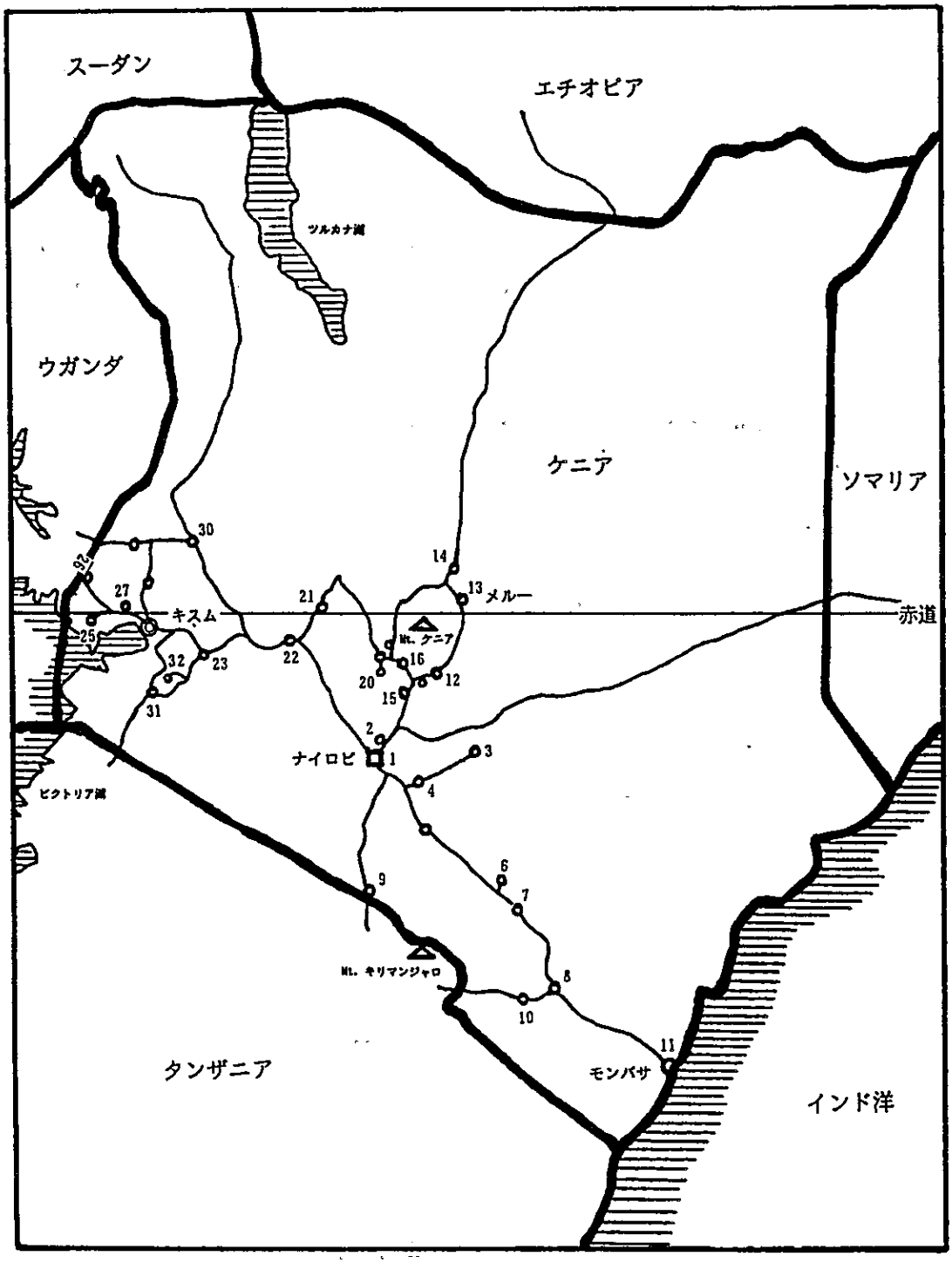
土 木 設 計　イシオロ　今井正樹

ケニアに赴任してからまだ日が浅く、残念ながら、佐々木さんとは親しくして頂く時間をもつ事が出来なかった私達ですが、多くの人々に慕われていた彼に、少しでも近づけるよう、頑張っていきたいと思います。

生　態　学　モンバサ　長谷鶴子
植　物　学　ナイロビ　森元泰行
自動車整備　ｱﾃｨﾄｱﾝﾃﾞｨ　森　泰文
婦人子供服　キリニャガ　峰宇多子
理数科教師　キ シ イ　牧田計志
理数科教師　キプテレ　菱田裕子

── ケニア青年海外協力隊　隊員配置図 ──

１９９５年５月７日現在



１．ＪＩＣＡナイロビ事務所

所長　長島俊一
次長　青木澄夫
次長　吉崎史明
所員　丸尾祐治
所員　柴田信二
所員　畝伊智朗
所員　伊藤徳弥
所員　山田良春
所員　小田中恵
所員　杉田映理
所員　藤江　顕
　　進藤むつみ
　　久保田恵子
調整員　一柳直仁
調整員　松下福代
調整員　内野直也
調整員　西川陽子

１．ナイロビ(NAIROBI)

4/3 原田博文　建築
4/3 服部一人　写真
4/3 川島レイ子　水泳
5/1 岩元由希子　日本語教師
5/2 亀井博美　ｼｽﾃﾑｴﾝｼﾞﾆｱ
5/3 山本直美　ｼｽﾃﾑｴﾝｼﾞﾆｱ
6/1 入山浩治　卓球
6/1 新関郁子　ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑｵﾌｨｻｰ
ｼﾆｱ 井ノ原卓　理数科教師
6/2 木村恭子　日本語教師
6/3 石神祐子　料理
6/3 森元泰行　植物学

２．キアンブ(KIAMBU)

6/3 今松竜一　電子機器

３．キツイ(KITUI)

4/1 照井　勝　農業土木
4/3 高見早苗　家畜飼育
6/2 山口　綾　村落開発

４．マチャコス(MACHAKOS)

6/2 田中茂行　理数科教師

５．ｽﾙﾀﾝ･ﾊﾑﾄﾞ(SULTAN HAMUD)

5/2 玉井朋代　保健婦

６．キブエジ(KIBWEZI)

5/3 新見克彦　理数科教師

７．ﾑﾃｨﾄ･ｱﾝﾃﾞｨ(MTITO ANDEI)

6/3 森　泰文　自動車整備

８．ボイ(VOI)

4/3 室　英明　自動車整備

９．ナマンガ(NAMANGA)

6/2 藤塚幸一　自動車整備

１０．ウエルガ(WERUGHA)

6/2 今林雅子　理数科教師

１１．モンバサ(MOMBASA)

4/2 関根雅史　生態学
5/1 羽柴千夏　ﾊﾞﾚｰﾎﾞｰﾙ
5/2 上垣晴美　公衆衛生
5/2 工藤幸一　自動車整備
6/3 長谷鶴子　生態学

１２．エンブ(EMBU)

5/3 佐保直子　建築

１３．メルー(MERU)

6/3 畠山　修　上下水道
6/3 光田秀幸　測量

１４．イシオロ(ISIOLO)

6/3 今井正樹　土木設計

１５．ムランガ(MURANGA)

5/2 中村隆康　電子機器
5/3 竹野伸治　野菜
6/2 村上晴美　土木設計
6/3 各務史彦　図学

１６．カラチナ(KARATINA)

4/3 丹みゆき　理数科教師

１７．ｷﾘﾆｬｶﾞ(KIRINYAGA)

6/2 菅谷泰子　理数科教師
6/3 峯宇多子　婦人子供服

１８．ニエリ(NYERI)

4/3 紺野正敏　電気工事
5/3 小野寺徹　自動車整備
6/1 志知美保子　婦人子供服

１９．キガンジョ(KIGANJO)

6/2 栗原　豊　柔道

２０．オサヤ(OTHAYA)

4/2 加藤　真　食品加工

２１．ﾆｬﾌﾙﾙ(NYAHURURU)

5/2 岩田憲保　養殖
6/3 軸屋明弘　理数科教師

２２．ナクル(NAKURU)

6/1 山崎　希　陶磁器

２３．キプテレ(KIPTERE)

6/3 菱田裕子　理数科教師

２４．キスム(KISUMU)

4/3 柴田剛史　養殖
5/1 原　耕三　電子機器

２５．シアヤ(SIAYA)

5/2 富樫弘之　農業土木

２６．ブシア(BUSIA)

4/3 前田美子　理数科教師
6/2 小鍛治義広　理数科教師
6/3 森谷志津子　理数科教師

２７．ブテレ(BUTERE)

5/2 二木洋行　理数科教師

２８．カカメガ(KAKAMEGA)

4/2 伊佐治直樹　測量
5/2 橋本堂史　理数科教師
5/3 西村由実子　社会学

２９．ブンゴマ(BUNGOMA)

5/2 橋場裕之　土木施工
6/3 晋川　眞　食用作物

３０．ｴﾙﾄﾞﾚｯﾄ(ELDORET)

4/2 中島克己　自動車整備
4/2 小林精三　建築
6/2 野地元子　ｼｽﾃﾑｴﾝｼﾞﾆｱ

３１．キシイ(KISII)

6/2 多田輝行　理数科教師
6/2 山崎順子　理数科教師
6/3 戸松樹円　理数科教師
6/3 牧田計志　理数科教師

３２．ニャミラ(NYAMIRA)

5/3 山本裕子　理数科教師

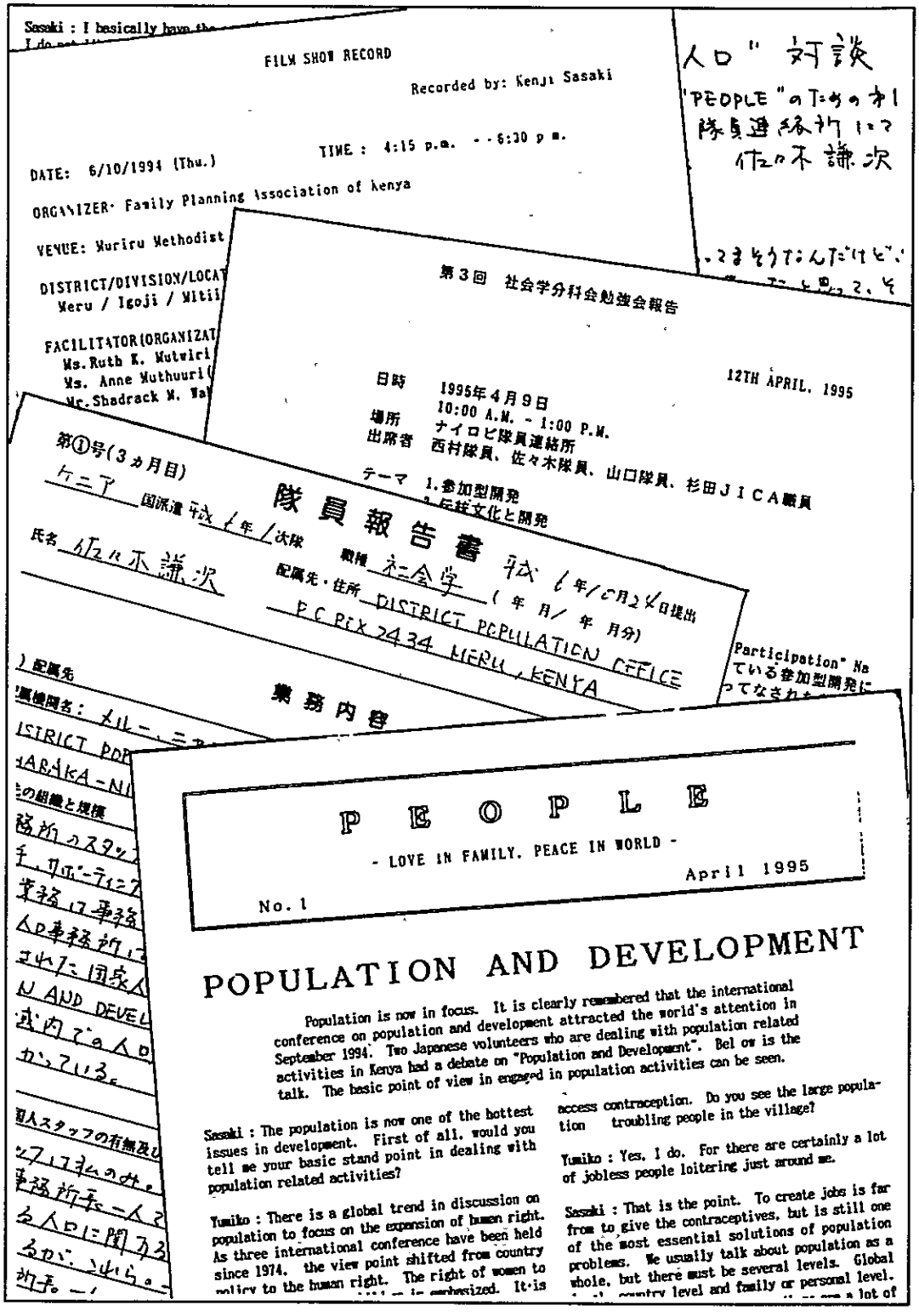
かきあと　－ 佐々木謙次隊員　遺稿集 －

隊員報告書０号 …… 143
隊員報告書１号 …… 146
隊員報告書２号 …… 153
MONTHLY REPORT …… 159
BRIEF REPORT …… 160
FILM SHOW RECORD …… 161
チョゴリア病院での講義用参考資料 …… 162
各レポートからの抜粋 …… 163
社会学分科会の記録 …… 170
社会学分科会　会報誌 "PEOPLE" …… 171
"PEOPLE" ができるまで …… 175
ケニア協力隊機関誌 "ウペポ" 第６４号 …… 178
"ウペポ" 第６５号 …… 179
ケニア隊員住所録 …… 181

あしあと　－ 佐々木謙次隊員　経歴 －

派遣前訓練 …… 182
現地訓練 …… 183
隊員活動の記録 …… 185
余暇 …… 188
あしあとマップ …… 191

かきあと



Sasaki : I basically have the

FILM SHOW RECORD

Recorded by: Kenji Sasaki

DATE: 6/10/1994 (Thu.)

TIME : 4:15 p.m. - - 6:30 p.m.

ORGANIZER: Family Planning Association of Kenya

VENUE: Muriru Methodist

DISTRICT/DIVISION/LOCAT
Meru / Igoji / Mitii

FACILITATOR(ORGANIZAT
Ms. Ruth K. Mutwiri
Ms. Anne Muthuuri(
Mr. Shadrack M. Wa

人口" 対談
"PEOPLE"のための第1
隊員連絡所にて
佐々木謙次

第3回 社会学分科会勉強会報告

12TH APRIL, 1995

日時 1995年4月9日
10:00 A.M. - 1:00 P.M.
場所 ナイロビ隊員連絡所
出席者 西村隊員、佐々木隊員、山口隊員、杉田JICA職員

テーマ 1.参加型開発
2.伝統文化と開発

第①号(3ヵ月目)

隊員報告書

ケニア 国派遣 平成6年1次隊 職種 社会学 平成6年10月24日提出

氏名 佐々木謙次

配属先・住所 DISTRICT POPULATION OFFICE
P.O. BOX 2434 MERU, KENYA

業務内容

Participation" Na
ている参加型開発に
ってなされ

P E O P L E

- LOVE IN FAMILY, PEACE IN WORLD -

No. 1

April 1995

POPULATION AND DEVELOPMENT

Population is now in focus. It is clearly remembered that the international conference on population and development attracted the world's attention in September 1994. Two Japanese volunteers who are dealing with population related activities in Kenya had a debate on "Population and Development". Bel ow is the talk. The basic point of view in engaged in population activities can be seen.

Sasaki : The population is now one of the hottest issues in development. First of all, would you tell me your basic stand point in dealing with population related activities?

Yumiko : There is a global trend in discussion on population to focus on the expansion of human right. As three international conference have been held since 1974, the view point shifted from country policy to the human right. The right of women to ... is emphasized. It is

access contraception. Do you see the large population troubling people in the village?

Yumiko : Yes, I do. For there are certainly a lot of jobless people loitering just around me.

Sasaki : That is the point. To create jobs is far from to give the contraceptives, but is still one of the most essential solutions of population problems. We usually talk about population as a whole, but there must be several levels. Global ... country level and family or personal level. ... a lot of

〈隊員報告書0号より〉

任地・配属先について

ケニアは日本とは独立以来一貫して友好的関係が続いている。現在サブサハラ1位の援助受取国として技術協力・無償資金協力が供与されている。青年海外協力隊に関して見ると、1966年以来派遣が続いており、数でいうとマラウイに次ぐアフリカ域内第2位、世界第4位の派遣数である。社会基盤・人的資源が中心分野であり社会隊員として国家人口審議会人口抑制部の下で働くわたしの仕事もこの分野に含まれる。

国家人口審議会は人口問題を解決するために組織された特別の省である。ケニアの人口の特筆すべき点として、人口増加率が非常に高いことがあげられる。1980年から89年までの年平均人口増加率は3.5%でこれは世界で最も高いサブサハラアフリカの平均を上回っている。人口増加率が高い理由は死亡率、特に乳児死亡率が生活水準や保健衛生の向上で急激に下がった一方出生率、合計特殊出生率が高いままの水準を保っているためである。

ケニアの出生率が高い主な理由としては①早婚が主流を占める婚姻パターン②一夫多妻制の存在③農業人口が多く家族労働力確保の必要上④多産を美徳とする文化的背景が考えられる。女性の半数以上が20歳以前に結婚し、この結果女性の3分の1以上が18歳で母親に、半分以上が20歳以前に母親となる。また婚姻女性の4分の1は一夫多妻制の下での妻であり、3分の2を超える農業人口は都市の住人に比べて多くの子供を持つ傾向がある。

人口増加率が高い結果として依属人口指数が114%と極めて高くなっている。また経済社会・環境全体に対して人口の負担が重く悪影響を及ぼしている。同時に望まない妊娠が多く、子供の数についての理想と現実が大きくひらいていることも認識しなければならないことである。ここで人口援助が登場する必要がでてくる。家族計画プログラムのおかげで合計特殊出生率

隊員報告書0号とは…
ケニア赴任前、広尾訓練所の時にレポートの1つとして提出したものであり、任国・ケニアについて、配属先について、隊員生活の設計、参加動機等を述べることになっている。

は1984年の7.7から90年の7.5まで大きく下がった。

ただし、人口問題は途上国の社会・経済発展・基本的人権の擁護、環境問題などと深くかかわり合っており、人口援助を単に避妊法の普及活動のみと考えるのは間違いである。人口援助は個人レベル、国家・地域レベル、地球レベルで考えるべき問題である。個人レベルでは基本的人権の擁護を目的とし、親の子供の数を決定する権利、生まれてきた子供が健全に育つ権利が満たされなければならない。国家・地域レベルでは人口増加による環境危機から地球を救うことを目的とする。

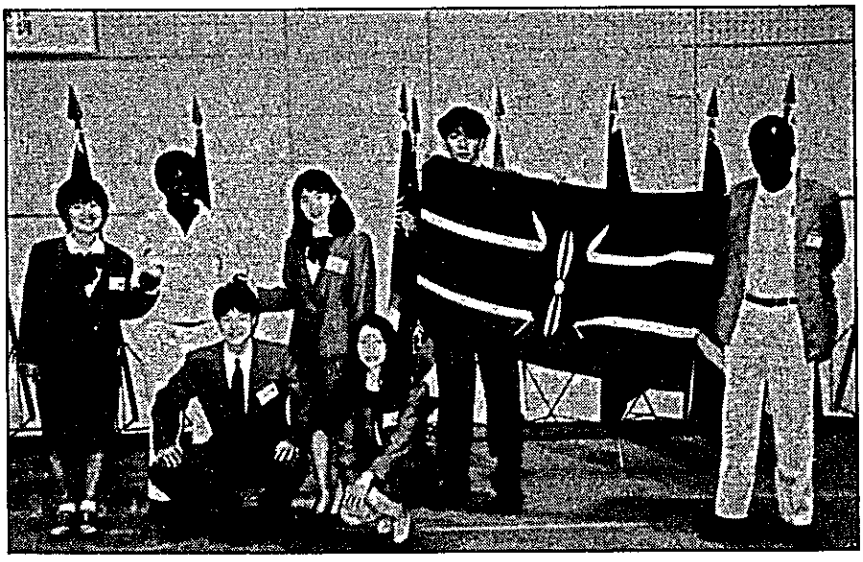
人口問題を解決する手段として、主に4種類の人口援助が必要とされている。まず第一は人口に関するデータの収集とその分析である。問題解決には現状の把握が必要だが、途上国ではそのためのデータが整備されていないところが多い。基礎人口データ、人口動態を把握してこそ問題解決に一歩近づくことができる。第二に政策の策定・評価・実施があげられる。国家の政策は親にとって、子供を少なく持つことの非常に強い動機となり得る。しかし強制力をもち過ぎると人権侵害となるので注意が必要とされる。また、第三に家族計画の実施である。これは避妊法の普及のみを意味するのではなく、母子健康保健サービスや研究なども含まれる。最後に第四としてコミュニケーション・教育に関わる人口援助がある。マスメディアや学校を通して人口問題に関する理解・意識の向上をはかることは人口問題を解決する上で不可欠の要素である。

これらの援助の中で私がたずさわることになるのは、主に家族計画プログラムである。特に避妊法の普及のための活動援助を中心とし家族計画の実際の評価・管理にたずさわる。他の重要な柱は基礎的データ収集で、人口動態の社会・経済的要因を把握するための資料集めとして調査の手伝いをする。

隊員生活の設計

ケニアで快適に暮らすには、自分を知り、相手を知ること、そう好かすること。外国であり、発展途上国であるケニアは当然、日本と違った社会・文化を持ち、そこに暮らす我々はもちろんそれを受け入れることを要求される。しかしまず自分というものを良く知っていれば、その国の文化に自分を合わせていくうちに自分の変化を知ることができる。どの程度変化したからまだ大丈夫であるとか、ちょっとペースダウンして休みをとった方がいいだとか、自分を知っていさえすれば、自分を保ちながらうまく適応していくことができるだろう。

またケニアは日本と違う側面を持っているのは当然であるが、同じ人間の社会であり共通することも多い。特に人に接する際には日本人と接するのと同様に相手の気持ちをよみとろうと努力し、誠意をもって接することが重要である。一方でまた違う文化で育った人間同士がコミュニケーションをとろうとするのだから、分からないことがあれば率直にたずね、自分の思うことはは、っきりと言ってみることが大切である。



広尾訓練所講堂にて語学交流会
ケニアからの研修生２名とともに

〈隊員報告書１号より〉

(B) 協力活動

a) 今後２年間の決意と心構え

ケニアに来て早いものでもう３ヶ月。任地に赴任してはや ひと月半。
光陰矢のごとし。今後２年間の決意と言っても実際には１年と９ヶ月。
さて、何ができるだろう。

まず、ひとつの事務所に配属されたのであるから、この事務所の活動すべてを向上させるように努める。小さい事務所であり責任は事務所長ひとりにあるので、事務所の仕事すべてが把握しやすくてよい。私に事務所の仕事全てが担わされているわけではない。事務所長は上司でありながらカウンターパートでもある。ひと月半ほど事務所にいるが改善すべき点が小ほど見受けられる。特に他の人や団体に影響が及ぶような仕事は不備のないようしていきたい。また、事務所長ひとりではどうしても行き届かなかった細かな仕事を事務所のため、ひいては住民の生活向上のためと心に留めて活動していきたい。

現地の人にとけ込んで、ケニアの人の暮らしを知りたいというのも赴任当初の目的である。仕事から村に入って、村人の生活に触れる機会には恵まれている。ただのほほーんと生活を眺めていくのではなく、問題意識を携えて積極的に村人の生活に関わっていきたい。

これだけでは協力隊らしくない。と言うより私が協力隊を志望した目的を満たしていない。目的は、ひとりでも多くの人に幸せをつかんでもらうのを手助けすることである。ひとりでも多くの人に直接「ありがとう」と言ってもらうことである。大きいことなどできると思っていないしようとも思っていない。自分がだれかのためになりそれが感謝のかたちで直接返ってくる。そこに多くのボランティアは至上の喜びを感じるのだろうし、私もそこに喜びを見い出している一人である。社会が込み入っていく中、誰に感謝したらよいのか、なぜ感謝されるのか、単純に分かる世界に健全さを感じるのだろうか。仕事上でも仕事に関係なくてもよいから

1－2

隊員報告書１号について…

隊員報告書１号は、任国・ケニアに赴任して３カ月目に提出する報告書であり、業務内容、今後の決意と心構え、任国の印象、現地訓練等について述べることになっている。

なにか1つ、人に直接喜びを与えることができることをしていきたい。

ただ問題はその想像力のなさである。自分のまわりだけのと全く異なる世界に入って自分が本当は何をしたいのか、何をするべきなのかなどのなかなかとまらない。早くしないと、2年なんてあっという間と誰もが感じているのだろう。1つだけ心に留めているのが、2年間で何ができるかを考えるのではなく、自分が何をしたいのかということである。

c)計画

前任者がいるためその仕事を引き継ぐかたちをとる。事務所長の補佐という職務から、事務所の担うすべての仕事に関係していく。

中心は人口教育・家族計画普及活動の調整業務である。各病院やNGOが行う避妊サービスや家族計画の打診普及活動に対しての手伝い物資援助などを行う。その他、人口教育に関するセミナーなどを開催して人口教育普及に努める。

また、人口・家族に関するサーベイリサーチも多くは事務所を通して行われている。主催者は国際機関や大学などだが、実際のフィールドワークの部分の調整を担う。これらの結果から域内の人口教育活動の計画をたてるのも事務所の仕事である。

さらに、活動がどのように行われ、援助がどの程度効果的であるかを評価する業務も担う。域内の人口教育・家族計画活動はすべて事務所に報告が上がることになっており、日標の一本化をはかる

d)隊員の住居手配状況 (①相手国側が手配した場合 ②隊員自身が手配した場合)

前任者の家をそのまま引き継ぐ。家賃はJDCV側が肩代り。自分で選んだわけではないのだが結構家に入っている。学校の先生の給与くらい払っているのだろうか、かなり立派な家である。この近所でも電気・水道のない家庭の方が多いが、うちは電気・水道電話プロパンガスまである。せいたくな暮らしである。部屋は広いリビングにベッドルームが3つ。あとはキッチン・バス・トイレ。芝生に覆われた広い庭にはバナナも生えている。広くはないが家庭菜園用の畑までついている。

メルーの街からは4kmほどと少々遠いが、途中の町まで徒歩20分。そこから乗り合いタクシーで5分とさほどかからない。バイクがあればさらに楽になる。難を言えば途中の道がとんでもないラフロードで、雨が降ると道いっぱいに水たまりができること。

現在までのところ、週末がほとんどつぶれたため、家のことがほとんどできていない。これから住み安く改善することである。

一般状況

(A) 任国事情

a) 任国の印象

ケニアもやはり発展途上国である。日本におけるケニアのイメージはとてもよい。途上国の中でも洗練された国と考えられている。ナイロビ、サファリ、ケニア山、コーヒー、紅茶、どれをとってもきれいなイメージがある。マサイにしても伝統的生活を保っていると言っても、きれいに着飾り、やはり洗練されたイメージがある。そのせいだろうか、こちらに来て全体的にケニアが気に入ったにもかかわらず まだまだの部分が目立つ。

人について。ケニアの人はみな人なつっこくて親切である。部族によっても違うというし、これまで限られた人としか会っていないので一般的なことは言えないが、これまでのところとんでもなくいやなやつには出会っていない。逆に困っていると頼みもしないのに世話をやいてくれる。ひとつ面食らったのがお金にうるさいことである。お金にうるさいと言っても「お金ちょうだい」とうるさいのである。最初は本当に不快であったが最近は愛敬として受け取っている彼らにとっては生きるための一つの手段なのである。なんとかしてお金を手に入れないと生活できない。ちょっとでも金を持っていそうな人にそうのは自然である。

自然について。これまで歩いてきた中央部の高原について1か言えないが、非常に暮らしやすい気候である。7月が最も寒いというかジャケットひとつあればこと足りる。日差しはきついが汗をだらだらかくというものではない。サバンナがあり動物がいる。一年中花が咲いており、果物も豊富である。雨期の雨はひどいが日本の梅雨を思うとそれほどでもない。多くの観光客がこの自然目当てにやってくるのもうなずける。ただこちらのひとは、この自然を観光客のようにぼーと眺めているのではなく自然におおいに影響を受けながら また時には支配されながら生活している。雨期の始まりに作物を植え付けて雨水にたよる。乾期には生活用の水にも困るところが多い。不作の時は農民が集団で

食糧。強奪。夜は暗い！車も通れないラフロードをいたずら歩く。まさに自然の中で一体となって生きている感じである。

物について。ナイロビにはなんでもあると聞かされていた。確かにたいていのものはそろうが、輸入品であり高価である。物はあるのだがもうちょっとこまやかにあればいいのにと感じるものばかり。日本のように細かなニーズにあったバラエティのほとんどない。また、ナイロビにあるものが地方に出回っていない。ナイロビにあった様々の種類の野菜がわれのいる田舎町（と言っても地方都市）には全くない。他のものも種類が非常に限られてくる。地方には市場がないのも確かなんだろうが、それよりも国内の流通が整っていないことが要因であろう。流通機構の整備によって初めて市場が広がるのであろう。

開発問題について。3ヶ月いただけで解ったほどせるほど開発問題は簡単ではない。それでも、ただ暮らしているだけで、足りない部分はいやでも見えてくる。なによりも仕事が足りない。なにもすることがなく町でぶらぶらしている人も多い。非常に小さな商いにしかならないものを売り歩いている人も多い。彼らはそれだけでは生計が立たないだろうから、自分の食べるものくらいは畑も耕しているのだろう。しかし現在ではどんな田舎にも現金経済は浸透しており自給自足ではやっていけないようになっている。子どもの教育費もたいへんなものだし、衣食住すべてにお金がかかるしくみになっている。仕事を自ら作り出すことはできないが、仕事さえあれば彼らはそれなりに生活を向上させようという意気込みはある。

そんなこんなもふくめて、われはこの国が大好きである。人が自然と関わり合いながら素直に生きている。生きるために生活している。われもケニアの生活すべてを楽しんでいる段階である。

b)現地訓練について

現地訓練のおもな内容は語学研修とホームステイ。どちらも現地の生活にとりこむために役に立ったと感じている。前者はおもにその手段を得るために、後者はその心構えというか姿勢のようなものを身につけるために。

まずは語学研修。朝8時半から夕方5時まで、週5日、3週間ちょっとにわたって行われた。これまでかじったこともないスワヒリ語である。生徒3人、先生は35歳の男性。スワヒリ語教授法の訓練を受けたこともないのだろうが、この学校で2年間の経験があるらしく、会話を中心にひととおりの文法事項を組み入れていた。あいさつからはじまり日常生活に関する会話、動詞、名詞、形容詞の活用から仮定法にいたるまで、テキスト一冊分は網羅した。あとは単語を覚えさえすれば今すぐの人と立派に会話ができそうである。現地語学研修中に会話ができるようになったかというと、否である。これはあくまでも本人のやる気に因るのだろうから誰にも文句を言えまい。

語学研修中にホテルの一人部屋をあてがってくれたのは自習をするのにとても都合が良かった。ひとつ語学研修に関しての不満は、現地訓練ではないのだが、広尾の訓練前でスワヒリ語を選択できなかったことである。ケニアでは明らかに英語よりもスワヒリ語の方がポピュラーである。特に田舎に行けば行くほど。英語はしゃべれないけれどスワヒリ語ならという人も多い。部族語しか分からない人も少しはいるがたいていは通じる。日本でスワヒリ語を少しでもかじっておけば現地訓練が何倍も有効に活用できたと思われる。せっかく広尾にスワヒリ語の先生がいるのだからもったいない。

そして、ホームステイ。このホームステイは2年経って協力隊活動が終了した時ふり返っても、おそらく最も印象深い思い出のひとつになろう。まさにアフリカを体験する1週間であった。アフリカに着いて間もない現地訓練中にこのような

機会に恵まれて非常に幸運であった。地方の町からトラックの荷台にゆられて1時間、小さいお店が数軒とまったない食堂が2軒ある小さな集落に着く。ここから丘を越えて歩くこと小1時間、土壁に草葺きの家にたり着く。昼は水浴みと山羊追いと焼き畑作り。バオバブの木に蜂の巣箱も設置した。夜は真っ暗な中広場でお茶を飲みながら語り合い。電気がなくても水道がなくても村人みんな仲良く暮らせる！作物もそれほど多くないけど生活していけるだけのものは収穫できる。何が人間にとって幸せで、人間はどっちに向いて進んでいったら良いのか、開発・環境などのものを考えさせられる旅だった。あ、どうしても書き落としてはならない思い出があった。食事。毎日、豆を煮たギゼリというやつばかり。決してまらいな。ではないが、普通食べたいなあと思う量の3.4倍は盛られる。しかも明けても暮れてもそれ。もーいいよーという思い出。楽しくかつ有意なホームステイであった。

エンプでの新隊員歓迎会

〈隊員報告書２号より〉

ケニア	６　１	社会学
		DISTRICT POPULATION OFFICE MERU
佐々木謙次		P.O.BOX 2434 MERU, KENYA

配属先事務所の正式名称 District Population Office Meru。メルー県、タラカニティ県、ニャンベネ県の３県を管轄する地区人口事務所に配属となった。域内の人口、家族計画活動およびＡＩＤＳに関する普及教育活動を調整する政府の役所。主な業務領域は 1)人口計画の立案実施 2)IEC(Information, Education and Comunication)活動とその調整および 3)調査、実施管理および評価ということになっている。

1994年９月１日着任。それ以前の任地訪問を利用して前任者からの引き継ぎを簡単に済ませた。職務は上司である地区人口事務所長のアシスタント。前任者の仕事を引き継ぐことになるが、実際に引き継ぎに関して要した時間は１日ほど。自分で自由に仕事を組み立てていくことになる。

与えられている仕事は上司のアシスタントであるので、ボランティアがいなければ放っておかれるという仕事はない。ただし配属先で人口事務所本来の業務を遂行するのは人口事務所長と副所長であるボランティアの２人だけであるので、上司とともに忙しく仕事をこなす。事務所の仕事としては調整業務が主であり、具体的には人口・家族計画に関する中央のプロジェクトが管轄県内で行われる場合に、県内で実際に活動しているＮＧＯや病院と連絡をとり、時間場所などを調整するといったことなど。域内の活動団体をまわって情報を集めるのも仕事のひとつである。

ただ忙しさにもむらがあり、いくつものプロジェクトが同時に行われることもあれば、何もないこともある。その場合、そのほかに、自分の興味のあることに関わる時間を割くことができる。ただし、金銭面での後ろだてがないので、自分でプロジェクトを組み立てることはできず、地域に根付いた人口・家族計画活動を行っている団体の活動に参加していくことになる。これまでのところ、各団体の活動を見て回って、効果的な活動計画を思案しているところである。

隊員報告書２号について…

この報告書は正式に事務所に提出されたものではなく、下書きの状態で、後日佐々木君の家の勉強室を整理している時に見つかったものである。２号報告書は赴任してから半年後に提出されるものであり、佐々木君の場合、提出期限は今年の１月くらいだったのだが…。最初のページには業務内容として、「着任時の配属先の状況」が述べられている。

まず、調整業務。これが事務所の最も重要なしごとであり、ボランティアはその補助のため要請されているので力をいれるべきものである。人にあって約束をとりつけたり、下調べををしたりレターを書いたりとさまざまであるが本来の仕事である。上司と一緒に仲良くやっていきたい。

次に、情報収集と整理。これは一部は現在やっているが、さらに本格的にやっていきたい。この目的はより効果的なプロジェクト、行動を計画することにある。収集、整理された情報はおもに域内の活動団体を通して実際の活動向上にきすることになる。現在収集、整理されている資料は域内に１０ほどあるおもな家族計画普及活動実施団体の団体、活動、月ごとのクライアント獲得数のみである。それ以外に地区ごとの保健、家族計画の状況やプロジェクトの地区によるかたより、人口分布など、事務所が地域の人口・家族計画情報センターとなるべく情報を集めていきたい。

人口・家族計画活動で最も重要なものの一つが普及活動である。配属先事務所自体は調整機関なので独自のプロジェクトをやっていないが、その中でも事務所が主体性を発揮できる活動がいくつかあり、その一つがＪＩＣＡの人口教育促進プロジェクトがこの地域でやっているビデオ上映会である。ＡＩＤＳ、家族計画にかんするビデオを村村をまわって上映するのだが、この地域での実際の準備、運営をほぼ全面的にまかされている。この活動もルーティンワークとして最も力をいれてやっていきたい。うまく利用すれば非常に効果的な普及活動である。また、お金を使わない普及活動として自分自身が色々な場所で人口についてはなしをすることも考えている。域内各地にそれぞれボランティア団体があり、人口の話をして欲しいという要請も少なくない。自分の勉強としてもさらに回数を増やしてやっていきたい。

現在、人口問題は幅広くとらえられ、その解決策のなかに生活の全体的な向上をはかるというアプローチがあり、ＪＩＣＡのプロジェクトもこの地域に１つパイロット村を設定し、村落開発をはかっている。私はこれにもっとも深く関わりたいと思っている。

最後の締めくくりとして、1996年に入ったら、管轄県をカバーするサーベイリサーチをやりたいと考えている。それまでに村に入って状況を十分つかみ、「社会学」隊員としてこ日本の経験を生かして、まとめとして人口状況の改善のための提言ができるよう本格的な調査をしたいと考えている。

（２ページ目）
ここには業務内容としての、「業務実施計画」が述べられている。

とくに「変更」となった点はない。要請書で見るようなかっこいい、主体性のありそうな仕事よりも実際には、縁の下の力持ちかどうかは知らないが、雑用のほうが多い。調整業務も日本でてきぱきとこなせるようにはこちらではこなせない苛立たしさがある。大きな目で見ると人口活動という世界の大問題に取り組んでいるいるように思えるが、具体的にやっていることは使い走りのようなことである。ここに疑問を感じる人は感じるんだろうなと思うこともあるけれど、楽しくやっているので不満はない。

時間を見つけること。プロジェクトが重なって週末返上でお仕事のこともあるが、たいていは自分の興味あることに費やす時間くらいある。「社会学」隊員として来たからには、やっぱり現地の日常社会を深く知りたいが、調整業務の合間にも時間はある。調査書を読んで考えていたほど主体的な普及活動がないという相違があるが、積極的に活動実施団体に顔をだして話をすることによって少しは意見が反映されているという希望をもって活動している。

「社会学」の専門知識や技術は日常業務を遂行する上でこれっぽっちも必要ない。調査書に書いてたあったように語学堪能である必要もない。英語は日常会話ぐらいできればなんとかなるだろうし、スワヒリ語も部族語もできなければ英語でことたりる。まあ、全てあればあるだけ活動の幅が広がるし、深くなることも確かである。語学はできたほうが現地にとけ込めるし、「社会学」や「人類学」のバックグラウンドがあればそれなりに楽しく活動することができる。

しかしなによりも重要なことが人を相手にする仕事であること。人と接するのが好きな人、しゃべるのが好きな人や人を喜ばせる術を持ってる人なんかは仕事に役立つと思われる。ソーシャルワーカーのような経験のある人ならなお良いのかも知れない。何でも広く深い経験があればよりよいのは確かである。

〈3ページ目〉
このページは、支援体制としての（A）要請内容（要請背景調査と比較して）について3つの段落に区切られている。上から、 a）任務の「変更」事項について、 b）相違点とその措置、 c）要請されている技術水準、 の3項目が述べられている。

特に機材を必要とする仕事は少ないが、事務所でおもに利用する機材としては以下の３点。1)コピー機：調整業務、レポート作成などに使うが、現在故障中。コピーの必要な場合外　にいって１枚８円程度。現地の物価からしたら高いのでぜひ早く治っていただきたい。2)車：ミツビシパジェロがあるがほとんどボス専用。たまにどうしても必要なときは頼み込んで使用。3)電話：こいつも業務上必要であるがお金を払ってないので受け取り専用。たびたび自宅に戻って電話をすることになる。その他印刷機、タイプライター、テレビ、ビデオ、ＯＨＰなどがあるが私は使用しない。また、ＪＩＣＡプロジェクトが所有のＡＶバンとビデオ上映用機材を普及活動で使う。

なし。前任者は調査費用として支援経費を獲得したようである。ソフトを扱う仕事であるので必要不可欠の「機材」というものはあまりない。

パーソナルコンピューター。まず個人的な理由。現在家に持ち帰っている仕事が非常に多い。レポート作成、レジュメ作成、統計作成をすべて家に持ち帰っているのを昼間のうちに済ませるため。さらにこちらのほうが重要なのだが、配属先事務所が地域の人口家族計画情報センターになるべく、情報の整理加工をするため。具体的には所長、および私が出席するセミナーで配布するインパクトのある資料を作成したり、月刊レポートを各家族計画実施団体や教会、学校など人の集まる場所に配布する。またコンピュータがないため現在使われていない調査データを分析し、より適切な活動実施をはかる。

〈４ページ目〉
このページも支援体制（Ｂ）機材（担当業務に関連して）について。上の段落から、ａ）所属先が備えていたもの、　ｂ）ＪＯＣＶ調達分、　ｃ）今後必要と思われるもの及びその利用目的、　の３項目が述べられている。

良好この上なし。あと足りないのは女の子くらい。

まず衣食住の衣に関係して気候その他の自然環境から。年平均気温１８'Cで年間降水量1500mmくらい。一年を通じて（まだ一年たっていないけど）過ごしやすい。寒くて布団からでられないということもなく、うだるような暑さというものもない。ただ年２回ある雨期になると道がぐちょぐちょになって家から出たくなくなる。逆に乾期には道がばさばさに乾いて鼻毛がのびてしょうがない。

食べ物は、食通でないので、とくに不満はない。料理の得意な人なら基本的な材料は揃っているので満足できる食生活を送れそうなところである。ちょっと凝ったものはナイロビ行かないとないけど、玉葱、人参、じゃがいも、キャベツやある程度の種類の果物は豊富にある。私自身は料理をしないので、ちょこちょこ近所のおばちゃんの家に食べに行っている。ケニア人に任せとくといつも同じようなものばかりで工夫が足りない気がするが、楽しくお食事満足している。

住環境は申し分なし。電気あり水道あり。ガス（プロパンだけど）さえもある。停電はしょっちゅうだが１、２時間もすると、ろうそくの火で感傷に耽っていようが、必ず戻ってくる。町にあふれているほど水道の水は豊富ではないようだが、これまでのところそれほど水に困った記憶もない。なによりお家が広いのがいい。東京の六畳一間に住んでた身にとっては持て余すかなと思いきや、何の何の、広さは人間を大きくする。３ＬＤＫ庭付き一戸建ての夢の住まい。緑に覆われた庭ではバナナの葉がさらさらと。鳥達が色鮮やかに遊んでいる。

そしてそこに出入りする人間関係。こいつが一層大事なんだが、これまた結構。もともと自分から積極的につきあいを増やす方ではないが、この田舎町で外人というだけで、いやでもちやほやされる。仕事関係の人、近所の人、ただ町で見かけただけ人。客人大歓迎の地なのでいろんな人がお家に招待してくれる。いきなり知らない人のところ行ってもお茶とおしゃべりでもてなしてくれる。孤立感というものが全くない。のんびり今を楽しもうという気にさせてくれる。ついでにガキども。こいつらのうるさうこと。そこら辺を歩いていると短いてを精いっぱい長くして一生懸命手を振りながら、"はう、あ、ゆう"を繰り返す。週末になると家を散らかしにくる。どんなに憎たらしくてもそこは子供。やっ

〈５・６ページ目〉
ここには、一般状況としての（Ａ）任国事情　ａ）自分の生活環境、　が２ページにわたって述べられている。

ばりかわいい。無邪気である。自分に正直で、なんにでも一生懸命アッククしてる。こいつらのためにもこの国が良くなって欲しいといつも思う。子供は宝物である。ここでちょっと問題となるのが言葉。いくら英語が公用語だとはいえこの辺の人にとっては外国語。日常会話は部族語かせいぜい国語のスワヒリ語のほうが話も弾むというものだ。意志さえあればなんとか通じるのもだけども・・・。あー、もっと勉強しなければ。

仕事をしにきたからには、こいつも私のなかで大きな位置を占めている。思ってたほど面白い活動ができるわけではないが、ストレスもプレッシャーも関係なくのんびりやっている。何でもかんでもうまくいってるわけではないが、自分の思い通りに運ばないのが事後との常、不満ではない。唯一の苦言（ちょびっと）は上司について。悪い人ではないけれど、上司－部下関係で見ると、ちょっと、と口を濁してしまう。こっちも大人ですから、非常に良好な人間関係を保ってるけど。仕事上でも、私生活でも。

と、いうことで物的環境についてあえて不満を述べる点は殆どない。そのなかで一番不足していると思うのが情報、というか、本。ちょっと何かを調べたい、ちょっと何かを勉強したいと思いついても、これまで日本で手に入れてきたようには簡単にはいかない。時々ナイロビにでて本屋や図書館をあさるが日本にくらぶれば。まあ、さりとてなけらばないでそれなりに。郷に入れば郷に従えで、こっちのライフスタイルに合わせるだけのこと。本なんかからじゃなくて学ぶところはいっぱいあるのだから。日本のように情報に追われてるという切迫感も全くないし。もう一つなくて淋しいものが情緒。日本にいる時は疲れたらちょっとその辺を散歩するだけで、季節ごとになにか情緒を感じてリフレッシュすることができた。週末旅行のネタなんて事欠くことはなかった。ここにいるとどこ行っても同じで、唯一自然の豊かさだけが慰めである。まだまだ未熟でここのことを良く知らないためであろう。あと１０年もここに暮らせばおそらく情緒を感じるようになるNだろうな。

協力隊活動を遂行する上でも、さらに自分の人間としての生活においてもより重要である精神的環境を全体的に見ても、これまた全体的にみて満足してるという結論に達してしまう。日本にいる時より何倍ものびのびしていると自分でも感じる。余暇も、貧乏暇なし、で掃除洗濯、庭の手入れ、バイク整備なんかで休む暇もない。いつものんびりなので特に休む必要もないし、そういう生活のひとつひとつが心を休めている。でもやっぱり、遊園地やデパートは懐かしいなあ。

さて、より充実したケニア滞在を送るためガールハントにのりだそ。

〈MONTHLY REPORT（月間報告書）より〉

MONTHLY REPORT OF OCTOBER 1994

2ND NOVEMBER, 1994

WHAT I DID

1.Accompanying the film shows

I accompanied with all film shows but one. The shows lasted almost a month from 5th October to 24th October. I accompanied the shows to help to arrange, to prepare and to take record. In the month film shows are all what I did.

COMMENTS

I was able to know the procedure of the film shows. Thanks to all the staffs, I had no serious problem during the shows. In these film shows I mainly learned from other staffs. Although the job was very hard sometimes, the staffs always did their best. However I could see some points which should be improved and want to make them better in the next. The details are in the report on the film shows.

PLAN FOR NEXT MONTH

1.Reporting on the Film Shows

The film shows ended on October 24th. I will submit the report on them to DPO and PEPP. Also I will send the records and the thanking letter to the agents which organized the venues for the film shows.

2.Reading the rest of main files

I will read the files of P.C.E.A.Chogoria Hospital and Tyuyani Community Programme, which are major agents of Family Planning in the districts.

3.Making Statistics

I will prepare statistics of Family Planning clients of each agent so that we can focus the target of our activities. This is supposed to be one of my main jobs.

4. Visiting all agents which offer Family Planning activities

After I get motorbike in early this month, I want to go to every agent which offer family planning activities in Meru,Tharaka-Nithi and Nyambene Districts and see the staffs so that I can understand the condition of Family

Planning activities in the area, what they need and what we can do for them. And sometimes I would like to accompany with CBD agents to village and attend the seminar for CBDs to know at least the knowledge for Family Planning.

REPORTED BY KENJI SASAKI

月間報告書とは…

月ごとの活動内容、それについてのコメント、翌月の活動計画をまとめた報告書である。活動を記録として残し、自ら振り返ると共に、上司が活動の内容を的確に把握できるよう報告書としてまとめていた。また、よりはっきりとした翌月の計画を立てることを目的として、配属先の人口事務所に毎月提出していた。

〈ＢＲＩＥＦ　ＲＥＰＯＲＴ（ブリーフ・レポート）より〉

BRIEF REPORT

21st NOVEMBER, 1994

TOPIC : Group Supervision of CBD agents of FPAK
DATE : 17th November, 1994
PLACE : Igoji Outreach Clinic of FPAK

GROUP SUPERVISION

One of the CBD field worker of FPAK Meru clinic held a group supervision on 17th November, 1994 for her supervising CBD agents who cover Igoji Division. Three out of four CBD agents in the area gathered to Igoji Outreach clinic.

Each agents showed the record to be consulted. They visited about 50 clients during the month. Most were revisit clients, but they had some new. They did not have any problems to do CBD activities. I did not find any significant difference from the group supervision which I attended the other day.

The CBD field worker insisted on keeping proper record for the reference. She wants CBD agents to get more clients who visits clients for their check. Also she hopes there are more clients who accept surgical contraception.

COMMENTS

The meeting was held in Igoji for convenience of the CBD agents. FPAK operates an outreach clinic here in Igoji once a month. A staff of FPAK wished that they would built what is called a community health center, where information about family planning are offered and people can visit every time they want. I do not know if there is the demand or if it would operate effectively.

The problem, if it can be called, which I felt in the meeting is that the CBD activity and the clinic are not linking so much. Few of the clients visited by CBD agents have attended the clinic. As the clinic is being operated once a month here, it may be considered to relate each other. Although the CBD activity is successful here in terms of providing contraceptive methods to local people, I think it will be promoted if there is more relation with the clinic.

Anyway I was able to see that the CBD agents are welcomed by the community and need to keep their service for the community.

Reported by Kenji Sasaki
Assistant District Population Officer
District Population Office
Meru, Tharaka-Nithi and Nyambene

ブリーフ・レポートとは…
関係諸機関の活動を訪問したり、セミナーに参加した後、その内容とそれについてのコメントをブリーフ・レポートとしてまとめ、上司に提出していた。細かい内容と、時には辛辣なコメントを記した６つのレポートがある。

〈FILM SHOW RECORD／REPORT（フィルム・ショーの記録）より〉

FILM SHOW RECORD 16

Recorded by: Kenji Sasaki

DATE: 26/ 2/1995 (Sun.)　　TIME: 2.45 p.m. - 5.45 p.m.

ORGANIZER: Ministry of Health Nyambene District

VENUE: Laare Socio Hall

DISTRICT/DIVISION/LOCATION/SUB-LOCATION:
Nyambene / Laare / awtuaukui / Ntunmuo

FACILITATOR(ORGANIZATION.TITLE):
Shadrack M. Kaleli (PEPP)

OTHER STAFFS:
Dr. Thiakunu (Medical Officer of Health. Ministry of Health Nyambene)

PARTICIPANTS'
TYPE: Public
NUMBER - YOUTH: 180　MALE: 370　FEMALE: 350　TOTAL: 900

TITLE OF THE FILMS:
Wajibu ni wa nani? / Sio Mimi

OBSERVATION:
The venue was a socio hall which is 30 minutes distant from Maua town through dusty rough road. As it was in Laare market place in Sunday afternoon. a plenty of people gathered after the announcement in the market. This time not only women but also a lot of men came to see the films. The hall was so large that we had a difficulty to make it dark.

We showed two films to participants filling the hall. As a person died because of AIDS in the area recently. participants were interested in AIDS film and eager to ask questions after the film. The facilitator were good at making the participants laugh and attracting them. Also with the explanation of the doctor the participants were really satisfied.

The only thing to be considered in the show today is the duration of a show. Because it lasted 3 hours. more than one third of the participants had gone before the show ended. It was too long to keep concentration. The speech of facilitator tend to be long.

QUESTIONS FROM PARTICIPANTS:
1.How can we know that a person has AIDS?
2.Why don't mosquitoes spread AIDS?
3.Is AIDS transmitted through sharing daily life with AIDS person?

CONTINUING TO THE REVERSE

フィルム・ショーの記録について…

1994年10月と1995年２月に行われたフィルム・ショーについて、１回ごとの記録が、配属先の人口事務所とＪＩＣＡ人口教育促進プロジェクトに提出された。記録用紙には場所・スタッフ・参加者の人数とタイプ、見せたフィルムに加えて、それぞれのショーについての考察が克明に記されていて、その様子が手に取るようにわかる記録である。

〈チョゴリア病院での講義用参考資料より〉

I. INTRODUCTION

*The population problems are not very new. But
They are closely linked with other soci-
solved.

*The too rapid population i-
problems related to t
the
- Health
- Water
- Land
- Poverty
- Education etc.

*Global issue. Country issu

"PROBLEMS OF RAPID POPULATION INCREASE OF KENYA"

LECTURE DELIVERED TO PARTICIPANTS
OF THE TRAINING OF TRAINERS' COURSE
HELD BY P.C.E.A. CHOGORIA HOSPITAL
COMMUNITY HEALTH DEPARTMENT

AT TRANSIT MOTEL AT CHOGORIA

ON 22ND MARCH. 1995

BY

KENJI SASAKI

ASSISTANT DISTRICT POPULATION OFFICER
MERU. THARAKA NITHI AND NYAMBENE DISTRICTS

SOCIOLOGIST
JAPAN OVERSEAS COOPERATION VOLUNTEER
JAPAN INTERNATIONAL COOPERATION AGENCY

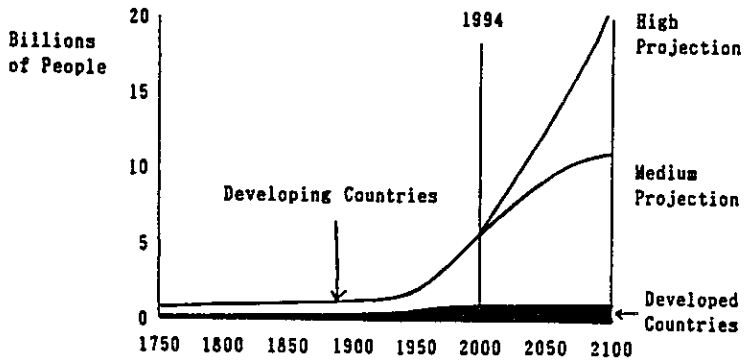
P.O.BOX 2434 MERU

II. POPULATION TREND

1)World trend
*Rapid increase of the world populat
- More than 90 million people are
population.
- The population of developing coun
increasing rate remains as it is t

*High population increasing rate in devel
developed countries
- More poor people the rich are added t

Past and Projected Population Growth of the World, 1750-2000



- 1 -

講義用参考資料について…

１９９５年３月２２日、コミュニティ・ヘルスワーカーのためのセミナーで講義をした時に、参加者に配った資料。全７ページの内容は、序章に始まり、人口の最近の傾向（世界、ケニア、日本）、人口増加の影響（社会経済的、環境、生物学的）、原因と解決、そして哲学という５つの章にまとめられている。

〔レポートからの抜粋〕

94年９月１日：国家人口開発審議会メルー人口事務所へ赴任
まず、事務所にあるファイル、レポートなどの資料に目を通す。

〈コメント〉
資料を読むことで、家族計画の活動により興味がわいてきた。まずは、CBD（地域普及員）などの草の根レベルの活動について知りたい。また、政府やそれぞれの団体の政策方針にも興味がある。そして、メルー、タラカニティ、ニャンベネ、３ディストリクトにおける家族計画と人口に関する活動の状況全体を把握したい。
〈計画〉
＊各団体の家族計画利用者の統計を作り、活動のターゲットをしぼれるようにしたい。これが私の主な仕事のうちのひとつになるだろう。
＊すべての団体を訪問してスタッフに会い、この地域での家族計画活動の状況を把握し、彼らが何を必要としているか、私たちに何ができるか、を知りたい。さらにCBDと一緒に村を訪れたり、CBDのセミナーに参加することを考えている。
－1994年９月・月報告書より抜粋

94年10月5日～24日：フィルム・ショーに同行　（12日、５団体、20カ所）

〈コメント〉
全体としてフィルム・ショーはうまくいった。20回の上映会で約3033人の参加者があった。上映会が開かれたのはメルー、タラカニティ、ニャンベネ、ディストリクトのおもに田舎であった。フィルム・ショーは、人々が家族計画や性教育、エイズについて考える手助けになったと私は信じている。
－1994年10月フィルム・ショーレポートより抜粋
＊ほとんどが女性でそのうちの半分ぐらいが、赤ちゃんを抱いていた。男性は女性から離れて、かたまって座っていた.(5/10)
＊会場は山のなかでそこまで行くのはとても大変だった。田舎であるにもかかわらず、多くの人たちがフィルムを見るために集まってきた。人々の数は、会場(教会)の収容能力を超えていた.(6/10)
＊生徒たちは手にペンとノートとを持ち、真剣にフィルムを見ていた。教師は私たちにぜひ、また他のフィルムを見せに来てほしいと頼んできた。道徳教育のフィルムを見せたいという。生徒たちに道徳教育は不可欠であろう。(7/10)
＊参加者からの質問のほとんどは、エイズに関するものだった。生徒たちにとってはエイズはまだ興味の対象であって、彼ら自身の問題となっていない。(12/10)

＊フィルムを見せているあいだ、参加者はとなりの人と、その内容について話ながら、見ていた。たまに、フィルムに対してやじを飛ばしていた。彼らは大変リラックスしているようだった。おもしろい場面がくると大声で笑っていた。たぶん、これは夜だったからだろう。(12/10)
＊フィルムが長すぎて、彼らの興味を引くものではなかったため、半ばで４分の１の参加者が教会から出ていってしまった．マウア病院から来たファシリテーターはすばらしかった。彼は参加者から意見を引き出すのが大変うまかった。自分が話すのではなく、参加者に話す機会を与えた。最後に参加者から歌まで出た。(15/10)
＊イギリスからのテレビクルーがショーを撮影しに来た。(24/10)

－フィルム・ショー記録より抜粋

94年11月 7 日：FPAK（ケニア家族計画協会）のCBDの“グループ指導”に参加

FPAKのCBD地域担当者が月に１回、CBDのからの相談を受けるためにひらくミーティングである。指導員はCBDに、しっかりを記録をつけてより良いサービスを供給できるようにと助言した。さらに、新しい利用者には、渡された避妊用具についての正しい情報を与えるように指導。また、再来の利用者には避妊用具の効果を確かめるようにと強調した。個人指導をしている間、CBD地域担当者とFPAKの活動について話をすることができた。

〈コメント〉
このような毎月のミーティングは不可欠である。各CBDの問題を解決するのはいうまでもなく、彼らの経験を一般化し他のCBDからも学ぶことができるからである。また、指導員やクリニックにとっても活動地域の状況を把握するうえで不可欠であろう。メルー、タラカニティ、ニャンベネ、ディストリクトで家族計画活動をおこなっている機関の活動を知るために私はこのようなミーティングにどんどん参加していきたい。

－ブリーフ・レポートより抜粋

94年11月 9日、10日：FPAKの“出張クリニック”に参加

FPAKは９つのクリニックで月に17回の出張クリニック・サービスを行なっている。最初の日は、家族計画のサービスを提供するためにキブリネ診療所へ行った。そこはメルーの町からそんなに遠くはないのだが、道の状態が悪かったため到着するのに２時間近くかかった。FPAKは月に１度ここでサービスを提供する。この日は100人以上の人たちが家族計画サービスを受けにやってきた。次の日はンクブで出張ク

リニックが行なわれた。ここでは月に８回サービスが提供されている。そのうちの１回であるためか、利用者の数は少なかった。出張クリニックでは外科的方法とノンプラント以外のすべての避妊用具を供給することができる。しかし多くの利用者はピルを受け取っていた。男性もサービスを受けることができるのに利用者はすべて女性であった。医療器具や避妊用具はメルーのクリニックから運ばれていた。

〈コメント〉

出張クリニックを行なううえでの最も大きな問題は、道路の状態であろう。キブリネ診療所に行くのは雨季ではほとんど冒険のようなものである。そしてほとんどのクリニックへ行く道があれと同じようなものだそうだ。これ以外には大きな問題はなさそうである。利用者は、継続的に彼らの所にサービスが供給されることを望んでいる。彼らは、FPAKの出張クリニックに来ることをとても喜んでいた。家族計画の状況と利用者の考え方を知るために、これからも、ときどき、出張クリニックに参加したい。

－ブリーフ・レポートより抜粋

94年11月14日、15日：PEPPのケニア人スタッフとともにフォークメディアの視察

〈コメント〉

チョゴリア病院とマウア病院を訪れた。両方ともフォークメディア部門をもっている。彼らはフォークメディアを人々にメッセージを伝える有効な手段としていた。最初の日にフォークメディアのグループに会う機会を得、ダンスと歌を披露してもらった。このとき初めて、私はケニアのフォークメディアを見た。これは一般大衆に情報を伝えるために、広く使われることができる。人々を寄せつける魅力があるからである。グループと積極的に連絡をとり、フェスティバルのようなものを開くことができれば良いと思う。

－94年11月・月報告書より抜粋

94年11月25日：FPAKのCBD月ミーティングに参加

〈コメント〉

このミーティングは私にとって、すべてのCBDに出会う絶好の機会だった。私はCBDの人たちと彼らの活動を良く知りたい。というのは彼らが、直接に、コミュニティや村の人々につながっているからである。家族計画活動の状況を把握するためにはCBDたちと話をし、一緒にフィールドを回るのが一番良い方法であろう。私はそのような機会を出来るだけもちたい。

今日のミーティングの主要議題であった自発的外科手術避妊法については個人的にとても興味をもっている。私自身、外科的な避妊法は受け入れたくないからだ。こんなにも多くの人がそれを受入れていることに私は驚いた。もう一つ気づいのは家族計画はほとんど女性に頼っているということである。精神的にも技術的にもである。これはまさにジェンダーの問題といえる。

－ブリーフ・レポートより抜粋

94年12月 1日～ 5日：カカメガへ視察旅行

同職種の隊員が働いているカカメガを訪問した。カカメガはJICA/PEPPの２つのパイロットエリアのうちのひとつであり、エイズ・フォークメディアフェスティバルが12月1日に、JICA/PEPPのスポンサーで開催された。フェスティバルのほかに、カカメガ・ショー，FPAKカカメガ、エンザロ村（JICA/PEPPのパイロット村でクリニックが建てられ、いくつかの活動が実行されている）を視察した。

－1994年12月・月報告書より抜粋

〈コメント〉

フォークメディアフェスティバルは人々にエイズについて多くのことを教えたに違いない。これは一度に2000人に語りかけることのできるすばらしい伝達手段である。しかしメッセージを彼ら自身のものとさせるためには、持続的な努力が不可欠である。たった１回の大きなフェスティバルより小規模なものを何回かやるほうが効果的なのではないか。

エンザロ村の訪問はとても勉強になった。人々が現金収入活動のために一生懸命働いているのを見ることができた。また、あっというまに村じゅうに広まったという、熱効率のよい改善ストーブも見ることができた。活動は大変うまく実行されていた。しかしエンザロでうまくいったことすべてが、キピリチアにそのまま適応することができるとは思わない。修正されるべき点もあるだろうし、全く新しいアイデアも必要である。全くちがうアプローチが必要になってくる。

カカメガショーはナイロビショーの縮小版のようだった。NCPD（国家人口開発審議会）が活動を見せるブースをもっていてフィルムを見せていた。

FPAKはメルーとカカメガを比べて大きな違いはなかった。

カカメガの人々、町の様子はメルーと違っていて、楽しい旅だった。

－ブリーフ・レポートより抜粋

94年12月：キビリチアを２回訪問

JICA/PEPPはすでにあった保健省のクリニックを拡張しており、そこを家族計画の普及及び、地域開発のセンターとして使おうと計画している。
最初にそこを訪れたときは、雨のために道の状態が大変悪く、ほとんど行くのが不可能であった。２回目に行ったときにはもうすでに建設がはじまっていた。コミュニティの若者たちが建てものの基礎工事にとりかかっていた。多分完成予定日までに終わるだろう。楽しみである。

－1994年12月・月報告書より抜粋

94年12月：家族計画活動に関係する団体を訪問

メルー、タラカニティ、ニャンベネ、ディストリクトのいくつかの家族計画に関係する団体を訪問した。保健省、農業省、文化社会事業省、FPAKメルークリニック、チョゴリア病院、マウア病院のスタッフに会った。これらの団体を訪れスタッフに会ったことは、最も来年の活動につながることだと思う。私は、家族計画、人口、エイズに関わる、すべての団体の活動を視察したいと考えている。来年は今年以上に彼らの活動に加わっていきたい。

－1994年12月・月報告書より抜粋

95年１月：フィルム・ショーの用意、各団体訪問

ほとんどの時間を２月13日から28日にやるフィルム・ショーのための準備についやした。私はひとつのショーもやりそこなうことがないようアレンジしようとがんばった。協力を頼んだ団体はみな協力的だった。今回はメルー、タラカニティ、ニャンベネ、ディストリクトの13の団体とともにショーをおこなう。
これと同時に、各団体の活動や組織の一般的情報を、得ることができた。私が訪れたのは以下の団体である。メルーでは、FPAK，保健省、農業省、文化社会事業省、マリーストープ・クリニック。タラカニティでは、チョゴリア病院、保健省、農業省、文化社会事業省。そしてニャンベネでは、マウア病院、フォスターペアレンツプラン・インターナショナル、保健省、文化社会事業省。
〈コメント〉
私がこれから働くことになる主な団体を訪問し、そのスタッフと話をすることができ、よい、年のスタートだった。しかし、今月、見ることができたのは活動の表面だけだったので、もっと深く活動に参加していきたいと思う。私に協力してくれる人たちにとても感謝している。

－1995年１月・月報告書より抜粋

95年１月25日～27日：チョゴリア病院・地域医療部門の計画セミナーに参加

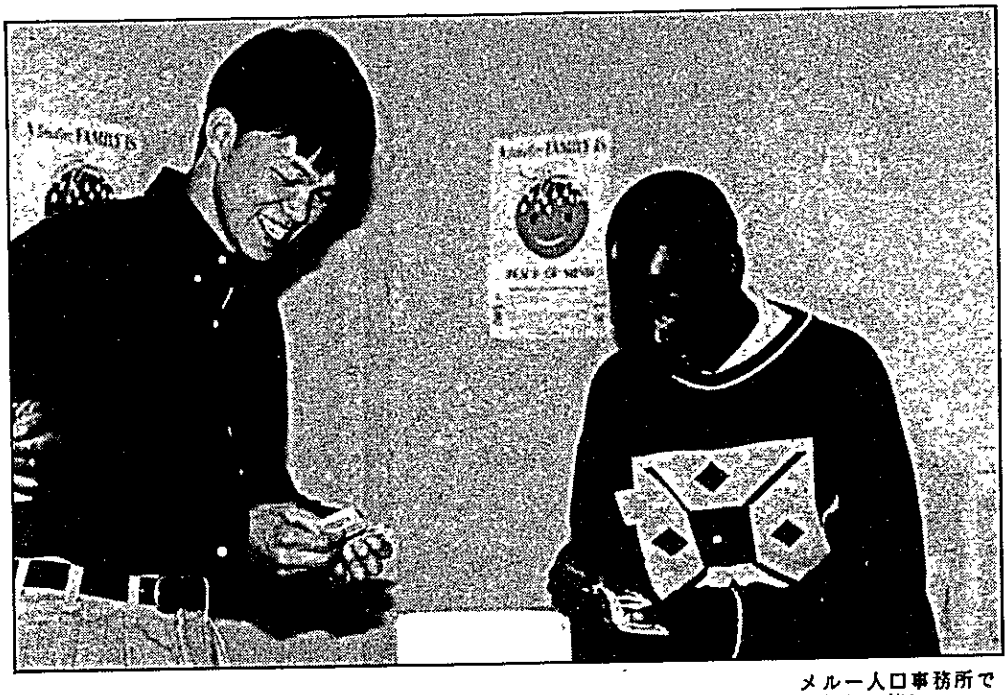
チョゴリア病院の地域医療部門の計画セミナーに参加した。ここはディストリクトのなかでもっとも重要で、最も影響力のある家族計画団体のうちのひとつである。エンブのツチリバーロッヂで23日から27日まで開かれた。私は、後半の３日間に参加した。私にとって、この病院の活動を包括的に理解する、絶好の機会だった。

－1995年１月・月報告書より抜粋

セミナーの目的は、今年の活動計画をたてることだった。この目標は実によく達成されていた。このセミナーは、私にとって、今年彼らとともに働き、活動に参加する上でたいへん役立つものであった。このような機会を他の団体ともももっていきたい。また、このセミナーで、今度、コミュニティ・ヘルス・ワーカーのセミナーで私に人口増加の社会的影響について講義をする時間をくれると約束してもらえたことも収穫のうちのひとつである。　　I will do my best.

－ブリーフ・レポートより抜粋

♠ ♠ ♠ ♠ ♠ ♠ ♠ ♠ ♠ ♠ ♠ ♠ ♠ ♠ ♠ ♠



メルー人口事務所で
同僚と一緒に

95年２月13日～28日：フィルム・ショー　(18日、10団体、18回)

＊会場はマウアの町から岩がごろごろしたラフロードを15キロほど行った小学校の大教室だった。参加者からエイズについての質問がたくさん出てきた。同行した医者がこれらの質問に分かり易く答えてくれたので参加者は満足していた。彼の知識や経験だけでなくメルー語を話せるということが、参加者にとってより受け入れやすかったのだろう。(13/2)

＊今回は、プロジェクターが故障したため、ビデオをテレビで見せた。このため、同じ会場で前日に予定していたショーは行なうことができなかった。

＊会場はセカンダリースクールだった。教師たちは、10代の望まない妊娠や性感染症といった生徒たちの間の問題を良く知っていた。彼らは性教育とエイズのフィルムをとても喜んでいた。(23/2)

＊この地域で最近エイズのために亡くなった人がいたために、参加者はエイズのフィルムに興味をもちフィルムのあと、熱心に質問をしていた。(26/2)

ーフィルム・ショー記録より抜粋

〈社会学分科会の記録より〉

第１回　社会学分科会勉強会報告

12TH APRIL, 1995

日時　1995年１月４日
7:00 P.M. - 11:00 P.M.
場所　杉田顧問宅
出席者　西村隊員、佐々木隊員、山口隊員、杉田JICA職員

テーマ　1.社会学分科会発足にあたって方針決定
2.人口、家族計画

社会学分科会方針

各会員の自己紹介からはじまり、国際協力の道を選んだ理由、個人の活動方針、最も興味ある分野などについて意見交換し、今後の分科会としての活動方針を決定。他の会員の協力活動に携わる態度、決意を聞くことは各会員にとって非常に良い刺激となった。

以下の会員をもって発足となった。

	氏名	隊次	職種	任地	
1.	西村由実子	５年度３次隊	社会学	カカメガ	（会長）
2.	佐々木謙次	６年度１次隊	社会学	メルー	
3.	山口綾	６年度２次隊	村落開発普及員	キツイ	
4.	杉田映理	ＪＩＣＡ職員			（顧問）

また、今後の計画について以下の事項が決定された。

- 各会員の活動に関する情報交換、意見交換を主とする
- １、２か月に一度の定例勉強会
- 各会員の興味ある英語文献を課題図書とし、勉強会までに熟読
- 勉強会では課題図書とその周辺事項について議論
- 積極的に外にアピールし、外からの意見を取り入れるため会報の発行
- 外部団体との交流、研修旅行
- その他、会員の協力隊活動にプラスとなる活動を積極的に行う

人口、家族計画

今回の課題図書 Gugulethu gule, 1994, "The State of Population in Sub-Saharan Africa" African Population Paper No.2, African Population and Environment Institute を題材として開発における人口、家族計画の問題を議論。課題図書からはサブサハラアフリカにおける家族計画の流れと行方を概観する。会員のうち人口、家族計画活動に携わっているものから実際の活動についての報告があり、ケニアにおけるそれらの実態をつかんだ。人口活動に携わる２会員にとっては、普段聞けない家族計画に対する意見を聞くことができ有益であった。

REPORTED BY KENJI SASAKI
MEMBER OF JOCV (6/1)

社会学分科会とは…

社会科学系の知識・技術をバックグラウンドとして持つ人が集まり、情報を交換する事によって、それぞれの知識・技術の向上をはかる事を目的とした会である。佐々木君が中心となって１９９４年１２月に発足され、勉強会・会報発行などを主な活動としている。

〈社会学分科会の会報“ＰＥＯＰＬＥ”より〉

P O P U L A T I O N　I N　K E N Y A　- WHAT IS THE PROBLEM? -

TREND

Population means nothing but the number of people in a certain area. But now a lot of problems relating to it have arisen especially in developing countries, when we focus on population in the area of a country. Here the population of Kenya is dealt with.

Table 1　DEMOGRAPHIC ASPECTS OF KENYA

	Kenya '48	'62	'69	'79	'89	'94	Japan '94
Population (million)	5.4	8.6	10.9	15.3	23.5	26.1	125.0
Fertility Rate (children / woman)	6.7	6.8	7.6	7.9	6.7	6.3	1.5
Crude Death Rate (people / 1000)	25	20	17	14	12	10	7
Life Expectancy (years)	35	44	49	54	56	59	80
Pop. Growth Rate (% / year)	2.5	3.0	3.3	3.8	3.5	3.4	0.4
Pop. Double time (years)	28	23	21	17	18	20	---

Table 1 shows the demographic trend in Kenya. The population is rapidly increasing since the first census was done in 1948. Though the growth rate has now little slowed down, 3.4% is still among the highest in the world. The population will double in 20 years if the trend continues. The table indicates development in a meaning. It is considerable that death rate and life expectancy have been constantly improving, which brought population expansion.

On the other hand Japan has almost 5 times as large population as Kenya with two third area in size. And the population in Japan will never double, but will decrease because the average number of children for a couple has dropped under 1.5. The number of children for a couple less than 2 cannot keep the number. This seems to be a problem more than population growth in Kenya.

PROBLEMS

However, problems are lying in Kenya. What is most problematic is the rapidity, not the number itself. Figure 1 compares the increasing speed of people's number between two children per couple and 6 children. This difference comes up in 100 years. And it exists between developed and developing countries. Japan has the figure of less than 2, while Kenya has that of more than 6.

Fig.1　SPEED DIFFERNCE OF POPULATION GROWTH

generation	children number per couple 2	6
1st	x x	x x
2nd	x x	x x x x x x
3rd	x x	x x x x x x x x x x x x x x x x x x

No problems would happen if other social and economic constituencies could catch up with it. However who can predict that food supply, medical system, educational personnel, economy, water, job opportunities and everything would double in 20 years? Otherwise people have to be patient with lower living standard. Even today they cannot be said "sufficient".

Even if the country attains striking development, the population increase wipes out it. Table 2 presents some evidences. All of food, health and economic situation have noticeably improved even among the world within during the mentioned period. 1.5 times of food production in 10 years and 4% of annual economic growth are not bad figures. But when figures per person are calculated, no improvement or less improvement is seen. Population explosion makes people stay in underdevelopment.

Table 2　DEVELOPMENT AND LESS DEVELOPMENT

Food '90 ('80 = 100)	
Crop product	146.3
Crop product per capita	98.7
Health '70/'84	
Population per bed	569/632
Economy '80-'92	
GDP annual growth rate (%)	4.0
GNP/capita annual growth rate (%)	0.2

The problem is the balance between the speed of population change and that of other elements' shift. In this meaning Japan may also have a problem. Rapid reduction of children's number and rapid change to aged society as its consequence might not be able to be followed by social system.

The figure 2 is what is called a population pyramid. It shows the ratio of each age group. The part of oblique lines indicates the portion of dependent people. In Kenya rapidly increasing children become a large burden, while people over 65 in age occupy large part in population of Japan.

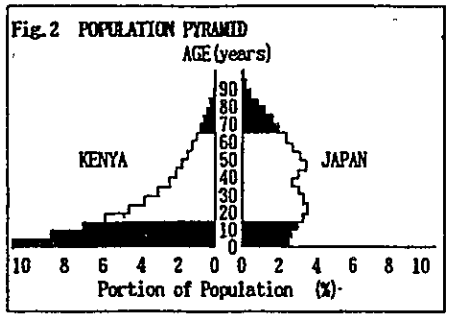
FAMILY PLANNING AND OTHER SOLUTIONS

The reason why the population is increasing so rapidly is the rapid drop of death rate and remaining of high birth rate. Here family planning arises as a main solution. Family planning users occupy 33% of married couples in Japan and 64% in Kenya. There are still large prevalence of unmet

- 4 -

“ＰＥＯＰＬＥ”とは…

社会学分科会の活動の一環としての機関誌であり、佐々木君が編集長をしていた。第１号の会報は４月１２日に発行され、ケニアの人を含めた、多くの人達に読んでもらおうと全文英語で書かれている。



needs for contraceptives in Kenya. It cannot reduce the population but stop exploding. It will surely prove its effectiveness in future. We have to think of our children and later generation to be in the better country. We can not steal from our posterity.

At the same time, we have to consider to solve the present problems related to already largely expanded population. We try to make balance of social components with population. First of all a system to convert the overflowed or added people into labors who can be engaged in productive activities. Every human cannot only consume but has to produce something. It must lead to development. It is too large to be achieved easily, but it should.

In smaller scale it terns into education system. No one can deny that the basic 3 Rs are essential for cultural life. But after those Kenya need a very different type of education from that of developed countries. Developed countries already have a system of employment. Each school graduate can get a job in a company or an organization and, he/she have only to work in it, which offers instruction to him/her. On the other hand there are few employments in Kenya. They are required to create jobs by themselves, not to follow others' instruction. Otherwise they are patient to remain in the same position. Different skills and knowledges are desired in this situation. What is called enterprise mind or something else are necessary and an educational system which promote such skill are desired.

WHAT CAN WE DO?

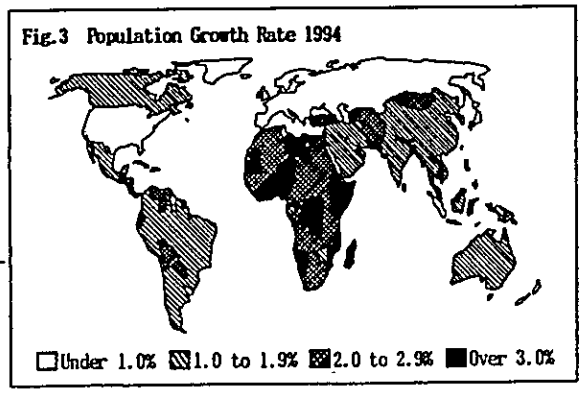
The problems related to too rapid population growth started when rapid decrease of death rate began. Death rate took 150 years to decrease from 25 people per 1000 to 10 in England, while Kenya made it in less than 50 years. And it was not until 50 years have passed that the birth rate followed the death rate, while Kenya has spent only 50 years since death rate commenced decreasing.

Better nutrition, medical improvement and promotion of public hygiene, which are the main cause of death rate falling, are easily adopted. On the contrary, contraception and its concept, in terms of controlling the number of children, have not been accepted as easily.

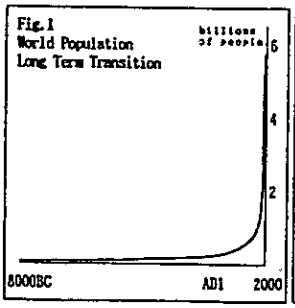
Is it only a matter of time? May it automatically follow the trend of developed countries if the enough time is given? Here the idea of non-interference comes up. However grave problems exsist. It is sure that it takes long time, which cannot be a reason why we leave it. There is no doubt that it is time to take actions.

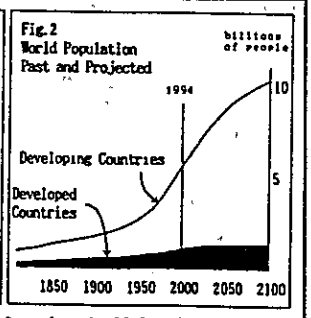
Concerning solutions, it is a fact that the idea to control population have been very top-down. The idea of small family for better living was given by developed countries or by the country center to local people at first, like the helthier life came from outside. Still most of contraceptives are from outside Kenya, most of which are provided as an aid. What can we do in terms of sustainability? How shall we change to bottom-up? It should be most emphasized. When all local people notice necessity of family planning and demand contraceptive, it is already time next to terminal of the problems relating to rapid population increase.

Anyway population problem is the most serious problem. We cannot leave it. From the large view point, as the map points out, it is a north-south problems. It is relating to development. It is relating to living standard. It reflects life of every person, in another word, everyone has to consider it. The objective of human beings is not only to live but to live healthily and happily. We have to cope with population to overcome the difficulty to live better. (Sasaki)



IMPACT ON ENVIRONMENT





What do you learn from the right two figures?

Figure 1 proves that the rapid population increase is a recent phenomenon comparing with two million history of human beings or even with ten thousand history of agricultural life. As we know, the earth is sole and resour cesthere are limited. Yet annually added 90 million people must take a portion of earth for their food, shelter, energy, water and so on. What will happen when we reach the limit of these things? Are we speeding up to end of human beings?

Figure 2 shows that the main part of world's population growth is that of developing countries. But who can tell them to stay in that position? Developing countries shall not be developing countries any more in future. And remind that a person in developed counties is consuming nine times as much energy as a person is using in developing countries now. What if all the developing countries attain the life style of present developed countries? Imagine the hugeness of population impact on environment.

Air, water, forest and soil have been thought as renewable resources until recently, while exhaustion of coal and oil has been warned. In these days, however, we noticed that they may not be able to renew with present too rapid population growth. We not only eat up the resources but also discharge wastes and pollutions. It changes even climate.

In most developing countries deforestation is one of the gravest problems. More and more people cut trees for fire wood, which is essential to keep their lives. Population pressure brakes the cycle of traditional slush-and-burn. Once cleared land takes unimaginably long time to recover. Deforestation brings water shortage and land sterility. It destroy human life. But we have learned the idea of sustainable development.

Shall we stop development? Shall we back to the past? What actually shall we do? (Sasaki)

Talk on population (Cont. from Pg.3)

sexual issues were talked on in its context. Though "population" is usually followed by "contraception", it will prove its effectiveness on population in future. As already we have problems, we have to think of today as well as future. The concept of population issues are very broad. Family planning is very important, but not only that but also life improvement, job promotion, agricultural development and so on are necessary.

Sasaki : As well as population is a personal issue, it is a family, village, country and global issue. We cannot deal with it alone. Well, as a conclusion of this talk, I would like to hear your plan as a volunteer engaged in population at district level.

Yumiko : I know that I can never attain a big thing under such a magnified problem. I would like to do activities which allure my soul. I like to devote myself in dissemination of family planning and AIDS with folk media ,and also peer counseling. These are the activities in which the local people play the leading parts. I would like to involve as many usual people as possible to solve their problems. I keep contacting with people with whole of my mind.

Sasaki : As for me, I am interested in community development as a solution of population problems. And if possible, I want to do with street children. They are inocent, just sacrifices of family unplanning. There are many abondoned children even in rural towns. Though I can never intend to wipe out whole the population problems, I would like to play a single role in it.

Yumiko : Let's do our best. Let's keep our motto in our mind, "Love in Family, Peace in World."

(5th, 22nd January 1995, Nairobi)

Talk : Ms.Yumiko Nishimura
Assistant District Population Officer
Kakamega District Kenya
Mr.Kenji Sasaki
Assistant District Population Officer
Meru District Kenya

Editting and Translation : Kenji Sasaki

JOCV SOCIAL STUDY GROUP AND " PEOPLE"

We initiated Social Study Group among the members of Japan Overseas Cooperation Volunteers in Kenya in December 1994. Now we have four members. We wish your assistance.

We intend to learn as many things on development and Kenyan society as possible since we are concerning development activities in this country as volunteers. Majority of members have learned a social science as their background to deal with development issues and are eager to continue devoting ourselves in the field of development in their own ways in future.

We have a meeting every one or two months, where we discuss about development and social issues from the basic point and share opinions. Also we contribute many ideas for others' activities as activities are varied according to our job and place. The group is anything but exclusive. We always welcome everyone who wants to contribute his/her ideas.

"PEOPLE", the journal of Kenya JOCV Social Study Group, is designed to obtain opinions from outside the group by exposing our opinions. But we would like to emphasize that the opinion in each article is very personal of the writer, not the one of JOCV or the office which he/she belongs to. Each writer has the responsibility for the article.

To provide readers with topics to think about is also a main purpose of "PEOPLE". We hope we can discuss development matters together. We try to put people first in thinking of development. They lead us the peaceful world. The subtitle "Love in Family, Peace in World" is our motto, which was spoken out by Ms. Yumiko NIshimura the representative of Social Study Group. Although the world is so complicated that we meet difficulty to achieve it, we, human beings, are all hoping happiness in all aspects of the world.

We, as volunteers, aim at grass-root development. We share happoness and sadness with people. We are and will be still learning. We are looking forward to your kind cooperation and instruction.

(Sasaki)

WE NEED YOUR VOICE

AS "PEOPLE" is designed to provide topics of discussion and to hear variety of opinions from readers, we crucially need your letter on

- Criticisms and opinions on the articles
- Interests on the topics
- Information relating to the topics
- Inquiry of data and information
- Suggestion for the theme
- Suggestion for "PEOPLE" and our group
- Anything else.

Also contribution of articles is highly appreciated. The topics of "PEOPLE" would be

- Environment and Development
- Culture and Development
- Education and Development
- Community and Development
- Assistance and Development
- Gender and Development
- Volunteer and Development and so on.

We are looking forward to your letters either in English, Japanese or Kiswahilli. Address to

SOCIAL STUDY GROUP
JOCV/JICA
P.O.BOX 50572
NAIROBI
KENYA

I am extremely happy to have published the first issue. I have to thank all of my boss, work mates and friends. During 8 months since I put the first step in Kenya, I have met a variety of people. It is really enjoyable and educative. I'm learning about life itself with lovely Kenya people.

Our group members are very social and like to talk with people. What we feel shortest here is information. We recognized its importance. We really would like to hear your voice. We are ready to discuss with you any time. (Sasaki)

EDITOR'S POSTSCRIPT

WRITERS OF THIS ISSUE

Mr. Kenji Sasaki
Member of Japan Overseas Cooperation Volunteers
(Sociologist, Meru)
District Population Office, Meru District
P.O.Box 2434 Meru, Kenya

P E O P L E Number 1. April 1995

The Journal of
Kenya J.O.C.V. Social Study Group
P.O. Box 50572 Nairobi, Kenya

Editor
Kenji Sasaki
Yumiko Nishimura

*"PEOPLE"*ができるまで

いろんな人たちとの出会い、ひとつひとつを大切にしたい、そしてそこから何かを学びたい、そんな思いをこめて、社会学分科会会報は"PEOPLE"と名付けられた。佐々木さんはその編集長をこころよく引き受けてくれた。

本当は第1号の発行は1月の予定だった。まずは私たち社会学隊員がとりくんでいる人口問題から、ということで、開発と人口というテーマで対談を、カイロであった国際人口開発会議について西村が、ケニアと日本の人口比較について佐々木が記事を書くことになった。対談は1月5日と22日に行なわれた。しかし、記事の方は、約束の1月には二人とも何も書けておらず、2月になってもまだ‥。3月に、来月の勉強会までには必ずと約束。4月、編集長は1ページだけを残してすべてを形にした"PEOPLE"の原稿をもってきた。イメージだけはあったものの形になって出てきたのは、このとき初めてだった。しかし、約束の原稿を西村は書けておらず、今号は免除ということになった。編集長は、急いであいたページをうめる記事を書き、発行にこぎつけたのである。

名付けは早かったのにとても難産だった、この記念すべき第1号は、佐々木編集長の努力の結晶である。すべて、彼が書いたのだから。1ページ、1行、1ワードごとに彼の思いがいっぱいである。ここで、行間にこぼれ出てしまった、彼の思いのほんの一部を紹介したい。"PEOPLE"の第1面をかざった対談は3時間ほどあるのだが、彼はこれをテープにとり、すべて手で書き取った。それはノート40ページにおよぶ。"PEOPLE"に掲載されたのはその中からの抜粋である。ここでは、英語に訳す前の、彼が書き取ったままの原稿から'裏話'を抜き出してみたい。「この対談のテープが外に出回ったら大変だ」と言っていた編集長には内緒でね。

その1：佐々木隊員は土方隊員だった！

西村	これから何しようかなー。どうしようかなー。早いですからね。1年間なんてね。
佐々木	何しようかな。本当に。とりあえず僕はKIBIRICHIAの土方やろうかな。3カ月だけですけども。
西村	3カ月でできるって？
佐々木	できそう。12月30日に行ってみたらもう土台の穴は全部終って、だからびっくりしちゃった。あんなに早く。
西村	じゃあ、またあの4月くらいに開所式かなあ。私も開所式行こ。うふ。お祭り好き、とか言って。一緒に汗流せるっていいですよね。
佐々木	暑そうだけどね。
西村	これからね。あ、でも雨季になったら大変だ。
佐々木	雨季になる前に完成だって。

その２：佐々木隊員、子沢山計画！（社会学隊員がけしからん！）

佐々木	日本は本当、もっと増やせとかって言うキャンペーン開かないのかねぇ。1.4何人とかになったりして。
西村	人口、子供、どうしてるんだろうね。
佐々木	あまりあからさまにはできないけれど。だけど問題は問題だよね。それはそれで。高齢人口とか増えて。
西村	私、国民年金、払うようにしてきちゃったのに。
佐々木	本当、僕、払ってない。どうしよう。じいさんになって。誰かに養ってもらわないと。子供いっぱい作って、子供に養ってもらおっと。

その３：佐々木隊員、一夫多妻主義！（社会学隊員がけしからん！）

佐々木	（国民年金の話の続きで）まあいいや。そんな先のこと考えても。子供いっぱい作ろ。
西村	奥さんは？　１人ですか。
佐々木	奥さん、３人。
西村	３人。やっぱり、バラエティが必要なんですか。
佐々木	いや、ちょっと、子供の間隔をあけないとね。母体の健康のために。
西村	そうだよね。１人につき２人か３人ずつぐらいだったらね。

その４：ウベボに書いていた‘性欲からの文明論’その心は‥

佐々木	あ、そうだ。全然関係ないけど、前、しゃべったですね。で、その性的欲求も関係してくるって。何でててきたのかな。
西村	あの、休息年の話。
佐々木	そうか、そうだそうだ。そこでててきたんだ。性的欲求も関係してくるって言ったんよね。とそれと、性的欲求と子供を持ちたいっていう欲求があるでしょ。どっちがその人口増加率に貢献してるのかな。全然レベルのちがうものなのかなあ。
西村	人口増加率？人口問題？
佐々木	ていうか、人口抑制にしても、人口問題にしても、関係してるってかこの。今、先進国で何、FERTILITY RATEが下がったってのは別に性的欲求が変わったとかなんとかよりも、子供の数が、だけどねぇ、だけどねぇ、何が言いたいのか分かんなくなった。何かメモしているけど‥。何が言いたいのかわかんなくなった。

西村　２人子供で十分だと思っていたのに３人目ができちゃいました、ってこともありますからね。

佐々木　あるでしょ。そう、あるでしょ。

西村　でもそれは、あれなんじゃない。まれなんじゃない。

佐々木　あ、そう。先進国ではまれなんだと思う。それは。だけど、だけど、こっちでそうまでして子供の数をコントロールしたいと思っているのかどうか。だって、CONTRACEPTIVE使うの、めんどくさいじゃん。自分の性的欲求に従ったりしたら。何が言いたかったのかよくわかんないけど。

西村　何か、わかるようで分からないや。

その５：ストリートチルドレンに向けられた彼の眼差しはとても温かかった。

（これから、やりたいことの話で、）

佐々木　僕は、あとあれ、ストリートチルドレンをどうにかしたいんだけどなぁ。どうにかしたいっていうのは、何かしたい。なくすためにっていうか。あれも一種の人口問題が関わってくるからね。

西村　本当に、多いよね。あの、シングルママとかが、関係してくるからね。

佐々木　あの、あの子たち、全然本当子どもに罪ないのにきっと学校も、学校に行くのがいいかどうか知らないけど、行ってないんだろうし、‥先が見えないから。

西村　もっとしゃべってもおもしろいかもね。どうしようかな。あんだけいっぱいいるから。でも、本当言ってたよ。ここ２、３年で、ぐっと増えたんだって

佐々木　僕、ちょっとお友達になったよ。メルーで。ストリートチルドレン。あげられない、て言っても、ちゃんとあいさつしてくれるから。

西村　時々、くれる子もいるって言うよね。

佐々木　そう、僕、言ったら、SILINGI MOJAくれ、って言うから、じゃあ僕にくれたらあげるって言ったら、本当に出してくれるから、困っちゃって。あの子たち、本当、ホームを作ったらいいのかどうか知らないけど、何かしてあげたいねぇ。あの子たちが一番被害者なのかなって。